方便、諸士の魂見抜ぬ内は、無差と本心明されぬは、御尤そうじや〳〵、何分誠の御評定、承はつた其上で、左は云、漸足輕の身の上、是ぞと云功なくては、迂濶に大事は仰しやるまい、ヱ、奈何したら宜ふと、イむ彼方に潜々人音、小陰に隱忍ぶ共、知では行ぬ黑裝束、叮き點頭追手先、相圖の呼子吹立れば、御門の内より定九郎、詞「ヲ、何れもか待兼た、サア〳〵皆々早う〳〵、心得三人刺足抜足、忍入間も寺岡が、サア仕て遣た能手柄と、猶も伺ふ間もなく、銘々運ぶ千兩箱、追手の下馬先御門前、見上る計に積上たり、定九郎は聲潜、詞「是からは此金箱、殘らず屋敷へ、運んでお呉りやれ、然らば貴殿は、イヤまだ外に當家の系圖、是を竊取て跡から歸る、方々早くと云捨て、又も御門へ忍入、イザと三人立掛る、詞「ヤア何所へ〳〵盗人輩、一人も動くなと、大手を廣げ杉並を、後に圍ふ寺岡に、恟三人進退死身、サア有無を云せず仕廻て遣んと、各自に抜連切付るを、心得捷徑の寺岡が、縱横上下の太刀筋交し、右と左へ空竹大袈裟、切込む死骸は堀の内、心地能りし有樣なり、御門の内にも烈しき太刀音、シヤ氣遣しと見返る内、大星力彌定九郎、逃間追間御門前、遁れぬ背門際鈍の請太刀、節く付入力彌が手練、諸足蹇れて眞伏向、起しも立ず足下に踏へ、首を撥しと打落す、詞「ヲ、適れお手柄力彌樣、荷擔の奴輩殘らず成敗、ヲ、出來したり平右衛門、最早何宵も寅の刻、シテ積上し御用金は、ホ、ヲ領分の町人共、銀札殘らず引換の刻限、只今詰よと申渡せ、ハア行やれ

第五

好た秋草何々〳〵、葬葉鷄頭撫子、苅萱澤瀉龍膽桔梗、秋海棠芙蓉吾木香、薄黃菊露草、盤梨荻萩女郎花、斜曲どしたひ廓町、客の全盛金銀の、力に夜も晝と成、萬燈照す大寄に、笹屋が内ぞ賑はしき、奥から仲居が口の間へ、出合頭は眞圓頂、ヲ、お坊樣方、お早いと云たいが遲いお出、龜鶴秀野小作を始、藝子樣方は稠密揃ふた、お前樣方のお仲間も、離れ座敷に三十人、見へてじやぞへ、ハ、ア澤山に來て居るな、坊主天窓も、そう揃へば見事で有、ム、夫なら今夜開のある、歌の外題じや迄、メリヤ何故に、ハテ座頭氣色じやないかいな、ハ、、、、コリヤおしげ、邪亂〳〵云ずと年寄の、相寐間と仕て吳い、ソリヤ何じやへ、ハテ伴へと打笑ひ、目代賴めと足取は、探り廻つて奥へ行、祇園町から此里へ、岸の次郎三が介抱も、所緣の鹽冶縫之助、先に歩めど捗取らず、足痛氣にも見へければ、詞「申し〳〵、何とお足が痛ませうがな、それで私が内から駕籠に成されませと云物を、サイノウ私も左樣仕度つたけれど、餘り世話に成のが氣の毒さ、コレハ扨其心遣が、此方は氣の毒、冷淡茶屋商賣、こそ致せ岸の次郎三と、名をしられた私、好の三味線彈掛て、さる天川屋の旦那から、お賴の那方樣、お世話申さいで何と致しませふ、それはそうと、彼お尋成るゝ女中の事、色々と諸方を、聞合して見ますれど、

知悪ふざけるはいの、サア去年鎌倉より、登る途中にて、眸と太夫を、奪取れしが、若其時の奴輩が、人商人で有たなら、可愛や太夫は、遠國へも賣渡され、仕馴ぬ苦勞を、仕て居で有うかと、案じ暮すも恰度一年、但しは零落しを見限て、何所ぞに穩密樂んで、居りはせぬかと、心の僻、憎うも有又、可愛ふも有樣は、現で暮すと涙哺、内から見付る女子共、圖ヲ、縫樣か能お出、次郎樣は遲ひ、お出じやな、お前故に座敷はやくたひ、歌開きに手を付た、肝心の先生が、遲いとて夫は〳〵、由良樣の強疳癪、ヲッと合點最う行ぞ、イヱ〳〵最うでは濟ぬ、お二人ながら座敷へ早う、サアお出、コリヤ〳〵由良之助に、吾は逢悪ひ、小座敷から聞て居やう、次郎三は早う奥へ行きや、ハイ〳〵左樣ならばと云内も、闇敷仲居に急立られ、二人は別れ入にける、時雨〳〵が染盡す、黐葉の小枝銘々に、擔げさせもが露雫、濡た姿のお部屋樣、歩路行めば暮て行、秋の便や長岡の、紅葉狩して漸と、笹屋が許に歸らるゝ、實盛役の小林平八、くわを吐して尖聲、圖ア、長岡から二里餘りを、しつかい祭の遶衆同然、飄々と付歩行も、主命とは云ながら、馬鹿な詮鑿、コリヤ仲居輩、誰有ふ、高の左平太樣のお部屋付、鬼神も怖恐るゝ、朝比奈の三郎が後胤、では無れども小林平八、此度有馬御入湯の次手、是に御座るおさみの方樣を、お供申此遊里に、數日の逗留、冥加ない事だと思へさ、夫に何だ此間から、いけもせぬ木の葉玉餘魚だの、イヤ鱗子のと、乾物ものに飽果たはい、今日からは何成と、肉盡

集の馳走を仕居らふ、身共に當りが悪いが最期、爲にならぬが合點かと、土氣離れぬせんぶり客、苦い詞に藝子の操、ヲ、野夫、其樣に熱云ずと、少と愛氣を持しやんせ、ノウお幸殿、サイナめんよう、藝子樣方や、仲居を苛待辨慶根性、其樣な事云しやんすとな、甲州壹歩と異名が付ぞへ、ナンダ身共を甲州壹歩とは、ヱ、聞へた、性が善と云ので有ふな、イ、ヱ何所へ遣ても、頓と行ぬと云事じやはいなア、此奴が〳〵、諸侍を嘲弄ひろぐか、サア今一言吐して見居らふ、音骨切て切下ると、鍔打叩けばおさみの方、ヲ、時代やの其樣に、四角四面に見せ掛ても、爰に居る此操に、其方惚て居やらうがの、イヤハヤ是は存じ掛ない御詞、弓矢神にも照覽有れ、且以て左樣の覺は、イヤ〳〵無とは云れぬ是此文、操樣まいる、思ひに繁る小林より、卒度拾ふて置たぞや、ハテサテ是は迷惑千萬な、イヱ〳〵左樣は脱させぬ、夕邊も廓下の暗許で、一度でも大事ない、言事聞て呉たなら、市松人形に、貴樣と己とが紋付た、衣裝も一所に誂へて、頭の道具も望み次第、買て遣の何の彼のと、空可忌い事のあり條、コリヤ〳〵〳〵藝子め、つか〳〵と何吐す、身共は一切覺はないぞ、覺えないぞと白眼でも、小氣味の能に仲居共、詞「ヨウ〳〵思ひに繁る小林樣、ア、是りや〳〵、最宜わいやい〳〵、是じや〳〵と縮々舞、眞面に成てしよげり入る、詞「ホ、、、、、アノ無術そうな顔わいの、夫たが色事せぬ男は、玉の盃に底がないと、兼好主の面白い言方、折角心を盡しやつた此文、其方へ戻して遣程に、直接

た口説て見やと、粋な捌に熱り出し、詞「サア〳〵お赦しが出たからは、天下晴た此色事、否でも應でも叶へて貰はふ、藝子に情はない物かと、何とやら云古書に記して、有ではないか、此間から夜の目も寢ず、平八が骨髄を、盡した此艶書、コリヤ好返答を仕て給ろと、氣孫合もなき平口説、忌嫌者を懐へ、捻込濡文濡縁先、障子隙より縫之助、差覗き見て惝りし、詞「ヤアワリヤ小紫、奈何して爰へ此躰はと、嬉し懐し人目も恥ず、駈出る顔をおさみの方、見るより是はと飛立思ひ、確と對て、詞「ア、コレ〳〵〳〵遂に逢た事もない人、其方は誰じや、ヱ、コレ太夫、吾じやはいのう、アレまだいの、馴々しい物の言樣、ヱ、聞へた是りや人違じやの、イヤ〳〵〳〵何の違はふ、現在二世と云交した、サア僞も眞も有のが世界、頓と此方に覺はない、知ぬ〳〵知らぬぞや、知らず知られぬ中ならば、唄「浮涙まいもの去とては、ホ、、、、笑止な人と紛らかす、勃と急立縫之助、詞「みす〳〵な其詞、樣子が有ふ、サ、、、、樣子はと、駈寄る中を隔る平八、詞「ヤア藪の中から放とした事、吐しあがる毛二歳め、當時鎌倉の出頭第一、高の左平太樣の、お部屋に向ひ、慮外吐さば手は見せぬと、聞より猶も逆上し、詞「ヤア〳〵〳〵扨は、世になき我と見限り果、榮耀榮花に眼が昏、左平太めに隨ふたな、儕ヤア〳〵其根性とは露知らず、今迄迷ふた此身の愚さ、生畜生め人外め、何として腹直んと、胸も膨裂冒慣涙、見向も遣ず、詞「ヱ、聞へた、扨は深ふ云交した人に、別れての色氣狂じやの、コレ平

八、其儘にして置やいのう、イヤ餘りと申せば悪い雜言、宜わいの、高家のお部屋と云れる身が、兎や角ふ言程家の名折、そうじやないかと高ふ吹、風に逆立氣は半亂、最う了簡がと腰刀、扱手を駈出止る次郎三、詞「ヤア〳〵〳〵待た、イヤ〳〵〳〵最前よりの悪口過言、堪袋も破れ被れ、放せ、イヤ待た〳〵〳〵、ヒ、放せ〳〵と急切たり、詞「ヤア赦し置ば付上りのした泥坊め、括し上て屋敷へ引と、駈寄平八次郎三が止め、イヤ申是りや率頭持でござります、然も突出しの音八と云率頭、率頭じや〳〵、ムウ何が其身振は、京桝屋が仕た八郎兵衛か、是は仕たりどう云お客の、機嫌じややら知もせずに、滅多無性に張込で、勤るとは、ア、前先が見へぬ、ハ、、、、若い者と云物は、ヤア御覽じて下さりませ、イヤサ如何樣に陳じても、合點行ぬ其野郎め、引捕て詮議を遂る、ヤ、、、、其處でござります、那方に覺のない事を、混付るのが色里の悪洒落、先刻にからのは、皆お洒落じやわいな、ちやりが過ると、得て喧嘩に成たがる物じや、お客の機嫌を損なふて、行燈消れぬ其中に、又折を見て勤たが、宜さそふな物、ナ合點か〳〵〳〵、申しお客樣へ何事も、御了簡に預りますと、ちやりにこかした其場の縺れ、解どとけぬ縫之助、清だ井筒が無理遣に、連て勝手へ行跡は、寂寞た座敷を藝子の操、詞「サア〳〵仲居樣方淡泊と、呑にせうかいな、ヲ、宜らふ〳〵、其紅葉を爐に折焚、酒温めて夜と共に、咄さふでは有まいか、コリヤお部屋樣御趣向じやと、機嫌とり〳〵取卷て、勦詭奥へ入にける、

門から遲々差窺ひ、眼光らす無賴〳〵共、詞「まだ往におらぬか、ヲ、まだじやと、丼權助亂の久、爰へ〳〵と小助を招き、詞「由良之助めを屠んだら、藥師寺樣から褒美を受占る、吾は坊やに構つて居る、われは何所ぞに隱れて眼張、去る所を知せに來い、合點か合點と云合せ、出口の方へ急ぎ行、おさみは夫に眞實を、告知せたさ附々の、人目の數寄屋立出で、尋廻ると白紙の、生死危ふく後より、肩先四五寸縫之助、非力ながらも切付れば、驚きながら振返り、其儘葬と抱占、詞「ヲ、〳〵〳〵〳〵お腹の立は尤でござんすわいなあ〳〵、マア〳〵待て下さりませ、云譯が有わいなア、ヤア聞事ないと振放し、又振上れば飛退て、詞「サア〳〵〳〵心を鎮めて一通り聞て下さんせ、妾を奪ふた侍共は、皆左平太が廻し者、威しつ宥しつ、口說るゝ其愁氣さ、口惜いやら悲しいやら、直に自害と思ふたけれど、イヤ〳〵〳〵惚て居るこそ是幸、帶紐解て身を任せ、ヤア聞も中々腹立やと、怒りの刄切先へ、一卷颯と差付て、コレ是を見やしやんせ、噂を聞ば兄御樣の、お腹召したは皆師直が所爲とや、スリヤ敵討の思召は是非有こと、どうぞ御用に立たさに、穢はしい事なれど、此身を任せたればこそ、敵の樣子屋敷の案内、曲者見付た動くなと、駈出る平八切込刀、心得たりと切結ひ、氣配り目配り屋敷の繪圖、詞「表は高塀欅門、丁ど打合付廻し、折廻したる平長屋、詞「ソレ〳〵向ふに遠侍、ヲ、合點と白刄を刎、廐は馬手に的場は弓手、迂回て付入是玄關、南を請太刀たち〳〵、追つ捲つゝ手練の奥、寢所

へ渡る長廊下、渡合たる根比、何なく切伏縫之助、一息ほつと繼あへず、詞「ホウ出來した、女房疑ひ晴た、ヱ、疑は晴たかへ、嬉しやゝ〳〵忝い、此身を汚した言譯は、コレ此通りと落た刄、取手を確と押止め、詞「其方自害する時は、此塲の樣子洩聞へ、却て本望覺束なし、イヱ〳〵夫でも平八を切殺したら、再び去に往なれぬ此身、放して殺して下さんせ、詞「ヤレ早まるな、イヱ〳〵〳〵去ばでござんすはいなあ、餘所の去ばも猶哀にて、埒も中戸を明る東雲、ちろ〳〵目、詞「ヤア其方は由良之助、ヲット助でゑす、助は助ける大事の命、拾ふた狀で身の言譯、男に立る女の操、其操を逆樣にト、反して讀すは洒落た奴〳〵、ヲ、コリヤ是平八が、藝子の操へ遣た文、みさをと書し此假名を、下から讀ば、ナントおさみの御方と云、吾が主のお妾樣に、不義を言掛聞ぬとて、手疵迄負せた奴、手討にしたはコリヤ尤、證據は則ソレ其文、死ぬるに及ばぬお歸りと、態と四度路に縺れ舌、洒に言する其所へ、お迎ひなりと舁込乘物、もさみは死骸に乘掛り、詞「不義言掛た小林平八、今手に掛るを其方達も、篤と見屆置べしと、ぐつと止めを刺置て、手疵厭はず悠然に、乘物是へと、乘移れば、詞「ハテ面白いお相客、粹傳授の此一卷、適大切ナ牽頭の音八、コリヤ〳〵次郎三早う來い〳〵、ソレ其牽頭持樣を、我等請出し奉り、其方に急度預けたぞと、心の丈は詞にも、盡ぬ三世と二世の緣、名殘惜いは暫しでも、打解語りし旁に、又逢ふやら逢まいやら、必未來で〳〵と、互に見交す暇乞、離れ難

さを心なく、早舁出す乘物に、涙を乘て泣々も、別れ行こそ哀れなり、詞「サア〳〵吾も去るぞよ、來いよ〳〵と立上れば、ソリヤお立じやと藝子共、法師仲居が斑々々、詞「コリヤ毎にない早いお歸り、ハテ早いやら遲いやら、時さへ撞ぬ撞木町、大門口迄送れ〳〵、送る姿の一重帶嶋「解てほどけて寐亂髪に、つげの黄楊の小櫛も、指が涙やはら〳〵、袖に、露の便の憂勤、翻て袖にこぼれ袖に、愁氣使の憂勤、大門口から以前の悪者三人組、行違ひ形挑灯を、蹴飛す無法に、仲居が恟りぴつまやりと、座頭天窓も張合なく、皆散々に逃て行、士めを貰へと双方より、右往左往に立掛れば、折しも來掛る寺岡が、何の論議も投退〳〵蹴飛せど、夫にも懲ぬ悪徒共、武者振付をちよこざいなと、傍りの泥田へ打付投込、大星を肩に引掛逸散に、我家を指て三重「立歸る

第六

世の憂伏見街道に、扶疎の軒は寺岡が、住む月内へ漏次第、雨か涙か浸々と、結目も締る竹責の子、掻集めたる思ひ草、結ぶ夢にも現にも、夫の歸り松の風、門打荻に起されて、折焚柴の煙さへ、絶間勝なる貧しさよ、憂が中にも子を思ふ、親の心は烏羽玉の、夜の物さへ荒筵の屏風押退、詞「コレハ仕たり、此樣なわんぱくな寐樣が有か、辨なき心にさへ、今の暮しが苦に成

やら、判然痩つた事はいの、何に付ても思はるゝ、お主樣の御恩程、世に有難き物なしと、冥加忘れぬ　添涙、寐顔へ飄然掛り子の、平吉は目を覺し、詞「母樣私も最ふ起やふか、ヲヽ賢い〳〵、賃には昨日父樣の、土産の歌賃と、取出す折敷樣放れ、角行燈の燈火も、消す東雲鳥よりも、早き足輕平右衛門、背に確與大星を、助て歸る我家の内、詞「ヲヽ、此方の人戻つてか、そふして誰やら負て迄、戻らしやつたは心得ぬと、不審立寄見て恟り、詞「是はマア〳〵、思ひ掛ない由良之助樣、アヽコリヤ聲が高い、晝夜の酒に勞れてござる、必ずお目覺させますなと、窪疊へ和らかに、我身を添て沖の石、晞く間もなき酒浸の、羽織の裏の散し書、更て廓の粋ひ見れば、宵の燈火打背き寐の、コレ見さんせ、美しふ書て有に、可惜事は酒だらけ、定めし夕邊も、祇園町とやらに、サレバ〳〵例の彼方に御座有べいと、何が彼の邊を行つ戻りつ、遊女共が噂を聞ば、由良之助樣は、今宵歌開とやらに、撞木町へお出と云、是は扨と取て返し、急迫行付大門口、喧嘩〳〵と立騒ぐ、敵手を聞ば由良之助樣、南無三寶と有無を論ぜず、五人三人打投たれば、蜘の子を放す樣に、逃散跡に正躰なく、倒れてござるを漸と、何やら斯やらお供を仕たと、咄す人より聞く怯弱さ、それはまあ〳〵危險事、貴方に怪我は無つたかと、見遣一間を出る平吉、詞「アレ父樣、奥の伯父樣がの、仲居共〳〵、水糝が喰ひいと云てじやぞヘ。ナニ水糝を作とお好みか、ホヲナイ〳〵無い用意が無い、時の用には涕洟の、詞「坊主よ、

父が輝貸は、裸に成れと着物を、脱し掛れば女房は、笑止障子の破れを覗き、詞「コレ待んせ、今のは夢じや現々、ヤ扨は御本性ではなかつたか、ヤレ〳〵嬉しやの、既ての事に坊主めが袷、質入木の身代りに、遣ふと仕たと吹出し、笑ふ門へも福は來で、鬼と名を得し外料治安、世界の人を腰下の、金物光らす目玉の出兵衛、引連て延張入り、雪踏の儘に上り口、蹴散す茶碗烟草盆、微塵こはいの内の躰、來掛り覗く天川屋、樣子有んと立忍ぶ、夫婦は竦々あよげるに付入、詞「ヤイ平右衛門とは汝じやな、取込居つた刀の持主、目玉の出兵衛と云男、能見て置、元彼刀は、鹽冶が切腹した刀、今度師直とやらと、喧嘩故に上り物、拂ひに出たを買取、何でも鹽冶浪人に見せたらば、主人の刀と欲望は定、スリヤ金儲に成事と、ノフ治安、ヲヽそうぢや、其跡は吾が云と、胸ぐら取て引廻し、詞「コリヤ窃盗め、汝は由良之助へ、出入する事知た故、どふぞ百兩位に賣て呉と、刀を直に預たぞよ、夫から毎日催促すれど、酢の蒟蒻のと釣付居る、大方刀は賣て仕舞、金は宙で窃收たな、アヽコレ必ず鹿相仰しやるな、左樣な非道を搆へて、今日の天理が濟ふか、成程箇樣に、延引成まするも、有樣は、アノ刀を私めが求めたさ、ヤア〳〵大きな事を吐出した、ガ悦氣たはさきやせぬかよ、サア定ならば今金せう、イヤ只今と申ては、無か、無くば刀せうかい、サア〳〵どふじやと勃誇かけ、迫詰られて、詞「如何にも〳〵、金子調へ差上ん、ガ迚もの事に此處四五日、ヱヽ成らぬわい、汝が金を拵へる間、待根が有ば

な、弘法と張合て、彌勒の出世待わいやい、虚懈怠なと髭、取て引寄捻付る、奇怪なりと思へ共、徐と堪夫の躰、見るに悲しさ女房分入、詞「マア〳〵マア待て下さりませ、成程金は調ひまする、ハテ叶はぬ時は私が身を、君傾城に賣れて成と、詞「コレ〳〵〳〵おかた鏡を見やいの〳〵、犧に供へた迚、今時の大蛇は、呑込そむない頬付じや、ヱヽ否な事叶すなと、二人の牛頭馬頭寺岡を、中に挾んで責打擲、留るに甲斐なき女業、何と詮方納戸より、兩手に脇差短刀、引摺廻り出る平吉、夫はと寺岡立寄を、詞「何所へ〳〵動き上るな、扨々子供は正直な、ドレ兒童よ、短刀伯父にお呉と、引奪ば、詞「ヲヽ、夫取おつても未爰に、父樣の脇差が有、是で彼奴輩切ていのと、潑と泣出す我子を引寄、詞「ヲヽ〳〵切て仕舞とは、侍の根性が有て愛い奴だ、出來し居つた〳〵、子心にも此親が、恥頬かくを交睫と、見て居つては無念に有ふ、口惜からふ、可愛や〳〵〳〵と、抱締たる恩愛の、不覺の涙堰合ず、詞「コリヤ面白い出兵衛が一番、切れて遣は、ヲヽ、吾が縫て遣は、治安强みに直と往け、サア切れ切居れと、尻引捲り鼻の先、摺へにける、詞「ムヽヘヽハヽヽヽヽコリヤ胞衣ではない、人じやぞよ、竹篦では行悪い、馬鹿盡なと蹴飛して、引提出る刀に取付、詞「コレ〳〵申し、此刀が、手に入ませぬと死でも叶はず、又生ては猶々濟ぬ身分、どふぞ聞分、お賣成れて下されと、妻も俱々取縋り、涙と俱に搔口説、

詞「エ、太深濃、爰放しあがれ、イヤ〳〵何程でも放さぬ〳〵、エ、放せ、イヤ〳〵〳〵放さぬ、放しあがれと迫合たり、詞「ドレ其刀買ましよと、言宛這入天川屋、義平と見るより赤面の、寺岡突退悪徒共、詞「ハテ味な買人が出たな、欲くば賣ふが恰好百兩、わり樣見事買はよ、イヤ手前が買は、アノ竹光、何と賣て下さらぬかと、變な望に平右衛門、詞「アノ此魂がお望とはな、サレバイノ、世にない干將莫耶でも、品に寄たら、求められまい物でもない、又譬千兩萬兩の、黄金を積でも買れぬは、忠の地鐵に義の燒刀、適見事鍛上た、竹光と云名作の、此方の魂買たふござる、詞「サ不肖ながら、お賣なされて下されと、投出す包の小判より、光輝く男なり、夢かと計悦ぶ夫婦、詞「是は〳〵、見る影もない拙者めに、大枚の金、お取替下さるお惠み、エ、忝し〳〵と、押戴き〳〵、詞「サアお身達、金子渡さふ刀を持やれと、言れて底氣味悪徒共、鈍々立寄眞向を、碎けて退と打たる包、あ痛し是は御均等、請取跡より、詞「かゝ樣去らばと逃出すを、飛掛つて引掴み、兩方一度に投返し、頭轉胴骨打付られ、這々表へ逃出しが、點頭合て藪垣へ、鼻息もせず忍び居る、跡に三人明語合、妻は納戸へ寺岡は、明る障子の神々にも、心を籠る短刀、差置其身は押下り、詞「先程よりの一部始終、定めしお聞下されん、太切なる御刀、私風情が手に觸るは、勿躰なし、イザお請取下されふ、申し〳〵と云聲に、漸寐返る伸欠氣、詞「ア、詠々と何でゑすの、ハ其御刀は、殿樣の血汐を、彩し給ひたる腹切刀、ア、

コレ〳〵〳〵やくたいもない不吉〳〵、コレ此刀故にこそ、某樣も我等も此難儀、まだ仕足ひで祈るのか、ヤレ〳〵忌〳〵や穢れると、愛想投出し又轉り、他愛益躰なかりける、勿躰なやと平右衛門、取上て扱放し、血汐に黑む鉾を、打守る目も潮紅涙、思ひ出すも口惜や、去二月下旬、鎌倉の營中に於て、我君師直を、刄傷に及び給ふ、場所時節を辨ずと、御憎しみ既に、御切腹と事極る、御家臣多き其中に、羨しきは大鷲殿、御暇乞相叶ひ、其儘白洲へ出らるれば、早御最期の其用意、庭上に疊を敷、三方に中卷仕たる九寸五分、御前に直しければ、亡君撿使に向ひ給ひ、我今日師直に、切付たる刀を給よ、武士の腹切樣を見せんと、コレ此刀を乞請給ひしは、後々に至つて鹽冶こそ、鈍刀を指たりと、云れん事の殘念と、思ひ給ひし故ならんと、思へば彌殿樣の、御心根がお最愛ぼひ、詞「それより肩衣刎退給ひ、刀退取弓手のそは腹、岸波と突立引廻し、苦しき御息弗と繼、我斯成は覺悟の前、返す〳〵も師直を、討洩したる殘念さは、億萬劫を經る迚も、忘れ難き我鬱憤、晴させ吳よと大星に、傳へよかしと計にて、終に果敢なく成給ふと、云跡聲も泣倒れ、身を揉五臟斗〳〵に、裂る思ひを想像る、義平も俱に無念の涙、拳を握り居たりける、平右衛門は大星が、枕下に差寄て、詞「コレ其時の御遺言、よもや忘れは成されまいに、毎夜〳〵の御遊興、何たる事だと恨んでも見たり、イヤ〳〵深い御所存ならん、大事の御身と思ふ故、抑山科へ御引越、成されてより今日迄、餘所ながらの御供し、

爰の門には立、彼處の軒には蠶然と、御歸りを見屆ねば、休んだ事はござりませぬいいのふ、個程に存ずる拙者が胸中、不便な事だと思召、少し成共御本心、お聞せなされて下さりませい、詞「又輕い奴故口走らふか、とのお疑ひならば、生て居つて何にせん、サア〳〵〳〵〳〵御手に掛つて落命ませふ、コレ〳〵申々、ヱ、去迚はお心強い、餘り苛酷胴欲なと、疊叩いて泣嘆けど、只ぐう〳〵の鼾より、外に諸はせざりける、表に忍びし二人は笑壺、詞「コレ〳〵出兵衛、大星が性根は知た、鎌倉へ注進せよ、身共猶も試し見て、跡より追々早急げと、追立遣て藪垣へ、又も窺ひ立忍べば、寐入臥たる由良之助、勃然と起て藪垣へ、打込手裏劍、治安が急所、叫と計に死したりける、是はと驚く兩人を、押鎮めて由良之助、詞「ホ、ヲ彼等社我所存を探らんと、敵より入る廻し者、證據は則ち夫なる刀、亡君の御所持とは、晶敷似せ物、イデ其子細語らんと、帶する短刀上座に直し、遙下つて平伏し、詞「是こそ亡君、生害有し短刀ぞや、御切腹の後、御本家壹岐殿の手に入しを、竊に我に給ひしは、亡君御最期の魂を、込られし劍なれば、是を以て師直が、首掻切て御石碑に、手向よかしとの御心、ハ、、、、、ア有難き御差圖と、肌肉離さぬ御賜、然すれば外に有ん樣なし、詞「去ながら僞にもせよ、是ぞ主君の魂と、思込で求めしは、適大功平右衛門、今こそ血判許したりと、連署の一卷渡さるれば、餘りの事の嬉しさに、物をも得言ず寺岡は、踊上り飛上り、三拜九拜する計、詞「ヲ、嘸御本望出來された〳〵、

義平も大慶仕る、ヲ、お手柄〳〵〳〵と、扇ぎ立れば班々涙、詞「アイヤ是と申すも貴方のお蔭、ヱ、忝い儀でいりますと、腕先引て確と血判、詞「ノフ平右衛門殿、願ひ叶ふて嘸悅び、由良之助樣、ヱ、有難やの聲諸共、障子に潑と立血煙、周章ふためき天川屋、駈寄見れば無慘やな、咽吭ひしたる剃刀の、刃よりも薄き夫婦の緣、今ぞ絕なん玉の緒も、我子の紲に引されて、引取兼る息ヒィ〳〵、聞苦しさは骨々に、對應ゆる平右衛門、詞「ヤィ女房、願ひ叶はゝ足手纏ひ、兼て覺悟を極よと、云付置たを能守り、ヲ、能死居つた出來した〳〵、モフ何にも言な取亂すな、早く逝矣〳〵と、言口迚も突掛る、涙呑込呑込んで、詞「ヲ、息引取ぬは悴が事か、氣遣ひすな只今遣るぞと、取て引寄振上る、刀を押ゆる天川屋、由良之助聲を掛、ヤレ早まるな平右衛門、妻を殺し子を害し、恩愛輪回を斷切て、潔く亡君の、仇を討んず汝が魂、ホ、ヲ感じたり逞しや、健氣の夫に連添ば、俱に勇々敷忠義心、女に稀の志、惜まぬ例の武士さへ、最期の際は箇程迄、健氣には有間敷に、ヤレ出來したり去ながら、責て悴は助置、母が手向の香花を、取せよかしと仁心の、詞は直に智識の引導、今ぞ落入安堵の往生、安養世界へ我々も導けよやと手を合せ、南無阿彌陀佛と同音に、唱ふる聲も搔曇り、袖に吹雪の雨やさめ、涙拂ふて義平は立寄、詞「イヤナニ寺岡殿、由良之助樣御親子始、徒黨に加はる方々は、御本望だに遂られれば、一人も此世に殘らぬ御所存、貴殿迚も嘸あらん、然すれば血統を後の世に、殘すも一

つは先祖へ孝、幸々、力彌樣の御舍弟は、廣島源五左衛門樣に御座有ば、此子を直にお傅役、御奉公をさせませんが、先夫迄は此義平が、急度預り養育せん、必ず氣遣ひ致されなと、約束違ひ亡跡に、義士の血統は今の世迄、殘りし秋の夕日影、映ふ空は紫の、雲かと見へし藤の森、跡に見捨る亡骸に、縋つて父と慕ふ子に、孝有貞ある武士の妻、忠有二人信有町人、末世の鏡天下一、千五百石國家の寶、山科へ打連てこそ三重「急ぎ行

第七

隱れ家を、嘶や風雅と世の人の、夕日を隱す山科に、世を憂と住む由良之助、他行の留守居徒然に、子息力彌が小音に、讀書の聲も松風の、音に紛れて物淋し、爰に所緣の形振も、四十の上は二つ三つ、賤しからざる女房の、昔を殘す褄外れ、それぞと尋ね切戸の外、何方ぞ、之頼申ませうと、音信ふ聲に見臺押退へ、詞「御用ござらば御遠慮なく、お通り成されと慇懃な、詞を鹽に鈍く、内へ入る顔見るよりも、其儘立て入んとする、裾を控へて、詞「成程〳〵、そふ有うとは存じながら、來悪い所を漸と、參りし樣子は此文箱、我身の願ひを我身が使、詞「憚りながら由良之助樣へ、お取次下さらば、生々世々の御厚恩と、云つゝ文箱差出せば、不審ながら手に取上、何樣子細有べき事、併只今宅に有合さず、見苦しながら一間にて、旅の勞を御休息、

夫はまあ〳〵お嬉しや、お辭宜申さず暫しの内、お座敷を借請ませう、詞「諺にも旅は道連、情の舍りは力彌樣のお志、此上ながら何かは宜しふ、萬事は後刻と互の拶拶、下女が案内に打連て、鈍る色なく奥へ行、跡へ物申頼ませうと、表口から奴が高聲、詞「原鄕右衛門竹森喜多八大鷲文吾推參と、案内と俱に入來る、袋に包めど心の錐、面へ顯はす三人が、挨拶もなく打通れば、心得ずとは思ながら、先々是へと客座に進め、詞「稀のお出に打悪敷、親共儀は他行致せば、不調法成る拙者が手前、麁茶成共と云を打消、詞「イヤサ茶も水も所望にござらぬ、三人申合せ參つたは、捨置難き由良殿の胸中、鎌倉出立延引と云、世の雜說に違ひなき、放埒至極の不行跡、但し是にも子細ござるか、鄕右衛門承はらふ、イヤ〳〵夫計でござらぬ、此間より多くの妾を召抱へ、酒色に耽り剩、諸士の血判を返されし心底、此喜多八其意を得ぬ、如何にも〳〵、大星殿の返答次第、思案一決致せし大鷲、いつかな此座は動かぬと、忠義一途の國侍、力彌は猶も押鎭め、詞「御立腹は至極なれ共、量難き親共が胸中、定めて子細有べき事、が只今も申如く、他行なれ共歸宅も追付、暫時御待下されかしと、和らに三人澁々ながら、然らば暫く待合さんと、座次作れば勝手から、下女が心得煙草盆、お茶の給仕の馳走役、妙役を獨して、たゞ手斜に傾し、夕陽照す薄紅葉、顔に散せし酒機嫌、野道傳ひに由良之助、草にも心置手拭の、輕い姿や寒竹の、釣竿肩に振擔げ、歸る道草二人の女、蘭と菊とは脫捨の、羽織と刀坊主持、

詞「サァ〳〵お菊さん、今彼處で見付た茶筌賣、是からがお前の番、ヲヽ蘭樣と仕た事が、アノ茶筌賣と云者は、姿こそ坊樣なれ、頭巾の下は常の男、ナァ申し、ヲヽ、京馴ぬお蘭、茶筌賣を誠の坊主と、心得たも無理でない、此公事我等が捌かふ、互恨のない樣に、今夜からお蘭もお菊も、兩方を一所に占る、二挺鼓と遣掛けふと、堅い放氣を庵の戸口、それと聞より力彌は立出、詞「鄉右衛門殿喜多八殿、大鷲殿お三人、先刻よりもお待兼、ホイ何三人が來られしとな、夫は珍客御意得ずば成まいと、羽織打被腰刀、差間遲しと内に入、詞「是は孰れも能こそお出、鬱散の爲今日は、妾共を召連近在の、池狩に參たが、不得手な獵で、小鮒一つ掛らぬ仕合、四十過ては針先に弱りが來て、釣物は叶はぬ〳〵、ヤ各も嘸御退屈、ソレお盃の用意をせい、アイ〳〵間の唐紙を明て勝手へ行跡を、見送つて膝摺寄、詞「イヤナニ由良之助殿、事煩雜申に及ばず、鎌倉發足延引と云、諸士の血判返されしは、御所存ばし有ての儀かな、ァ、鄉右衛門殿お氣が長ひ、雜班〳〵と聞に及ばぬ、敵師直が威勢に恐れ、今と成ての心變りは、腰が脫たに相違ござらぬ、ヲヽ、大鷲殿の仰の通り、不忠者の斧九太夫、途中に於て出會さば、一討と存じ居つたが、九太夫よりは大星殿、御返答に依て喜多八が、刀の切味お目に掛る、但しは子細有ての儀か、サヽ、御返答〳〵と、鍔打鳴し三人が、中に取卷迫掛れば、父の心底如何ぞと、危踏力彌騷がぬ大星、詞「ムヽ、血判返進仕り、敵討違變致さば、拙者を切とか、言にや及ぶ討て捨、

直樣出立師直が、屋敷へ踏込本意を遂る、ァヽ、イヤ夫は覺束ない〳〵、我々共が心底を、犬を入て嗅廻る師直、鹽冶崩れの浪人共が、由良之助を討た抔と聞たらば、彌彼方に油斷せず、晝夜の警固加勢の大勢、用心に用心を、重た屋敷へ切入ては、本望遂ぬ計でない、虛死仕て狼狽武士と、後々迄の物笑、亡君迄のお名を汚す、不忠不義では有まいか、寢られぬ儘に此方も、能分別を仕て見れば、敵は大身我々は、扶持放されの素浪人、及ばぬ望は、大石を懷て水練の、稽古するより危險〳〵、イヤサ左樣では一味の武士へ、ハテサテ約束變改常の例、フン反打るゝは了簡ならぬか、不忠者に成度ば、我等手向ひ仕らぬじや、如何樣とも御存分と、刀からりと投出した、一句の理詰に手指も成らず、兎やせん刀の鯉口も、少しは緩む三人が、猶豫の躰に詞を正し、詞「進む者は退き易し、ナ御合點か、御合點が參らずば、自が胸中はコレ此釣竿、渭濱に直なる針を以て、釣せしとは太公望が、直きを賞せし後世の譬說、千辛萬苦の功を積ねば、大望を成難い、螢雪に由て書を學ぶも、君子進學の例なれば、詞「急ては事を仕損ずる、ナナ、此道理を能辨へ、御思案有何れもと、親子諸共座を立て、詞に籠る節籠る、竹は直なる義士と義士、暫は心隔の襖、引立奥に入相時、鐘を知らせか駈來る下部、椽先に手を突へ、詞「小寺樣貝原樣、其外の御方方、大星樣の御返答、先程よりお待兼と、聞より實にもと鄉右衛門、詞「ヲヽ、嘸あらん、何と御兩人如何思召、思慮深き大星殿、聞所ある今の二言、一先歸り評議致

さん、成程〳〵、御年輩成貴殿の仰、兎も角も仕らん、大鷲殿如何思召、拙者迚も其心、然らば同道先お先へ、比も薄暮人顔の、見へぬも宜と打連立、道を早めて出で行、秋の日早く暮過て、千草に集虫の音に、最心も澄渡り、人なき隙を幸と、手燭片手に由良之助、荻吹風の音に迄、心興口見廻し〳〵、疊引上げ相圖の咳嗽、それと心得切扳し、根太板押開下屋より、垢付衣服大小の、柄糸錆たる斧九太夫、悪媚もせず座に着ば、小聲に成て由良之助、詞「一別以來御意得ぬ其許、思ひ掛なく今朝未明、此茅屋へ來られしが、古朋輩共貴殿を猜み、見付次第討て捨んと、鵜の目鷹の目、若過ちも有んかと、今一日の下屋住居、御老人の嘸御不自由、か夜に入れば氣遣ひなし、サ、打寛ひでお咄し有れと、他事なき詞に斧九太夫、詞「ナニサ〳〵千里の虎も時得ざれば、野狐輩に恥かしめらる、同じ浪人とは云ながら、貴殿は知行の餘情厚く、元來拙者無欲なれば、貯蓄とてもなく、據ろなく寄食に參つたは、世話に申す、繼母の從弟とや ら、扨々面目もない仕合と、卑下の詞も何所やらに、毒を含みし蝮侍、温和の大星耳にも掛ず、詞「ア、お年故か九太夫殿、愚痴な〳〵、浮沈は七度とは申さぬか、何事も盛衰、お心置なく何日迄成とも、夫は大慶、古朋輩と思召ばこそ、御懇志の程忝い、些尋ねたい事がござる、何と申て見ませふか、ハテ入ざる御遠慮、何成とも承ちふ、外でもござらぬ、御用意は整ひましたか、フウ用意とは、ハテ隱し召れな、色と酒とに身を持崩し、放埒惰弱と心を緩させ、亡

君の敵師直を討、其用意は能ござるかと、底意を探る詞の端、夫とは知れど何氣なく、詞「適黑星お目高と、申し度いが相違〳〵、尤本國離散の後、敵を討計畧と、存付た遊所通ひも、二三度目から面白なり、四度目からは彼色めが、眞實可愛成て來て、今では寧何も彼も、素鈍と忘れて居續け遊び、イヤモ武士付合の、理屈臭とは天地の違、内へ戻ると美しい妾共が、拗强掛る其鹽梅、イヤモどうも〳〵と忠の道、捨しは可惜武士の、純紲にも掛らぬ風情、詞「ハ、、、、命は塵芥より輕し抔と、當座は血氣に逸れども、何として〳〵一致せまい、左すれば彌主人の仇、ハテ扨討ぬ證據は一味の義士へ、血判戻した樣子は下家で、承知でござらふ、フン厚恩有主君の敵、討ぬは臆病腰脫武士と、扇を以て打掛る、其手を確と、詞「コリヤ九太夫殿何仕召る、イヤサ不忠不義の其魂、矯直さん爲、イヤ御邊如き愚人の折檻、請る樣な大星ならず、ヤア愚人とは舌長し、亡君御在國の砌、拜領せし此扇、長命せよ迚壽の文字を、書し給ひし主君の筆跡、サ是則御手を下し御折檻と、思ひ掛なき主命の、意見の杖に、ハ、、、、はつと計平伏の、襟髮取て丁々々、打据〳〵居丈高、詞「本國沒落の砌、某一人臆病未練と、見せたるは、敵に心を緩させ、忍入て一討と、表に餝る不忠不義、夫に引換其方は、忠臣義臣を面に顯し、酒色に耽る大腰脫、斯云が無念ならば、武士らしく切腹せられよ、但し亡君の仇師直を、一太刀恨むる性根はないか、サア〳〵〳〵返答せられよ大星と、扇を撥と投付て、心詞も荒折檻、由良之

助諾もなく、扇取上げ筆跡を、見るに付ても御最期の、御憤ほりを今更に、主人に扇の心地して、骨も碎くる無念の涙、止兼て見へけるが、漸涙押拭ひ、詞「ハア、驚き入たる九太夫殿、適れ希代の忠臣義士、人至て疑へば、人共に亡ぶと云、此上何か疑念を懷かん、今こそ明す我本心、御目に掛んと懷中より、取出す一卷押開けば、差寄て篤くと見、詞「ムウ貴殿を始四十餘人、義を一決に徒黨の連判、如何にも、去春本城評議の節、家中一統に取置たる、未練卑怯の鼠輩を除き、誠生死を誓ひたる、腹心四十七人の、サ此棟梁は九太夫殿、身不肖ながら由良之助、兩人義士へ駈引は、貴殿子房の智を振ひ、我又孫吳か術を借、爭か師直手の下に、詞「ノウ九太夫殿、ヲ、サ〳〵大星殿、尤左こそ有べきと、本心顯はれ忠節の、心も揃ふ兩家老、悅び頻ひぞなかりける、九太夫重て、詞「某が思案の的、百發百中違はざりし、イデ血判と腰刀、扳手を誓しと押止め、詞「本より貴殿は、一國の重家老、失禮ながら由良之助、故殿樣より拜領致せし、御紋附の上下時服、召替られて血判せられよ、實に尤見苦しき此躰は、摩利支天弓矢神への恐れも有ば、辭退は却て無禮の至りと、詞の中に一間より、力彌は故實の廣蓋に、覆ひ掛たる用意の時服、傍近く差置て、詞「イサ御召有れよと、云も潛々親子の外、人はそれぞと白紙の、障子細目に窺ふ女、目早く大星打消燈火、跡は座敷も眞闇許、詞「由良之助殿〳〵、何故燈火を消召れたな、サレバ最前も申す如く、貴方を拒む味方の義士共、未だ血判濟ざる中、理不盡の勸

き成さば大義の妨、其處〳〵に迄御心配の程、忝しと一禮し、探りながらに件の衣服、手に取上て押戴き、詞「亡君の御紋付、着致す今月今宵は、某が身の最上吉日、イヤモ心の嬉しさ御親子共、御推量下されいと、古着脫捨手早くも、時服と心得、着るは無紋の白小袖、詞「是は〳〵力彌殿、御手傳かお搆ひ下されな〳〵と、云つゝ袴の紐引締、兩腰遐の九太夫も、闇は無益己が身の、死裝束とは白砂を、差足扳足切戸の外、內を窺ふ原竹森、小寺大鷲岡貝原、息を詰て ぞ扣へ居る、九太夫威儀を改めて、詞「時服上下着致せば以前の如く、成程伯州鹽冶の執權職、急いで血判あられよ、ヤア誰か有燈を持、潑と答て蘭と菊、手先に霜の奥よりも、運ぶ燭臺蠟燭の、燈りに恂りコリヤ何じや、ア忌はしき淺黃上下無紋の小袖、僞り着せたる所存は如何に、ホ、敵師直が犬と成、汚し祿を喰んより、亡君其許に、下し置れし扇にて、切腹の學びをなし、悴が介錯受召れと、思ひ寄ざる一言に、驚ながら色も變ぜず、ヤ某師直が犬成とは何を以て、麁忽ならんと詰掛れば、イヤサ天眼通は得ず迎も、貴殿如きの計略、爭か見扳で有べきか、其僞りを誠とせし我心は、不忠不義成侍に、高祿を與へ置し、其主人こそ馬鹿者よと、勿躰なくも亡君の、御名を汚す口惜さ、斯は計ひ申せしぞや、何卒惡心飜へし、潔く切腹有らば、恥を知たる侍と、世の人口を防ぐと云ひ、後々末代まで、不忠者腰脫武士の惡名を、殘さん事の心外さと、道理を盡し樣々と、餘儀なき詞も空耿風、物をも言はず延狹〳〵、庭へ下り立出行を、

力彌鍋を無手と取、圖「返答もなく、コリヤ何れへ〻ざるな、ハテ何處へと云たら歸り申す、勅使大禮の師範に刄向ひ、虚死仕たる鹽冶判官、主人と云も穢はし、師直公の臣と成、今出頭の此九太夫、妨げなさば討放さん、其處立去れと振放せば、圖「何處へ〳〵、切腹承引致されずは、敵の忍びの犬侍、爭か其儘返さじと、云より早く腰刀、扳放して切付るを、飛逡巡て扳合せ、請つ拂ひつ上段下段、鎬を削る鍔音刄音、元來血氣の大星力彌、苛つて切込九太夫が、刀からりと打落せば、コハ叶はじと、飛鳥の如くに駈出る、切戸を閉切一味の義士、圖「ヤア人非人の斧九太夫、逃出なば一討と、呼はる聲々前後の敵、南無三寶と用意の手裏劍、大星目掛射る矢の如く、打掛れば身を交し、左右に拂へば手裏劍の、目當は遙違ひ棚、柱襖に撥し〳〵、最是迄と差添引抜、踊り上つて切掛るを、手練の大星搔潛、刄物持手を腕がらみ、ぐつと引付引据て、鋒物打鎧元、篤くと改め扨こそ〳〵、開城の節紛失せし此劍は、足利殿より鹽冶家へ、御預ある長圓の銘作、御代替りの繼目の規摸、一旦お家斷絶すれ共、正しく御舍弟在せば、家再興の期も有んと、盜隱すは師直に、飽迄阿る人畜生、邪非道の天の罰、思ひ知たか九太夫と、刀たくつて椽先より、立蹴に働と蹴落せば、表に扣へし一味の義士、班々々と駈入て、圖「大星殿の賢慮の如く、劍の盜賊非道の九太夫、嬲殺しと立掛れば、ヤレ待れよ方方、圖「逆磔に掛る共、飽足ざる國賊ながら、自滅さするは武士の情、サア尋常に切腹有か、但し押へて搔首せう

か、サア〳〵〳〵と鍔元寛げ追取卷、鈍躙り〳〵と付廻し、遁れ難き後の方、思ひ掛なく一間より、主は誰共白刄の鑓先、障子越に九太夫が、脊骨を掛て突込だり、圖「ヤア卑怯の働何奴なるぞ、ヲ、己に出て己を亡す、非を改めて斧九太夫、只今追腹致せしと、聞より喜多八駈寄て、障子開けば以前の女、弓手の腹に短刀突立、朱に染たる必死の有樣、圖「ホヽヲ九太夫妻女お禮殿、最前力彌に渡されし願の趣、女ながらも夫の介錯、健氣の追腹出來されたり、ヤア〳〵方方、最早四更の刻限ならん、爰構はずと發足の、用意〳〵と大星が、差圖に隨ひ徒黨の義士、殘らず奥へ駈入たり、由良之助一間に向ひ、圖「先非を悔て斧九太夫、只今切腹仕る、息有内に亡君へ、御目見へ願ひ奉ると、詞と共に彼所の襖押開く、床の間の正面に恭く、靈光院殿の御位牌香花を供へ、左右は大星親子を始、四十餘人が姓名を、書記したる金の短冊、かほよ前御を傳きの、二人の女諸共に、合掌したる其有樣、御聲涼しくかほよ御前、圖「松柏は雪の中にも操正しき、由良之助の忠誠、夫に引換敵に諂ふ、人でなし、天罰恩ひ知つたるかと、怒りに交る御涙、九太夫無念の齒嚙をなし、詞「ヱ、御臺此家に在と知ば、幸の能人質、奪取て師直に、渡さんず物殘念やと、邪智の詞に女房お禮、最苦しき聲音にて、詞「ァ、勿躰なや冥加なや、忝くも殿樣より、二千石を頂戴せし、御恩を仇成邪非道、憎しみもなう由良之助樣、理を盡しての御敎訓、餘所に聞なす臆病未練、暗々人手に掛させては、詞「苗字の恥辱と是非なく

も、思ひ切て突留た、罪は目前コレ斯と、突込劍に諸手を掛、きり〳〵と引廻し、詞「ノウ由良之助様、主人に背く九太夫が、不忠をお赦し有様に、殿様の御位牌へ、お願ひなされて下さりませと、云聲も早絶々に、息も苦しき四苦八苦、疵口よりも迸る、血汐に混る雨涙、膝に湛へし風情なり、節義を感じ人々と、共に哀む由良之助、詞「ホヽヲ適れ忠貞全き妻女、それに劣らぬ兩人の、女は伊藤長七が、忘紀念の二人の娘、御臺所の御先達を、見屆申す健氣の者共、假に妾と流布せしも、世上を憚る爲計、死しての貞心生ての忠節、又と比の有べきか、九太夫殿に十が一、斯樣義心の有ならば、由良之助何をか愁ん、抑も開城の始より、寢食を忘れ人機を計、心に有ぬ放埒惰弱、人の嘲り惡言を、答應ゆる辛抱は、亡君泉下の御無念を、散ぜんものをと我一心、念力天に通じてや、長圓の劍手に入上は、各出立致されよと、聲に隨ひ立出る、皆々人目を忍び扮粧、似せ廻國は鄉右衛門、笈に隱せし大小の、暦配りの禰宜姿、烏帽子喜多入門出を、祝ふ山伏貝原義助、小寺久内岡八十七、或は虛無僧傀儡師、是大星が計略にて、智仁勇備の三度飛脚は大鷲文吾、御臺所に式禮し、庭前狹しと居並んだり、大星勇んで如何に方方、詞「殘りの人數も思ひ〳〵、姿を變て彼地へ入込、到着次第示合さん、敵地の繪圖は先達て、某が手に入たれども小勢を以て向はんには、只夜討より外はなし、アレ彼の如く床の間に、四十餘人が姓名を、書記たる短冊は、其夜の手配兼ての工夫、大手搦手双方に分り、繼梯子にて

塀を越、切口所は玄關口、鴨居に箝る竹の弓、工夫は最前釣竿の、糸は則控への絃、切て放さば一時に、雨戸外れて宅中へ、無二無三に亂入し、間毎〳〵の壁襖に、紡車に等き差込手燭、詞「敵を明り〳〵率制出し、味方は暗きを小楯に取、夜討の大事は奇勢の變、譬ば師直鐵桶の中に忍ぶ共、義心鋭き鋩に、何條討で置べきかと、居ながら計る大星が、英智の程ぞ類なき、皆々大きに感心し、詞「此妙計にて戰はゞ、敵師直が皺首は、最早手中に入たる同然、ハヽハヽヽヽ、悅しやと勇み聲、詞「音高し人や聞、謀は密なるを、良金親子は長圓の、劍を是より御舍弟へ、お渡し申跡より出立、道中堅固で彼地の再會、早お暇と一味の義士、かほよ御前へ永別の、禮義も厚き別れの涙、出行諸士を見送る親子、羨ましげに延上り、見遣るお禮が臨終の際、無念〳〵を九太夫が、末期の一句二世の緣、引取息も一時に、死出の旅立現世の旅路、空に輝く大星が、頓て雪ぐは會稽の、山と川との相詞、末の代迄も隱れなき、武名の程こそ三重「勇々しけれ

第八

吾妻方道は往來も近江路や、石部に隣る横田川、此程の雨續き、水嵩增る渡し場に、上り下りの歩人が、我後れじと咄いや咄や、駄荷の繼馬指持とんぼ關東平、息もすた〳〵櫛の齒を、引

もちぎらぬ通ひ船、向ふへ着間又跡へ、待人乘人走る人、とつぱ川岸乘掛の、似た山繪符も六突に、實に賑はしき往還筋、往來に紛れ義士の面々、略す姿も跡や先、行過後れ立招き、尾葉も枯野の薄原、岸に待間に又着船、詞「ア、コレ〳〵マア上る衆上てから乘たが宜わい、怪我せまい〳〵水が高いぞ、サア〳〵跡へ乘んせ〳〵、もつと上手へ乘んせ〳〵、サア〳〵宜かな宜かな早う乘たり、遲けりや置て行ぞ、コレ親方、一寸と表張て下んせ、おつと宜じやと漕出し、詞「扨と旦那衆、高水じやに少々宛酒代、氣を張て賴みやんしよ、ヲイ〳〵合點と端數錢、五文拾文手に渡せば、詞「サア表の衆錢はどうじやな、ハイ〳〵私等かへ、イヤ申し見さんす通りの願人坊、吾等も修行者旦那廻り、お初穗手の内で通る者共、久しい奴じやが、彼薩摩の守で、どうぞ遣て下んせぬかい、ヱ、希代な乘合じや、今日程稀有な者の、通る日はない程に、コレ此方方酒代貰ふた旦那衆の、手前もどうやら氣の毒な、船の着迄に銘々の商賣口上、船賃代に何と一口づゝ、遣んせんかと、云れて互に顏見合せ、詞「ヲ、何か扨〳〵、錢の代と有事なら、ム、神職、ヲ、サ先貴僧から遣しませい、イザ其許、イヤ其方と、讓り合たる迷惑顏、詞「サア誰彼と云ふより、初端に居るお山伏、何成共所望〳〵、ヲ、身共は當山修驗道、當卦八卦手の筋墨色、ア、コレ〳〵其樣な事は吾や嫌いじや、幸持たソレ錫杖で、ちよんがれは奈何有ふ、コレハ氣の毒、愚僧は中々其樣な、頓作事は不得手〳〵、ハテ何成ともむちやくちやに些少遣

んせ〳〵、ヱ、傳法のかは遣て退きよと、しやつく錫杖振立〳〵、さんま情は坂田の女郎よ、さんまさら〳〵、三州坂田の盛の女郎衆は、櫻木狹衣政木に小太夫、宿屋往來は女郎衆のお臀、捻つて嬶つて笑つて歩行んで、癖は何にも涙花のどらくら、京の浮涙と大坂のぶらゝと、お江戸のぶらゝと三千三百、三箇のぶらゝに、弟子らや、のらゝに、談合てれつく、おらんだ孫子が、とんてきほゝらの、うてゝんてんやに、野暮助しばらがお作り抔とは、文や艶書で、びやくらいじやらくら、是りや又餘り〳〵深濃奴だに、ホ、ウゑらい〳〵、親玉〳〵、其次は禰宜殿どうじや、ハアテ是等は常陸の大宮、鹿島香取の大明神、昨年は米穀が、迚なふ實惡く、御座り申た所で、今年は壹升八合の、大豐年といふ、御詫宣で御座り申す、先大豆小豆黍稗の類、畑物は壹升二三合、早稻が十分、中稻が十二分、晩稻が十五分から、十八分迄の大上作、斯申すも人々が、御千度打たり、施し召れた御神德で、御じやり申す、無上靈寶とふかみゑみため、サア〳〵其次順の舞、ソレお猿殿役廻り、おつと幣帛取々に、目出たの〳〵秋津洲や、天下泰平思ふ事、叶ふた末は鶴龜、五葉の松〳〵去とは五葉の松、榮へ〳〵て目出たけれ、次は差詰傀儡師、お定りの指人形、囃方はコレ坊樣、ヤ是は迷惑千萬と、云つゝ願人、風呂敷より、取出す太鼓手品能く、揃ふ唐子の調拍子も、ヤアン鼓雀〳〵、白鵰文鳥金鷄鳥、かつこ鴛鴦山雀慈悲心、丹頂翡翠鳩鶴烏、音呼南京鳥〳〵、鷦鷯鵠鶸く鰯や、連雀比翼三光鳥、雉子へ〳〵鳥

シメコメ〳〵日鵠小鵠、小鵠日鵠、日鵠小鵠こ、深山に山鳥けんほろりとちゆ、よいや〳〵と人々が、咄と譽たる鬨の聲、須臾に着向ふの岸、ヤレ嬉しやと銘々が、飛下〳〵急ぎ行、人目堤に大驚侍森、爲浸冷汗辨慶が、安宅を越し進帳、虎の尾を踏渡し錢、遁れ活たる心地して、東路指て急ぎ行、跡に茫然渡守、詞「ヱ、折悪ふ登りはなし、空船でなと戻らふと、船は半へ漕戻る、此方の堤に急焦、道に後れて寺岡が、省すに及ばぬ持前の、足輕々と旅出立、コリヤコリヤ船頭、吾は大分急ぐ者だから、早ふ船を遣つてお呉りやれ、ヱ、此人わいの、此高水に只た一人、誰が船遣る物でいの、然して吾や空腹ふ成た、些少の間見て居て下んせ、其間に乘人も來るはいなう、爰から見へるァノ家じや、立ながら茶漬四五杯、掻込で來るはいの、ハテ扨それは聞分ない、コリヤ〳〵小ばん、賴むべい〳〵と、云ど空吹川風を、尻に聞して歸りける、跡にとぼんと平右衛門、詞「ヱ、時も時、乘合でも有たらば、ツイ渡して呉居らふに、如何した ら宜るべい、ヤ幸々櫂は船に殘して有、自分に漕で渡らふと、點頭〳〵飛乘て、船漕出す向ふの方、稚兒懷き薄雲が、とつ川岸に走り着、詞「申し〳〵早ふ、其船を着て下さんせいなァ、どうぞ後生じや賴ますと、泣々呼はる聲に寺岡、詞「何だ賴むとは何を賴む、イヽヱイナ私は女子の一人旅、跡の宿から殿達の三人連、私一人と侮つて、色々の悪い事、漸〳〵茶店で僞り云、裏から脫て來ましたが、追付跡から來るで有ふ、どうぞ情に一渡し、追脫して下さんせと、賴めば

此方は、詞「ハテ氣の毒、吾迚も連に失迷、大急用の者なれ共、左樣した難澁見捨るも道ならず、渡して呉ふと船喝たり、ナニ女中焦事はない、靜に乘つしやい、ハァ忝ふござりまする、迚もの情に少とでも早ふ向ふへ、ヲヽ此方よりは吾が急用、去ながら個樣渡して進ぜるだから、譬今其奴等が來たと儘さ、此方に追付しやせない、跡は吾が呑込だと、棹す船の右左、袖振合も賴母しき、詞に此方は會釋して、詞「それはヤァ〳〵お嬉しや、何を隱さふ私は、津の國昆陽野と云所に、逢ねばならぬ人有故、稚兒連て鎌倉より、遙々尋ね參る者、御緣が有ば又重ねて、お禮も申す爲なれば、貴方のお名を、詞「イヤ〳〵〳〵禮請ふ迚世話はせない、ヤ何かと云内最ふ岸だ、コレ女中ぐはつたりだぞ、心得てソレ怪我せない樣に、上らつしやい〳〵、ハイ〳〵そんなら此儘此御恩、死んでも忘れは致しませぬと、伏拜み〳〵、石部の方へ走行、ハテ世には憎い奴等も有もんだ、一人旅の女を捕へ、種々の悪者共、ァヽ大方コリヤ勾引して、石部土山の留女にでも、賣べいと思ふ物仕共と、又漕戻す川半、向ふの堤に胡亂〳〵眼、がす侍が二三人、詞「ヤイ船持來らふ、小ばん〳〵と横柄聲、寺岡は船の内、落たる手紙片手に熟々、ムヽウスリヤ今の女が勘平殿の、所緣の者で有たよな、知ぬ事とて殘念〳〵、そふと知たら鎌倉の樣子、何か委しふ聞べいに、去ながら彼方も氣躁、此方も急用、假令無緣の者でさへ、救ふて遣氣で渡して呉たに、所緣と知たりや猶更と、急ぐ我身も打忘れ、態と片々漕行船、詞「ヤァ早

急と船持來ろ、去迚は優長な、鈍夫では有わいの、ナニ馬鹿頬な、吾は船頭じやおりないから、ソリヤ渡し守に云つじやい、如何樣さうだ、コリヤ一番尤、然らば其方物問ふ、此船場へ二十一二な女が、幼兒懐抱て來はせなんだか、ハイイ、ヱ吾は女の番はせず、如何が知ない、ハレ奇怪な、此道より外はない、ヱ、ヱ聞へた扨は汝、其女に渡して呉いと頼まれたな、ハ、、、、渡守でもない物が、何で人を渡し申そふ、ムウ是も又尤だはい、夫なら頼む程に、其船早ふ此方へ着て呉いサ、イヤサ今云通り素人なら、どふで船は間取申す、去ながら頼むと有ば、船は着て遣べいと、ぐはつたり岸へ驅上れば、詞「ヲ、、大義、ソレと掛聲兩方から、利腕取て引立れば、詞「コリヤ何とする、ヤア何ととは横道者、われ女を何所へ遣つた、眞直に吐せば宜、左樣ないと汝生てや置ぬと、中に取巻動かせず、詞「マア〳〵待つしやい〳〵、眞實吾は知ぬ事さ、ヲ、知ぬ物が何として、船を遲く着居つた、隙取せたは、迯したに違ひはない、取迯した其代、己を存分呵責と、無法の手籠に平右衛門、日比の荒氣に手は鈍々、去ながら大事の前、纔の事に身を捨ては、是迄仕込だ忠も義も、女房迄が虚死と、堪へ忍へて膝折屈、詞「申々吾が悪くば幾重にも、何卒御免下さるべいと、佗れば猶も付上り、詞「今佗言する手間で、何故船を着なんだ、船が後れた計で、女めは何國へやら、誑かされた腹直に、サア〳〵〳〵其處が皆樣御了簡、此上は何如樣共、手向致さぬ御存分、まだ其上に誤りの、一札成とも、コレ申し、ヲ、それが

定なら今一遍、此船向ふへ漕で呉せふ、ヱ、ヱ、イ否なら汝堪忍せぬが、サアそれは、サア、サア〳〵〳〵如何じや、ヱ、何とせふ是非がない、渡すべいと、云ふに皆々サア早くと、無理に引立乘移る、不省〳〵に平右衛門、櫂取直し、詞「ヤナニ皆の衆、高水に素人業、自由には漕悪い、舳先へぐつと出さつしやい、ヲ、そりや如何成と其方が勝手と、誠と思ひ表の方、サア船出し申す危險と、岸に突張櫂の先、船は川中其身は陸へ、翻と上り櫂先で、船を深みへ突出せば、ヱ、憎い下郎め、コリヤ何とする待居れやい、上て呉上居らぬかやいと、云ふ間も早き高水に、船は輪回川下へ、廻り流れて出行を、見遣る此方は吹出し、詞「ハ、、、、、、礫野郎め、今に泥水喰つて、早く往生箆棒め、ハ、、、、、ドリヤ罷らふと平右衛門、跡を見捨て足逸に、鎌倉指して三重「急ぎ行

第九

廻庇に茅の屋根、葺傳へたる家の風、南を請て暖な、福裕の生活一郡に、二もなき系圖、三左衛門重義と云鄕士ありけるが、何闇からず滿る月、虧る例か子息勘平、萬壽限りの床に着、虚勞の上に差出る、癪は病の扁鵲も、命を救ふ匙もなし、一家の使懇家の見舞、門外雜踏醫者乘物、藤村孝庵立浪壽元と案内有、直樣お通り下されいと、小腰折介慇懃に、待遇ふ間に、詞「

頼ませふ、身共は千崎彌五郎よりと、狀箱渡せば請取て、入んとするを、詞「ア、是々、お返事には及ばぬと申付けたれば、其儘置て罷るぞと、歸るに擦合先走り、物申の聲どふれの答、詞「岡島兵庫お見舞と、通る跡から來る奴、詞「コリヤ物さ問申べい、勘平樣は家内に寐まり召るか、如何にも若旦那は大病にて、寐罷居られまするが、何方からのお使じやな、イヤ矢狹間重太郎より參り申た、お見やれ狀は十四五本、慥に屆けて呉べいとて、諸方より拙者が旦那へ、頼み參つたから渡し申すと、云置て出る所へ又物申ふ、ヲット心得御狀かな、詞「イヤ三條の大橋法眼、只今着船致したと、擔輿の平着玄關より、詞「イザ女中方御案内、斯お通り成されませ、詞「頼みませふ、又醫者坊主か、イヤ法華坊主でござる、拙僧此間より大坂へ下り、伊藤與茂七方へ尋ねたれば、此書簡言傳たいと有故、持て參つた、コレハ〳〵御慮外先御休息お茶一つ、イヤイヤ忝い、跡の茶屋で飽足給たで、腹は滔々漫々と、京道指て急ぎ行、ヤ關しやと折介は、溜りし書狀一つに持、這入る病家を追々に、退く醫者を送り出る、野家老彦作手を突へ、詞「主人三左衞門、罷出まする筈なれ共、晝夜の看病に勞れ、先程より間眠居まする故、暫時の間御用捨成下されよと、挨拶すれば、コレハ〳〵御叮嚀、扨氣の毒な御病躰、思慮度に過たる心氣の衰へ、其上欝積を兼たれば、兎角難治の症と存る、ノウ孝庵老、いかにも左樣でござる、所詮全快は心元なふ見まする、壽元老の御醫案も、御同事でござらう、成程御兩所の仰の通り、中

々本腹とは存ぜられぬ、サレバ〳〵此兵庫が針術は、針先より氣先、俄の癪は章門を刺、腹が痛めば背中へ打、是背中に腹は代られぬ理穴、然しアノ癪は手前が針でも治らぬ、いか樣兩三日の中でござらうと、落命遺察功者に、頼は少な彦作も、醫師を送つて悄々と、納戸へこそは入にける、居間の外には咲出ぬ、室より取し養子嫁、お梅は始終介抱に、床離れねど一夜さも、寐て見ぬ中の夫ながら、虛には成さず眞實に、思ひ惱みし其風情、妙婢に至る迄、心詞も優長く、詞「お笑止なは御察人樣、新枕のお寢はなく、御病氣のお寐間の伽、辛氣な添臥遊ばすと、霑れ栞に道習ふ、教訓の本押繙、詞「一ッ女は父母の、仰と媒とにあらざれば、交はらず親まずと、コレ此通り、元來私は勘平樣とは從弟同士、今の父母と云は伯父樣伯母樣、早う二人に祝言させ、初孫の顔が見たいと、仰しやつたが、去年の春伯母樣はお果なされ、悲しいは勘平樣、殿樣の凶事を、お國へ告んと、早打に此所を、通らしやんす折も折、伯母樣の御葬禮に、行合しやんした其甲斐も、亡骸にさへ逢れぬとは、眞に〳〵侍の身の上程、無端物はないわいなう、詞「それから御家中も離散と成、お歸り有しは氣の毒なやら、嬉しいやら悅ぶ間もない、詞「アノ御病氣、早ふ本腹させまして、千代も替らぬ夫婦の盃、振袖留るを其方衆も、祈て給やと有ければ、ヲヽお氣遣ひ遊ばすな、頓がて目出たい御祝言、千箱の玉の若子樣を、懷せますると取囃す、詞「ヲヽ、皆能祝ふて給つた、只何頃迄も、愛想を限されぬ樣に、添遂るのが私が手

柄、去ながら婦人に七去とて、女の身に去られねば成ぬ事が七つ有と、コレ此本に書て有、詞「夫は、一には舅姑に從ざる女は去べし、二つには子なき女は、去られねば成ぬと有、其方衆とても身の行なひ、慎みやいのと誡の、書にも違ふ退去は、緣薄雲の我名さへ、憂しと引る〻稚兒に、見せたや見たや妻木樵、鎌倉路より遙々と、辿りて爰に來て見れば、美々敷構へ氣後れし、佇立軒に降掛る、時雨は能鹽差窺ひ、詞「俄の雨に難儀致しまする旅の者、大事なくば暫の舍り、御赦されてと詞付、怪しうあらねば呼入て、詞「よもや女中のお獨では有まい、定めてお連もござんせう、イヱ〳〵連と申したら此稚兒、東西辨へぬ者を賴みに、知らぬ長路を迷ひまする、ム〻はてな、見れば美しい、染絹に包んで有は、三味線の樣に見へまするが、長の旅には應はぬ物を、持てござんすな、成程御不審は御尤、是りや大切な人の遺物、どうぞ此主に、逢たい見たい計に、遙々と參りました者でござります、今で思へば此三味線の摸樣が氣掛り、尤互の合點にて、厭ぬ別れは仕たけれど、思ひ切ぬは女子の常、忘れ易いは男氣の、早秋風と色變る、紅葉の蒔繪擦落し、身の果敢なさは唱歌にも、言れませぬと涙含、扨は噂の薄雲と、悟れど態と何氣なう、詞「イヤモウ聞ぬ先から哀れらしふて、面白そふな事、幸徒然の折と云、お前は旅の憂散し、其お咄しを歌に寄、彈て聞して下さんせと、望むは夫に聞せたさ、見せもし見もしさせたさに、明る障子の打伏て、痩衰ろへし顏形、ノウ懷かしや勞敷や、其勞

と知らぬ身の、憂も愁さも打明し、言度事の數々は、人目の關に堰れても、留らぬ物は涙にて、咽返つてぞ泣居たる、詞「サア〳〵旅の女中樣、御察人樣のお望を、早う〳〵と女共、譫は浮氣憂目をば、三線の糸の音を忍び、詞「語るに付て悲しきは、コレ此稚兒の身の上で、ござりますはいなア、父は播磨の何某とて、人に知られし武士よ、母は東の女郎の果、此兒を生け育てしが、詞「過にし春の末つ方、我に此兒を預け置、勞しやな此稚愛は、父よ〳〵と戀焦、詞「ヲ〻、目が覺たか、可愛や〳〵、コレ乳々と哺ても、とゝたい〳〵、アレ〳〵〳〵彼の樣に云暮し、夜明の鷄と諸共に、間眠もせず泣明す、餘り見る目が悲しさに、來悪い所へ連て來た、心を不便と思し召、御察人樣お執成、お願ひ申上ますと、隱し包みし薄雲の、晴て親子の名乘合、お慈悲〳〵と搔口說、只伏沈計なり、詞「ヲ〻、お道理じや、尤でござります、コレ申しお國からお供仕た者共の、噂に聞たお二人の中、妾に遠慮遊ばさずと、何卒親いお詞を、交して進ぜて下さりませ、アレ〳〵彼の幼氣な愛盛り、顏が是たふはない事かと、云ど答へず勘平は、瞬き繁く數遍の書面、繰返し見て火鉢に投、火中の白灰と爲す計、詞「エ〻、餘りな思ひ切、お前はお見捨成されても、此梅は能見捨ませぬ、必氣遣ひさしやんすな、其子は私が育ると、懷取んとする所を、ヤレ聊爾なり控へよと、刀引提三左衛門、つか〳〵と歩出、詞「我子の武道に障礙を成し、魔王と云はそれなる賣女め、鹽冶家より師直へ賄賂の金子、左平太是を掠取、其金を以て汝を

請出し、妹と名付悴めに呉しとや、然るに依て、師直賄賂せざると心得、鹽冶殿に苛酷當りしを憤り、殿中にて刃傷に及び、切腹召れし根を探らば、其女めより起りし事、何ぞや纔の恩義に絆れ、無念の汚名を諷れなば、先悔臍を嚙とも返らじ、既に今、主家の仇と成たる者の、假にも妹と呼れし奴、打放す共何の事かは、ァ、年寄て武邊も氣丈も、衰へたるが汝等が仕合ぞと、父が怒りは勘平が、肝に砭刺切る障子、磴と轉びて聲を揚、詞「寧死たい殺して欲い、御機嫌直る事ならば、何の命が惜からふ、其代には此坊を、孫よと云て下さりませ、コレ拜みますお情で、ござりますわいなァ、詞「ェ、父様お心強い、母御は何もあれ、アレ彼子は、現在貴方の、ャァ孫抔とは慮外至極、不義なる中に生れし小悴、我屋敷の土も、踏すべきか、早く立去れ行居らふと、云ど立まく鴛鴦の、陸に迷ひし心地して、最ど見る目も苛らしき、詞「ハテサテ出よと云に澁滯奴、イデ引立んと直突立、裾に縋つて、詞「ャァ〳〵〳〵待て下さりませ、お心に入ぬ事ならば、最うお願ひ申ませぬが、せめて一夜か二夜さを、ャァ何倒なと振放し、庭に駈下り袗髪執り、情用捨も荒氣なく、外面に岸波と突出せば、わつと子も泣親も泣、道理は何程道理でも、孫は子よりも可愛ひと、云には違ふ親御様、餘り難面胴欲と、恨み託て淫々と、身悶してぞ歎きける、三左衛門聞耳立、詞「アレ表に小兒の泣聲は、ェ、聞へた捨子じやな、偶人間と生れし者、畜類抔に嚙せんは、無益の殺生、お梅拾ふて遣ふかい、ェ、そんなら彼子を

捨子にして、ハテ父母も知れぬ孤、養育すればとて、誰が黠の打人が有ふ、早く拾ふて遣めさと、思ひ掛なき照降の、替らぬ内にと心も空、薄雲樣も嬉しかろ、夢ではないかと思はるゝと、霑れし梅も胸開き、肌に稚兒抱取て、寐ん〳〵寐ん〳〵寐こせい〳〵、ねんねが傳も入そふな、事ではないかと目逮する、詞「ハイ〳〵〳〵次手に私も彼お子の、乳母に抱へて下さりませ、心が緩たか乳の張、早う上げ度ござります、ム、ハ、、、、不便もない自由な世界、子を拾つたれば、早乳母迄が調ふた、成程次手に抱て遣ふ、お梅其小兒連て來い、ドリヤ〳〵扨能器量、目付口元鼻筋まで、扨能似居つたな、何じや祖父よと云か、ム、〳〵健な奴よ能云つたと、堅い親仁の虚折は、朽木の株に芽生せし、莟の花と見るぶさを、撫つ擦つ餘念なく、詞「コリヤ誰が子寶、貴方のじや、お前のじや、二人が中のお手車、廻る廊下の奥座敷、祖父も浮れて附添行、無慙やな勘平は、君父の恩を身一つに、請てぞ重き病の床、漸に起直り、法眼の配劑的中せしか、鬱積の痛も忘れし此元氣、汝達も嘸看病に勞れたで有ふ、勝手へ參り休息せい、早く立よと人を拂ひ、我亡君の仇を討ん爲、鎌倉へ出立せんと、有間敷僞りを搆へ、子として父を欺きし、其罪恐れ有事なれ共、詞「譬親子兄弟たり共、洩すまじと誓詞の血判、それ故に只何となく、仕官の望有と言立、暇を願へど承引なく、達てと云ば親の名跡、斷絶との仰默止難く、止れば不忠行ば不孝、二つの道に苦しむ死病、逼りに迫る今日只今、詞「計ず慕ひ來りし悴、拾

ひ上下されしは、是ぞ誠に天の加護、然る時は父の名跡に氣遣なく、忠孝二つ全き道理、嗚呼悦ばしや嬉しやな、イデ此上は告るに及はず打立んと、枕の刀杖となし、立上れ共踏堪ず、憧と轉びつ這廻り、心計は逸れども、身躰自由ならばこそ、詞「ヱ、淺ましや、筋骨一度に碎くる如く、一足だにも引れぬ苦痛、然あれば迚斯迄も、思ひ込だる我存念、やはか晴さで置べきかと、又立上れど逆上す、虛熱に昏む眼を見開き、詞「ヱ、如何に天數盡れば迚、節義を立る際となり、助り難き此業病、神も佛も斯程迄、見放し給ふか口惜やと、無念の涙班々々、面に流るゝ發汗の、焦慮ば氣力も最ど猶、次第〳〵に弱果、今を限りと見へければ、詞「ハ、、、、是非もなや、迚も全快叶はずば、無慙〳〵病に死なんより、潔く腹切て、左平太に欺れし、盟約一書の誤を償ひ、一つには又亡君の、御跡慕ふ追腹ぞと、思ひ究めて書置の、筆の立處も定まらず、コハ不甲斐なき根性やと、狂ひ怒りて我と我、嗾裂拳の血も枯々、刷白し墨の染鈍にも、書殘しの最期の遺物、拜領の長船臍際迄、既に切行息の緒も、糸に縷てふ武士の、物の哀れや止むらん、斯とは知で急々と、お梅は夫に稚兒を、見せる次手に、詞「薄雲樣、久し振で傍へ行しやんしたら、坊より先へ抱れたかろふ、ア、邪亂〳〵と何仰しやる、餘り粹な奥樣で、結句何やら氣が張樣な、ホ、、、、何の斟酌サアお出と、何心なく唐紙を、朱に伏たる其有樣、二人は二目と見も遣ず、わつと斷魂泣出す聲、耳に應て三左衛門、遣戸突明駈り出、南無三寶

と仰天し、靭ながらも遏の父、血汐ののりの封じ文、取納たる一思案、下部一人罷出、詞「大星由良之助樣、御入來なりと取次す、ナニ大星氏の參られしとな、ヤイ兩人の女共、聲立て輕蔑るゝか、叫な泣なと呵り付、襖引閉出向ふ、光輝を隱す明鏡の、怨むらくは戰國に、顯れざる此一人、案内に連て打通り、互に禮讓席を定め、詞「暫く面會申さねど、悴が病氣度々、お尋の使者に預る事、淺からぬ御懇志と、挨拶すれば由良之助、稍顏色を打守り、詞「山根より額に掛り、愁の黑氣顯はれしは、是正しく死別の相、推量りし事ながら、保養叶はず子息勘平、死去召れしと覺へたり、殘念さよと賢察に、三左衛門横手を拍、成程只今自殺仕つた、ナニ生害召れしとな、サレバ其趣意は存ぜぬ共、御姓名を記せし彼が遺書、イザ御披見と差置て、立んとするを押止、アイヤ御心配には及ばぬ事、此期に臨んで、何をか包憚からん、苦しからずと見る文躰、詞「兼々御約諾の時節と存候に付、僞りを以て親共に、身の暇を願ひ候所、企ての儀存ず候故、中々許容仕らず、尤心底打明候はゞ、却て滿足仕べくと存候へ共、大望の事は、恨に口外致し難く、兎角心中を惱し候て三左殿コレ御覽なされ、ドレ〳〵苦しからずばお見せ下されい、ヲ、兎角心中を惱し候て、圖ず九死一生の病を請、旦夕に逼り候一命、暗々病死仕らん事無念に存じ、今般自殺仕候、ヲ、尤々、サ、由良殿、此跡を御苦勞ながら、成程拙者讀聞ませふ、ナニ〳〵今般自殺仕候、不運の我等御憐み成下され、彼地御働きの砌、我等が姓名御

呼立、下され候はい、今生後生の御厚恩と、讀下す内三左衛門、胸に必至と對る後悔、左社と酌取由良之助、詞「恩愛の別れに一滴の、涙さへ催されぬは、大丈夫と申すべきなれど、夫は餘りなる御愼、却て未練に見へ申す、イヤモ最前より英雄の手前を恥、袖には中々落さねど、心に泌る老が涙、御推量下されい、ハテ入らざる御遠慮、スリヤお赦し下されふや、エ、忝やと轉び寄、死骸に必至と獅嚙付、詞「エ、聞へぬぞよ恨めしい、何故打明て呉なんだ、斯る勇々敷企と、露聊か知ならば、悅び進んで見立ふ物、跡先の辨なく、呵り怒つて止めたが、悔しいわいやい、殘り多いわいやい、左程磨きし魂を、塊「瓦」と捨さした、愚痴頑な此親には、生れ優つた嗚呼の奴、ヲ、〳〵〳〵健氣なり出來いたと、云聲喉に噎返れば、お梅は寧正躰なく、父樣や母樣の、お許し請て夫婦じやと、詞に結ぶ下紐も、解しない程日を算へ、松竹祝ふ島臺も、水盃で祝言する、心を推して下さんせ、詞「ヲ、お道理でござります、私も丁ど一年を、隔焦て漸〳〵と、今來て今の憂別れ、此樣な果敢ないお姿を、何の此子に見せふとて、連て來たのじやない物を、斯云愁氣が餘所外に、又有事かお梅樣、サイナァ申し薄雲樣、殿御に離れる身の因果、子を先立る親の業、果報拙い此孫めが、先途思へば不便やと、あやなき顏を三人が歎き、六つの袂や朽ぬらん、餘所の悲しみ餘所ならずと、由良之助涙を浮め、愁傷の思ひ遣方なく、二人の女も諸共に、自害もすべき心ならんが、左に非ず、紀念に遺る此稚兒、傅育つるが、夫へ貞心親への孝、本懷遂ず死したる勘平、死後の怒を和げて、未來を助くる其爲に、此子を早野和助と號、義臣の列に加ふべしと、父が疵口稚兒の、手の内染る楓の血判、遺書に寫せば三左衛門、飛逡巡て三拜し、詞「ハ、、、、忝き御計い、悴めが存念を、立させ給はる御厚恩、何を以てか謝すべきと、悅び涙ぞ道理なる、嬉しさ悲しさ二人の女、惜や盛の花蔓、遂て捨たる浮世の塵、拂へど露の消返り、後れ先立子を思ふ、老が心の愚鈍〳〵は、文字足ず文字餘り、搔曇りたる涙の雨、凌ぐ方なく見べけれども、大星死骸に打向ひ、詞「いまだ汝が肉冷ず、魂去ずば能く聞け、是こそ高の太平太が、僞謀て書せし誓約、幸我手に入たる故、寸志計の手向ぞと、義者の詞は靈魂に、通ぜし物か嗚不思議や、體忽ち二足三足、抜取刄左平太が、宛名をぐつと板敷迄、突通したる一念力、良金扇打開き、詞「ヤシ出來したり早野勘平、敵を夜討の一番乘、適手柄未來の土產、成佛せよと合掌に、笑を遺物と殘し置、慟と倒るゝ此世の限り、出行勇士見送る義士、別れ〳〵と三重「成にけり

第十

此郎老て矍鑠とは、異國に猛き武士成をや、然れば德には隣有、江の島の片邊、織部彌次兵衛が假住居、武藝指南を世渡りの、業と師走中空の、短き日影入と早、近所隣が上を下、返せ太

皷に行人共、膝突合せ方角の、人の手配母親と、娘お弓がお茶運ぶ、お烟草參れ雪空に、膽斗御苦勞樣々の、追從口も迷子を、尋ねて貰ふ氣兼なり、上座に家主權兵衛が、火鉢に掛り、ノウ婆樣、娘女も搆やんな、此比小僧が迷途てから、二組三組の返せ太皷、大勢の人悶着に、心遣ひと草臥さしやろ、アノマア云しやります事は、モ餘他人衆にお世話掛、一端掛に皆樣より、尋ねに出べきい爺親も、子より前から他所へ參つて今に歸らず、せめて詞のお禮なと云せたい、祖父樣といや、見へぬ孫故氣は無端、何事も此二人に銘じ、アヽそりや近所は皆、相互でござるはいの、が云じやないが此權兵衛、借家に掛ては天王樣、ヤ怖い〳〵、狐で有が狸で有うが、何の樣な魔の物でも、どつこいそつこい爲す物じやないはいの、祖父樣は鹽冶崩れの武士、算と云ば高田の馬場で、途ない手柄を仕た剛の者、其孫をば摘むと云は、此奴は餘程功經た古獸、定めて是は推量に、臍の下谷の穴稻荷、年增の狐に誑された、ハヽヽヽ、物で有ふと騷々し、門は半時の時太皷、家主聞より突立上り、詞「ヤア〳〵方方、アノ太皷こそ暮六つ半、時こそ移れ迷子を、尋る手配油斷すな、魚屋は目黑螺堂、艾賣には筋違見附、夜番は初夜に四ッ谷から、番町掛て往て戻れ、軍書讀には鐵炮洲、お醫者は差詰辨慶橋、八百屋は大根畑から、梅若近所を合點か、心得店借家主絨め、出て往た跡は寂寥と、潮の干たる如くなり、跡片付て掃出す、箒片手にノウ母樣、詞「此彌太郎は只獨、何所にどうして居るぞいなあ、サイノウ谷七郷を

手分して、尋捜せと知ぬのは、狐狸に妖されたか、人賣にやと勾引され、遠い國へでも往た事か、見へいでさへ是程に思ふ物、ひよんな事など聞たらば何如有う、悲しい時は取分て、神信心が第一と、力付合ふ親と子が、挑添る燈明の、油は已が光より、消るは義者の心をや、一味徒黨の會合より、立歸る織部安兵衛、我家の軒に立留り、詞「フン月明かに雪白く、萬象一時に花咲風情、雪に故人を尋ねたる、剡溪の詠も斯や有ん、雪晴て心に叶ふ今宵哉、ハッア面白しと誹諧の、一句に籠る義士の詠、風雅に富し香さ、夫と悟てお弓は立出、詞「マア此方の人とした事が、此間から顏さへ見せず、其所に何して居てぞいな、マア〳〵内へと伴へば、詞「ヲヽ、安兵衛殿待兼ました、此方の留守に、彌太郎が迷子に成、返せ〳〵の鉦太皷、どんちやんと譯はない、夫に祖父樣も氣を揉上、常に引替詞も四度路、此樣な時にこそ、早う戻つて下さつたが宜い　アイ母樣のお申す通り　夫は〳〵私と二人が氣扱ひと、云を打消尖聲、詞「ヤアつべこべと喧嘩しい、東西分たぬ赤子なれば、失たるも悲しむべし、最早五つの年積り、能歩行能物言、日本に聞へし安兵衛が名を、尋ねても戻る筈、弓矢の慣例毎何時、親も夫も討死せば、亂れ狂ふか白痴者、控へて居ろ、ハイ〳〵控へて居ましよ、子に無義道なも無理じやない、女房にや常住獨寂させ、偶に戻つて愛想もない、ヱヽ、つんと最う、どうなと云たが能わいな、虛憎てらしい主樣へ、御機嫌直しに酒一つ、燗して來ふと立て行、安兵衛詞を改、某密に親

人へ申上る子細有、母には曽し奥の間へ、卒御立と遠くる、心白髪の姑が、納戸へ入と引違へ、障子くはらりと鼻彌次兵衛、詞「聟殿歸られしか、コレマお聞きやれ、其方の留守に孫が迷子、今に於て行方知ず、生れてから五年の月日、隣歩行も手放して、一人は遣らぬほんそ孫、祖父樣〳〵と申したが、知ぬ野山を迷ふた果、淵川へでも轉び込、塞の川原で此祖父を、戀々と泣てやど居まいかと、思ひ廻せば此彌次兵衛、ひよんな長生仕ましたはいの〳〵、實樣平生並なら ぬ御秘藏孫故、なも失たる故御歎き御尤、去ながら申さば是等抔は、肉身の私事、大切なる主君の仇、高の師直今宵彌八つの上刻、夜討を掛べき味方の手筈、迚兩人諸將に先駈、師直始家來の奴原、悉く切盡し、鹽冶判官の郎黨に、織部彌次兵衛安兵衛迚、鬼神二人有ければ、名を末代に留ん事、武士の本懐此上なしと、勇めどいかな進まぬ眞、詞「イヤサ安兵衛お云やんな、尤一旦主人の仇、已やれ高の師直、人手には渡すまじ、名を一天下に知られんと思ひしも、手柄な祖父を持たよと、孫めが臂を張せん爲、孫が無ければ、手柄も入らず、心の痛む胴膨、我身の譽所かと、權輿もなげに取敢ねば、安兵衛猶も膝摺寄、詞「亡君過行給ひし以來、四十餘人の味方の義士、何卒主君の仇を報はんと、體を苦しめ心を勞し、千辛萬苦は親父樣も、同じ事、何條悴一人に、御心の變るべきか、片時も早くサ、〻、〻、御用意〳〵と、諫る詞打消て、詞「ヤア姦ましき繰言聞耳持ぬ、孫が有りや血を引一家、今は他人の入聟殿、早出て行やれと、手を

取て門へ突出し跡密閉、ノウ是待と駈出て、お弓が名のみ引留る、甲斐も中々明ぬ親、戸の透間より差覗き、詞「コレ此方の人安兵衛殿、父樣こそは一轍に、緣切氣でも私や切ぬ、必ず去で下さんすな、ヱ、胴欲な父樣、杉戸一重が二世の緣、隔の垣と成たかと、身を悶たる苛しさ、餘所の見る目も痍みける、安兵衛は血氣の慄悍、詞「ヤア人畜に費す口なし、獨夫心を變ずれば、百計爲に妨有、フンホ、ヲ夫よと逸散に、何所共なく駈行ば、彌次兵衛娘が脊を撫摩〳〵、女郎〳〵と見苦しい、サ、コリヤ泣な〳〵よ、親は天地に只た二人、男と云ば世界中、何れと夫婦に成ふと儘、彼樣な奴何の慕ふ事、コリヤ不自由は、吾が爲しちや置ぬよやと、戲氣ながらも胸は闇、泣子を親が引立て、一間へこそは入にける、農民は鋤鍬を以て耕し、武士は弓箭に後の名を耕す、田代甚太夫、素より壹岐に臣として、殿の一門鹽冶家の、諸士に心を添ける常に變りし不興顔、不審ながら座に通り、詞「ノウ彌次兵衛殿、昔保元の戰より、麻の如くに亂れし日本、今太平に治つて、武者首一つの手柄も出來ず、ヱ、戰國で有うならばと、腕を按つて暮す折柄、鹽冶家に仕へし面々、今ぞ武名を顯はし時、分て貴殿は老後の思ひ出、若殿原に先驅て、見事な死花咲されんと、羨しく存ずるてや、殊更今宵夜討との、大星殿より主人へ内意、ヤレ悦ばしと取物も取敢ず、御見立に參つた、安兵衛儀は何國へ參りし、御支度は調ひ

ましたか、サ、どうか〳〵、ゴリヤ如何じや、武骨は常と思へ共、返答なきは何が不機嫌、ヱ、聞へた、悴安兵衛御所存にばし違つた物、姫殿、左樣でござらう、如何にも左樣、有ふ事か聞てお呉りやれ、迷途た孫はかとも云ず、夜討を掛るの忠義のと、心に染ぬ事一般、小面倒さに只た今、追放たれば眞の他人、お手前迚も長居は無用、早速々と歸られい、ア此又孫めが行衛は知ぬかい、何故に戻つて呉居らぬ、ヱ、胸苦おしや氣遣ひと、遠慮會釋も納戸口、入んとするを待た彌次兵衛、詞「スリヤ御邊には主君の仇、恨を散す所存はないか、イヤモ孫が戻らば卒知らず、左もない内は氣もない事、ヤア未練なる一言、虫の如なる幼童に心惑、大義を忘るゝ、空氣た性根、今迄の好み我手に掛、主君成ぬど主君の一門、鹽冶殿へ手向て呉んと、言より早く、跳上つて長押の直鎗、取手も見せず突掛る、詞「ヤア殊勝と汐首を、交せば透さず疊突、互に老の挫まず去らず、爭ふ物音奥の間を、駈出る娘女房が、詞「喃待つて下さんせ、待て〳〵も聞ばこそ、ア、〳〵危險〳〵と、見る目危怯さ身は冷汗、元來强勢不敵の彌次兵衛、無刀の應對田代が手練、岩も貫れと突鎗の、汐首丁と刎上れば、直に肋を目當の鍬、飛交して扳打に、飜と稻妻長柄の丈、一尺計切折たり、南無三寶仕損ぜしと取直す、一間の内より高聲に、詞「今宵の戰ひ宅中なれば、柄の短きぞ宜んめりと、聲諸共に立廻す、障子を颯と安兵衛が、血汐滴る切首を、馬手に引提立たるは、怪しくも又勇々敷けり、凛然たる眸、養父に向ひ、詞「誠や六

德は愚成が如く、大信は能僞る、胸に忠義を押藏し、態と明さぬ親父樣、所存の根崩は是ならんと、差出し見する死顏を、見るにお弓が氣も狂亂、二人の父は見向もせず、兩手を拱で默する計、安兵衛首を潑たと睨み、詞「我亡君の横死より、仇を討て臣たるの義を立んと、心を苦しめ、年月を送る處、時至つて今宵に迫り、圖らずも養父の不興、ハレ心得ぬ擧動と、思ひ寄たる實父の内、窺ひ見れば此悴、餘念なくも遊ぶ躰、扨こそ是よと引寄て、不便ながらも一討に、討て子故に迷はぬ證據、我所爲ならぬ養父へ言譯、詞「忠義に碎く我肺肝、汝故に既の事無にせんとせし腹立と、氣は張弓の安兵衛が、撥と疊に抛つて、涙一滴見せざるは、泣に勝りし哀れさよ、彌次兵衛思はず聲を發、詞「適悴疑ひ晴た、出來た〳〵〳〵、ア只忘られぬは君の恩、謎難きは人心、四つや五つ幼子を、人商人はよも取じ、取隱したは姫殿、仇を報じて討死と、聲悟極し悴が惜さ、孫を餌に飼引寄て、長生させる卑怯な所存、請繼悴も嘸有んと、捜り過たる我過、ひよんな思案を仕て退て、不便や孫を殺させた、堪て呉赦して呉と、敢なき首を取上て、詞「コレ嫗見やれ此死顏、莞爾笑ふて居る樣な、死だ樣にはないわいの、生質ての横伯者、可愛や五日跡迄は、何にも知ず機嫌能う、吾が背中へ搔上り、父樣は髮が黑いが、お前は何故に白いやと云居故、此白髮は目出度物、己も祖父に似寄てな、此樣に白髮の生る迄、長生せいと云たれば、イヤ己は白髮は嫌じやと云たが、責て十迄生もせず、短寸〳〵髮で死ふと云、物

の前兆で有たかいと、首を兩手に抱占、身を抛伏して噎返れば、お弓はいつそ正躰も、何で世界の憂事を、集た身とは生來て、死ぬる覺悟の我夫、我子も嘸や死出の道、可愛や小足で鈍歩〳〵と、泣々獨行であろ、道知らぬ迚戻れかし、歸れ我子よ彌太郎と、叫ぶ甲斐なき魂呼ひ、母も涙に眩ながら、サイノウ死ぬる子は賢しいと、父親の諷やる謠を能覺へ、地を走る獸、空を翔る翼迄、親子の哀れと幼氣に、廻ぬ舌で諷ふたが、耳に殘つて忘られぬ、思ひ出す程骨も肉も、碎る樣で苛しいと、口説立〳〵、流涕焦れ泣沈む、愼深き甚太夫、思はずわつと取亂し、詞「ヲ、道理でおじやる姫殿、可愛や嫁女悲しかろ〳〵、云て甲斐なき事ながら、鹽冶の家臣多き中、分て武勇の御邊なれ共、平生孫に愛深く、自然今度の仇討に、心後る事あらば、鹽冶の家に忠臣の、弓取二人失ふ殘念、孫なくば宜らんと、密に來り速歸り、隱せど餘所に推量の、的は外ず悴に迄、疑掛る憂事を、見聞も吾が僻から、赦しやれ旁彌次兵衛殿、左程忠義の心底を、疑ふたは幾重にもお詫、詞「イヤサ〳〵お手前よりも某が、冷淡性根と賤めたが、吾は却て面目ない、一人の奔走子秘藏孫、隱すも討も見捨るも、心は同じ忠の道、義を鐵石の武士も、恩愛愚痴の血の涙、見せじとすれば胸に充、眶に漏て班々々、わつと一同に取亂す、身を知る雨の一時雨、防ぐ軒端も見へざりし、涙拂ふて母親が、詞「老少不定と云ながら、僅の年を一期にて、死だ彼子が後世菩提、祖父祖母夫婦二親が、佛間に入て諸共に、首に手向の六字號、卒と我身を先立し、逆ま事を見よとてか、何存生し恥白髮、老も若きも俱泣に、盡ぬ歎きの目も闇き、闇路を照す御燈明の、一間へ俱に入跡は、夜嵐更る遠近に、返せ〳〵の物の音も、幽に告て哀れ添ふ、六字の御名の手向水、涙に絞る聲立て、南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵、水も木草も子の刻過、時刻も迫る夜討の面々、長柄半弓繼梯子、人目憚る火消の扮粧、列を正して押て行、群を離れて千崎小寺、扉に近く潛々聲、詞「織部殿父子用意は宜や、亡君の仇師直が、館に寄る今刻限、何故に遲滯有、片時も早く發足〳〵、義に當つては他に讓らず、お先へ參ると呼はる聲、後れじ物と安兵衛が、翻りと庭に悪來が、多力も挫ぐ其勢ひ、詞「ヤレ待て悴と一間より、留るも父が悅喜の音聲、詞「英雄死を見る事歸るが如し、勇しゝ去ながら、衆て定まる敵地の相圖、臨機應變計難し、人數を二手に分備、東は搦手二十餘人、西は追手二十三人、諸士の差圖は汝が役目、心得有やと尋ねれば、詞「ホ、御安堵然るべし、元來敎下されし、夜討の驅引法を亂さず、表門より馳入て、鹽冶が舊臣仇を報ずと、呼はり〳〵切入べし、其時四方へ逃散者、女童を追べからず、詞「ハヽア仰にや及ぶべき、目的は師直只一人、四十餘人の合印、敵に勝色いろはの文字、山と川との合詞、味方を集る相圖は笛、詞「ホヽヽヽ、適れ熟せし軍慮の奥義、イデ某も發足せん、裝束持やれの聲に連、母と娘が持出る、上着下着の仕立際、手早に金の短冊も、末世に惜む弓取の、輝く名をば袖印、確と締る上帶も、祉ひ猛き出立柴、今ぞ

名殘の女房が、泣じとすれど聲曇り、ノウ是れ我夫彌次兵衛殿、不慮に過行給ひにし、御主人の仇師直を、覘ふ夫に添からは、毎何時に無端、別れもせねば成ぬ身と、兼て覺悟は仕ながらも、今日の今やと夫や子の、勇々しい悲しい門出の、飽ぬ別れに成ふとは、思はなんだと嘸上げ、歎けば娘も涙聲、我夫申し此世の別れ、隨分目出たふ御本望、必二世の契をば、違へぬ樣にも都度〳〵は、言ぬ心の苛しき、始終を聞て甚太夫、奥の間より歩み出、詞「ホ折柄四方に降雪の、中に凋まぬ松が枝は、正に忠臣の心の操、世に顯るゝ時成哉、イデ首途の壽と、時に扇の一奏、謡「兵」の交り、頼有中の門出哉、諷ひ終れば安兵衛が、小柄の手裏劍散雪と、俱に梢を頭轉倒、直に貫く穂先の止、詞「ヲ、出來されし御兩人、敵の忍び血祭宜し、甚太夫殿冥途で逢ふ、母人にも御賢勝、娘隨分長命せい、お婆然らばと無義道に、別行こそ三重「勇々しけれ

第十一

禍は悪の積れるに由り、滿れば虧る月の夜の、雪の茶會と師直が、館の儲物好に、風雅を盡す歡樂は、今日に窮る弓箭の、運と知らざる愚さよ、子息左平太師泰、對客の草臥休め、爐を擁たる紅葉の、正に同悪相寄し、鷺坂伴内藥師寺が、打解振の咄し伽、詞「ノウ藥師寺殿、アノ一挺は御小性組稻田梅吉、餘程太皷が上つてござるの、サレバ〳〵否又今日の殿の御趣向、恐ら

く盧同陸漸も跣で裸、モ我々式が感心と申も恐れ、彼狠狽者の、鹽冶判官が涙人共、仇を狙ふと聞へし故、館の出入も嚴重に御用心、絶て風雅のお遊びも無りし處、大星初腰が脱、彼徒の奴輩、離散と聞へしより、久々にて今日のお茶の湯、二重壁も明日は打壞し、彌お家萬歳と、阿る詞に高の左平太、詞「何さ〳〵萬點の螢火、太陽の光に敵せず、涙人めらは云に及ばず、今日本に誰有て、我々父子に敵たいん者覺へなし、ハ、、、、、と高笑ひ、洩聞へてや一間より、左平太が妻半部御前、悠然に歩み出、朝夙より差集ふ、客人のお相人、嘸お勞でござりまさよ、夫に付今のお咄し、一間で聞て驚く計、四方に恐るゝ敵なければ、諸士怠りて國弊とやら、尤鹽冶の浪人共、恩を忘れて誓に背き、仇なす所存なしとは云ど、如何成方便有てかは、斯云觸すも計れず、御用心をぞ願はしと、諫の詞歴々の、武士も及ばぬ利發さよ、諫を用ぬ愚蒙の左平太、詞「ハ、、、、大丈夫の爲す業、女の知所に非ず、ナニ藥師寺鷺坂、最早今宵も子の刻過、我寢所にて寐酒の一献、皆斯來やれと打連て、障子引閉入にける、跡に殘りて半部が、ア、去迚は是非もなき、夫の心の奥の方、見遣茶の間の椽傳ひ、出るおさみが傍近く、詞「不調法な私が手前、お茶お一つと差出す、茶碗手に取ノウおさみ殿、詞「聞ば其許は鹽冶の弟御、縫之助樣とやら云お人と、二世掛たとやら可愛らしい、中で有たゑやないかいの、苦界の里の憂身迚、忍はぬ方へ請出され、嘸縫樣が戀しからふの、ナントマア欠落して去氣はないか、ヱ、イ、然

喃其許を遙々連歸り、花紅葉とも詠めてござる、夫の目を貫其許をば、都へ返し縫樣に、添して遣ふと世話するも、頼たき事有故、其譯篤と聞て給べ、舅御と云我夫も、鹽冶の家臣が云合、仇を狙ふと世の取沙汰、其許に頼むは爰の事、今宵の世話を功にして、家中の諸士へ縫樣から、敵討を止めて欲さ、生々世々の御恩ぞや、聞分て下されよと、厚き誠の言の葉を、感じながらも左あらぬ躰、詞「ホ、與樣の聞へぬお詞、廓に勤めて居る時こそ、引手に靡く憂身なれ、請出されたる殿御こそ、定まる縁の妹背中、貴たと云與樣も有ながら、さもしい此身を彼樣に、不便を掛て下さんす、貴方に何と背れふ、お免し成されて下されと、云を言せず、詞「イヤ〳〵〳〵女ながらも武士の妻、言出した事引はせぬ、此上は片時も屋敷に、足は留させぬ、フン其一言で皆知た、誠らしふ云並べ、底の心の凄さは、妾を遠けたい計、悋氣の角を押隱し、上ずんべりの情顏、出直し成されと言捲る、半蔀濶と逆上し、詞「ヤア推參成其一言、達て去ずば半蔀が、目に物見すると立寄て、引立る腕拂ふ腕、雪の柵雪の庭、一度に飜然と飛下て、互に負じと挑み合、轉んづ起つ根限り、脛も現に紅の裾、紅の肌着も玉の汗、波寄る計揉合たり、時に怪裏表、一時に揚る鬨の聲、詞「鹽冶判官の一家中、仇を報ずと云聲も、天に響て聞へたり、詞「ユ、斯有らせまい爲にこそ、心を碎きし甲斐もなく、敵寄たれば舅御樣、夫も今ぞ絶躰絶命、死出の先驅急がんと、覺悟の半蔀覺悟のおさみ、詞「待に甲斐有今月今宵、義士の本望達する上は、

自ら迚も人々の、死出の先駈後れじと、互に確と一間の障子、迸る血汐紅ひの、哀れ果敢なき次第なり、大星が軍慮の如く、義士の面々、舘へ込入東西より、鬨を作つて攻入ば、寐耳に水の一家中、周章き迚惑ふ、中にも敵對ふ者あらば、矢狹間千崎竹森織部、原鄕右衛門徒黨の面々、秘術を盡して切立れば、刃向ふ者も嵐に連、降來る雪の烈しき戰、鬼神と勇む其中に、大星力彌、左平太に渡り合、追駈來り大音上、詞「ヤア〳〵左平太、亡君の仇汝等親子が首を取、覺悟せよと呼いれば、ヤア悪き過言、此世の暇と切て掛る、心得力彌が請留て、捫へば切込左平太が、刀瓦落と打落され、南無三寶と迚行を、飛掛つて後から、大袈裟切に討放し、猶奥深く駈り行、追詰られて藥師寺が、狼狽廻つて迚來る、程能向ふへ寺岡が、どつこい胴骨大槌にて、打倒されて藥師寺は、眼玉飛出て死でけり、折柄大星親子を始め、義士の銘々駈來り、一つ所に集りて、詞「屋敷の隅々殘りなく、上は天井下屋迄、搜索せど知れざるは、討洩せしか殘念と、忙然として立たる所へ、師直を宙に引立重太郎、詞「ヤア〳〵方々、柴部屋に隱れ居る師直を、生捕たりと呼いれば、人々生たる心地して、悦び合ぞ道理なる、詞「由良之助、師直に打向ひ、我々は鹽冶が家臣、斯御舘へ亂入せしも、亡君の仇を報ぜん爲、速に御首を給いるべしと、兩手を突謹んで述ければ、師直些も悪怯ず、詞「ヲ、神妙〳〵、汝等が忠義に免じ、某が首を只今得とせんと、隙を窺ひ扳打に、大星目掛切付るを、搔潛つて腕首を、確と捉へ、詞「ホ、

殊勝き御手向ひ、禮義は一旦此上は、主人の敵と大星が、初太刀に寸斗切付たり、人々立寄年月の、恨の刃思ひ知れと、寸段〳〵に切付〳〵、跳上り、飛上り、悅涙に眩居たる、由良之助は亡君の、腹切刀取出し、師直が首搔切、是より直に御菩提所、圓覺寺へ立越て、御墓に首を供へんと、打連立か弓取の、忠義の譽末代に、武士の鑑と輝きし、大星一味の四十餘士、昔を爰に繰返し、語るも御代の惠みかや

天明七丁未九月廿六日

石高〻千五百
冊數〻四十七

廓景色雪の茶會

終

作者　若竹笛躬
　　丹青堂
　　梅野下風

忠義墳盟約大石

壹冊目　拾壹冊

陶犬瓦鷄も妙手によらば、奚聲を發せざらん、家を守り晨を告、其功人に於るをや、四海に響く萬物の靈場重き鎌倉御所、居ながら政事の道ふるき、足利の箕裘たる、尊氏の御弟直義公、兄の政務を助け評定の間へ出給へば、連署の席には、桃井若狹之助禮服正し、袖長き優美に似付ぬ高の佐平太、親の權威を讓りの大紋、烏帽子引立肩いからし、欲と悪事を阿仲間、藥師寺治郎左衛門迄、末座の諸侯嚴重に威儀を正して伺公有、直義仰出さるゝは、詞「往時元弘建武の比より、許多の勇士の討死算ふるに遑あらず、就中去八月、吉野の宮にて崩御の先帝、後醍醐の天皇の追福を修せんには、洛西嵯峨に精舍を營天龍資聖と號よと、夢窓國師の勸に隨がひ、程遠き都へ下知し、詞「圖を描せ礎石を運ばせ、棟を上さん支度の刻、破風の懸魚へ打せる金鷄、俗には金の鷄迚雌雄番し古器の名物、詞「流支三藏の將來にて今日域に止るよし、旁知らずや聞ずやと、御諚にはつと若狹之助、先達て金の鷄お尋あらんと存ぜし故、諸家の記錄を預つたる師直殿へ、孰の家の持傳へぞ吟味有れと言置しと、聞も敢ず差出る佐平太、詞「イヤ桃井殿、其許の差圖を受る親共ではなけれ共、此比不快なるにより、拙者が代て記錄を披見

し存居る金の鷄、雄鳥は去年殿中を騷して、切腹仰付られし鹽冶判官が持傳へと有し故、鹽冶に縁ある壹岐の城主石堂右馬頭羿秋を招かせしに、使は如何と尋ねに藥師寺、詞「成程先刻御召と言遣しが、程もあらじと取り〳〵評議の其所へ、弓馬の聞へ覺の家柄、召に乘じて右馬頭、素袍の袖も長袴、大廊下に膝行あれば、大將御氣色麗しく、早速の出仕神妙〳〵、今度尋る金鷄の雄鳥、先達て改易せし鹽冶が家に所持せし由、内緣ある羿秋より有家を求め出されなば、滿足ならんと仰の内、石堂は頭を傾け、詞「ハ、ア委細承知仕る、世に聞へたる金の鷄同苗が傳持しと聞ながら、未だ某聞せざれば、幸手前へ招き置くかほよの前に委細を尋、時日を移さず金鷄の雄鳥を献じ奉らん、又雌鳥は、難波に名高き町人淀屋辰五郎方に所持せしと承る、幸御爲替御用に付、此程當地へ召れし淀屋、御廣敷に相詰居れば、御前へ呼出し申さんやと、聞し召れて猶豫もなく、それ〳〵と御諚の下、頓て彼處へ告知す、御召と聞て冬さへも、汗汲流す淀屋の主町家に其名辰五郎、袴の襞積は薄けれど、厚き分限の肩衣を、白洲に平伏畏まる、廣椽先より石堂羿秋、詞「鹽冶の家と汝が方に持傳たる金の鷄、此度武將の御望なれば、時日移さず差上べしと、詞に猶も恐入、詞「ハ、我々風情が所持の器物冥加に叶ひし御上の御所望、併彼の金鷄雌雄合躰する時は、自己と時を作るといふ奇特ある重寶なれば、藏の内の鎮守に納め、家の守と是迄拜せし事なければ、急ぎ御暇給りて御動座の祭をなし、追日差上奉ら

んと、遁難波に隱れなき、辨舌よどまぬ淀川の、水に育し器量なり、右馬頭謹で、御聞に達する通りなれば、不日に揃ふ雌雄の鷄、御賢慮安くと言上す、佐平太片頬に苦笑ひ、詞「ハ、、、、、戰國の砌なるに、羿秋殿には骨折ず、武勇智謀も入ぬ嚴命、蒙られたも御前躰、附つ添つの執成と氣も付ず、酢でさいて呑む請合だて、近い譬へ桃井殿、去年の饗應滯らず、勤られたで連署の役目、ナ勤させたは誰が蔭、おれそれの義理順義、よう心得てお請有れ、左樣共〳〵、夫りや言つまやる迄もない、羿秋殿も野暮ではないと、鼻藥乞藥師寺と、熊手同士が磨立る、爪彈して若狹之助、詞「ハ、、、、、御親父へ媚諂ひ、身共に勘氣を請たる本藏、身を亡したが能手本、ナニ石堂殿にも氣を付られ、厚ふおれそれあられよと、嘲る詞の端近き、羿秋も莞爾と笑ひ、詞「ナニサ〳〵彼聚歛の臣あらんより、寧ろ盜臣あらんとは古語の敎、鼠の族に國家を荒され、損はれざる用心をと、當たる一句覺の兩人、詞「ムウスリヤ此佐平太を盜臣となし、イヤ藥師寺を鼠とは、餘りの過言と膝立直し、互に募る詞爭ひ、ヤレ双方扣へと直義の、御眼尻には つと計、左右へ逡巡二人と二人、烈しき御聲高らかに、詞「役目に似合ぬ未熟の爭ひ、双方共に怒を殘さず、鹽冶の雄鷄淀屋の雌鷄、雌雄の金鷄取揃へ、不日に都へ送るべし、佐平太も此通り師直へ言聞せよ、早退出と暇給、御納戸構へ入給へば、俱に群立諸大名、温和の愛も若狹之助、同じ役柄人柄の、けにくき高の佐平太が、跡に藥師寺式臺も、口强ならぬ右馬頭、淀屋と

俱に請保つ、笑の眉毛の逆立ぬ、素直に強き弓取の、道こそひける、三雪「例なれ

貳册目

昨日見し照葉も今日は埋れて、降積雪の催しと、人は闘しき師走の半、役目を高の師直父子、奢に恐れぬ上屋敷、世を我儘の振舞なり、今宵饗應客儲と、床の間圍ひの箒掃除、妙婢去どもなき、咄しも夢野のまがみへたり、詞「ナント替つた屋敷ではないかいの、御隱居も同前なれど、御用繁い親旦那、偶内に御座るといへば、明ても暮てもお居間に計、所詮御寐間の上おろしに、お手の掛るといふ樣な、惠方巳報もない事と、嗔氣沸せば茶の間のりん、詞「そりやわしもぬかりはせぬ、日外御酒の過た晩、夜更てそつと往て見たれば、詞「覗かれもせぬ隱れんぼ、三つの癖が六十の、趾も破らぬ悋んぼとはか思はれぬ、詞「サア其悋い親御と違ひ、若殿の佐平太樣、此比爰へ有付た、お照殿を付つ廻しつ、此方に札が落たなら、後とも言ぬにナフ小鹽、詞「ホンニ綠の言やる通り、仕たが利根なアノお照、素人と見へぬ年恰好、アリヤ何處から來た奉公人、ハテお出入の小間物屋、彌六殿の口入でと、人事陰言夕つく日、晴る雪道低下駄に、小間物荷箱背たら負、御用々々も長局、中戸の口へ來かゝれば、ソレこそ爰へ彌六殿、松金の鬢付油、わしは尺長元結が切た、こちや白粉が足らいでの、此雪水で半化粧と、時にも合

ぬ發才口、開る荷箱へ妙共撰取見どりが嵩取て、詞「ナア買物は皆揃へた、こちらも部屋で一休み、彌六殿は火鉢の番、庭の雪見て一休み、お照殿にも知らそふと、皆引連て入内も、挨拶そこ〳〵小間物屋、樣にそつぽり傍に心、配り餘つた歳暮の品々、緘て押込樣の下、手早に煙草吸付て、詞「ヱ大名には何が成、夏は泉水冬は雪、植木の枝に積つた所、春の花見を思ひやると、咥煙管の廊下より、梅の枝振細そりと、腰は柳のあしらいも、不束ならぬ褄はづれ、花盆携へ出來を、夫と目の張目遣ひに、何氣なき姿彼處に招き、詞「先達て由良之助殿指圖を以て、此方を是へ入込されしも、師直が寢所の案内、篤と知らん謀、樣子は如何と問懸られ、おかるは猶も聲潛め、詞「サイナア夫故わたしをば能う見知つた伴内が、京へ往た留主を考へ、奥を勤て居はすれど、長ふ居る人にさへ、寐間を知らせぬ身用心、況て馴染ぬ私等にと、思付たる一工夫、高ふは言れぬ彌五郎樣、コレ斯々と呟き合、咄しの内も奥口の、氣がねに手筈の間もなし、是非に今宵は延さぬ用意、身共は長屋に待合さん、暮を相圖にアノ密事、計はれよとそこ〳〵に、示合して千崎彌五郎、荷箱脊負て出て行、跡に急ぎの客儲、花の枝振釣舟の、ぐれつく竿の差詰し、襖を開き立出て、後には恍惚見取る〳〵佐平太、詞「ハテおぼらしいお照が手前いつそ命を投入の取合せ、水際までに氣が揉る、ヱ、どうも〳〵と餘念の塵、拂ひもやらぬ鹽の目に、いとゞ會釋の藤蔓を、床の鴨居へ掛んにも、屆兼たる賺を、ソレ足纏と抱き上れば、

詞「ア、御勿躰ない殿様のお影で、釣へ釣舟の、曲はないかと見合す内、詞「イヤ〳〵丁ど其舟の持合へ我等が取揖と、〇〇悪ざやれ身を縮め、詞「ア、コレ申し悪い事何遊ばすと振放す、はづみに轉ぶを猶取付、手先ふッつりコリヤならぬと、放す間もなく起立て、詞「行儀作法をお糺しの、御家柄にも似合ぬ御無躰、イヤサ無躰な事はせぬ、尋常に應といや、其返報は玉の輿、お部屋様と云れうと、手廻りで朽果うと、そちが勝手の返辭せい、どうざや〳〵と抱付引付、蛇が見付し巣立の卵、持餘したる其所へ、使者を勤て立歸る、家來岩淵丹藏を、揉合ふ機會に引捕へ、探る袴の襠合に、遁れて奥へ驅入跡、詞「若殿是は何の事と、頬も丹藏驚く佐平太、逃せし殘念むくりを隱し、詞「ヤア其方は今夜の催ほし、右馬頭羿秋方へ、成程〳〵親旦那の御意を受、石堂殿を招待に參りし所、御叮嚀のお使者と有て、彌暮方早々にお入有れる御口上、ホウ重疊〳〵、往時切腹せし鹽冶判官が痩浪人、親師直を覘ふとの風聞故、驚坂伴内を京都へ遣はし、由良之助が行跡を試す所、酒色に溺れて、組せし族も離散せしと内意の知らせ、アいか樣夫故當地の取沙汰、油斷なく聞合せど、脚腰の立奴もなければ、御用心に及ばぬ事、ヲヽサ〳〵親父の病の根は拔たれど、心懸りは壹岐の城主石堂羿秋、日外御前でぬかした五音、鹽冶の家とは親しき一門、痩浪人の腰を押すまい物でもないと、雪景色を幸に、饗應んと呼寄るは親人の深い所存、首尾よふ往けば隱居へ通ふ、此鍵も入ぬ物と、内懷を捜して悔り、詞「ヨ

リヤどうじや身共の外に出入を留し、親人の寢所の鍵、晝夜肌身を放さぬに、スリヤお失ひなされたか、ハヽ、慥に今の女めが、扨はと邪智の廻り樣、時計の六つは、詞「早入相客人入來に程有まい、汝も來れと主從は、隱居の間へと立て行、出汐の月と諸共に、壹岐樣是へと立闕より、知らせに出向ふ高の師直、妙數多に傅れ、待程もなく、右馬頭羿秋、供人數多を彼處に殘し、作法正しき上下の、裏表なき立派な骨柄、徐々と儲の席に直らるれば、主此方に一揖し詞「差てもなき愚庭の雪、御目に懸んと申入しに、苦寒を厭はず御來駕祝着、ソレ女子共お火鉢上よ、直に一間へ誘引の、圍で防ぐ寒夜の茶の湯、アイヤお心遣ひ御無用〳〵、身共が壹岐の舘よりは、僅二里にも足ぬ行程、初老に滿たる羿秋なれ共、左程迄には耄ませぬ、先緩々とお咄しをと、底へ響かす詞の探り、むつとはすれど遺の師直、詞「ム、ウ貴殿の年とは扨群の某、耄と當付てさみしたるお詞か、ヤ近比耳が痛く存る、ハヽ、ヽ、何の〳〵、斯花々敷女共を、手廻りに召使はるゝ、血氣盛んの師直殿、耄られふ樣がない、彼秦の趙高が例に劣らぬ此方の威勢、當時の諸侯に誰有て、さみする者が何ござらう、いかにもおつまやれば左樣な物、執事連署の筆頭なれば、諸大名の記錄を預り、今師直が鹿を馬と申せば迚、誰が否と申そうぞ、近い譬は貴殿の御縁家、鹽冶などが能手本、恐らく足利殿の國家は、身が臺所同然でござるてさ、ハヽヽヽハヽヽヽヽヽ、いか樣なァ去春殿中にて、カノ鹽冶判官をゑぐり、悪ういちらまや

れたも無理ではない、ヤ、、、何と、ハテ其如く額に微疵受てさへ、威勢強くなる貴殿、今度は斯耳でも鼻でも殺れさつしやれ、まだ此上に高なしの、榮耀奢はお望次第、ハレ調法なお體と、嘲弄せられて短氣の師直、顔は天火と躁込無念、佞思案に面を和らげ、詞「羽秋殿のきついお嬲、いか樣に仰られても、今宵は貴殿を目的の上客、馳走の數々取替引替、ヤモ緩々賞翫仕らふ、ア貴殿がや、いかにもと、客は强者、亭主は曲者、蕎麥切料理に居風呂の、去嫌なき受答、イザ先奥へと饗應を、嚙こなす齒の石堂羽秋、然らばあれへと侍女共が、案内に連て入影を、尻目に懸て師直が、我慢の皺に笑壺を顯し、詞「其臆念と睨みし故、茶の湯に仕懸し麻敗湯、總身を痿させ討取手段と氣も付ず、立越しは彼が自滅、が併し近習も召連ず、奥へ通る不敵奴、見せ付くれんと咽ずんばい、垂を引夜詰立騷ぎ、中門口より奴の丑平、由ありげなる女の帶際、片手に摑で引立入、師直はぞろりと眺め、詞「コリヤ〳〵丑平女を手込は何事成ぞ、アイヤ羽秋樣のお供の中へ、紛入込此女郎め、合點の行ぬ大膽者、水喰はせて一詮議と、庭井の傍にあらげなく、突据られて詮方涙、小止雪さへ一頻り、切戸の内より佐平太が、おかるを負へる扳刀、恐れて逃出る廣庭先、互に見合す顔と顔、詞「ヤァあなたはかほよ、ア、コレ〳〵顔よふ見知て居てかも志らねど、こちには知らぬ名もない女子、必ず麁相言ふまいぞと、くろめる詞を悟す間も、お照が目先へ扳身を突付、詞「身が懷中した隱居の、鍵うぬ何故に取匿した、

イエ〳〵更々そんな物取た覺へは、ぬかすまい、盜取たに相違ない、サ何者に賴れた有樣に白狀ひろげ、イヤモどの樣におつしやつても、ヤァまぶとい女郎め、白狀せずは降雪に、衣類を引剝寒晒し、用捨致すなソレ丑平、早く〳〵と佐平太が、下知にまつかせ立懸り、上着をはぎもあらはの肌着、一重かよはき弱腕、腰に用意の早縄に、縛重き此塲の時宜、見るに心も消入かほよ、遁がたなきうき涙、見取れ入たる師直は、詞和げ樣先より、詞「鹽冶が妻のかほよとは今言消た詞の端、聞かぬ内から見忘れぬ我戀人、忍び入たは此師直を討所存か、ナニ此女がかほよとな、ハテ鰯網で鯨とやら、油ぎつた若後家殿、親人を敵扨とは小賢しい事、コリヤやいそちが夫鹽冶判官、親人の威勢をば、妬く思つて彼狼藉、可惜しい大名樣、卵の樣に踏潰したは、判官が無分別、大白痴から起つた事、ハ、、、、、と出放題、詞「コレサ悴そりや言はいでも知れた事、門外へも寄付ぬ腰扳の家中めらに、煎じても呑せたい健氣のかほよ、ガ又此屋敷へ入込しは、差圖の仕人が有ふがな、アイお目立まする上からは、最早包まふ樣はなけれど入込ましたは私が一存、人の差圖は請ませぬ、ハ、、、、、一つ穴の狐仲間、供に紛らし引入た、羽秋への馳走役、ハテ好坪へ仕掛たなア、ム、コリヤ親人の宜御趣向、手序に女が問狀、鍵を盜で隱居の間へ、うぬも手引に違ひない、サ有樣にぬかし居らうとせちがはれ、おかるは我身の責苦より、お主の難儀成行を、思廻せば張詰る、胸の氷の碎るつらさ、詞「イエ〳〵誰にも賴

まれぬ、鍵の失たも金輪際、ヤァ知らぬとは横道者、ヤ大躰の女でない、ソレ打据て憂目を見せよ、畏つたと丑平が、擲情も手荒き割竹、肩先居敷の用捨なく、打据〳〵責せつてう、嬲きお照が身の苦しみ、見るに目も曇駈寄かほよ、詞「ア、コレヤ寄まい〳〵おかばいなさるゝお志、盡未來際忘れぬど、現在お主の、イヤサァ惜うもない此命、かばい立遊ばしたら其疑ひであなたの身に、ナ必々〳〵傍杖受て給はるなと、いふ聲さへも、ちどろにて、吹雪に咽ぶ息切は紅蓮の氷八寒の、憂目と増る呵責の杖、身を切る如く手は叶はず、綴る口さへ冷入ば、叫ぶ聲音の出兼て、消々とこそなりにけり、詞「ヤイ〳〵丑平大事の囚人殺さぬやう、息を繼せて苦しませ、かほよは此地へ〳〵〳〵と、和ぐ老人座敷へ招けば、詞「ナニ親人、かほよを呼寄何となさるゝ、ナニサ〳〵若い者の及ばぬ思案、師直が心は武藏野、貞心を稱美して匿ひ呉ると眞綿で到、猫撫聲を呑込む佐平太、詞「庭木に括る詮議の女、此大雪に冷凍らせ、白狀せずば新刃の切味、か又彼奥の客人を、加減の茶の湯でいかぬ時は、ヲ、夫もぬからぬ年の功と、床に懸たる半弓に、矢を取添て丑平招き、吹込毒氣を諾き〳〵、弓矢受取圍ひの下屋、忍ぶ奴を危ぶむかほよ、引立〳〵親と子が、馴合う糸口縄付に、心を殘して奥に入、跡は降積雪の外、身に添ふ物は泣ばかり、おかるは曇る顔振上、詞「斯ならふとは露ちらず、彌五郎樣にさつきの約束、濟やれ仕課せんと、佐平太殿が戯れの、其内に奪ひ取た閨の鍵、折を見合せ渡さんと、思ふ間

なう此いましめ、せめて息有其内に、敵を狙ふ方々の力と成て先の世で、勘平殿に告知らせ、譽られるのを樂しみに、果敢ない知死期を待内も、思ひがけないかほよ樣、劔の中の此の屋敷へ、來り給ふは何事ぞ、詞「もしもの事が有たなら、お主大事と樣々に、盡した心も水の泡、何と詮方鳴響く、遠寺の後夜に降頻る、ちまき風や雪風の、吹折氷柱は身に立つ利劔、凌ぎ兼ては防ぐ手も、縄目に喰入血の涙、紅潛る風情なり、樣子小陰に立聞丹藏、とは白雪を忍び足せき立心小間物屋、此場へ駈付見るよりも、詞「ヤァおかる殿、彌五郎樣か、待兼ました、待て居た、ヲ、サ〳〵委細の樣子はたつた今、聞と等しく來りしも、責苦を救はん爲計と、解く縄目に、詞「イヤ〳〵〳〵私を助けて見咎られ、過あらば詮なきのみか、未來の夫へ言譯なし、やつぱり此儘、此髷目に隱して置た閨の鍵、座敷の案内も今の内と、起も得やらぬ苦痛の惱み、髮さし付れば彌五郎が、心得二の髷解ほどき、鍵取出し出來た〳〵、詞「シテ〳〵館の案内は、寢所を右へ折廻、坪の内の樣側より、ム、湯殿へ通れば物置か、アイ其奥が廣庭筋、柴部屋長屋の通ひ道、詞「ヲ、サ〳〵委しく承知と的中の、二人を狙ふ丹藏が、床脇よりも種が島、圍ひを飛來る手裏劔に、釣舟落て水ざんぶり、火縄消れば鐵砲を、打付る音聞付て、振向く彌五郎遁さじと、打て懸る岩淵が、抜身を透さず打落し、又抜かくるを刎飛し、引潛いてもんどり打たせ、抜間逃行く丹藏を、遁さじ物と追懸行、詞「彌五郎暫しと石堂羽秋、圍の間より徐々立出、

詞「目ざすは師直只一人、實否を見屆討せん爲、彼が方便に乘と見せ、入込し石堂が謀計に、落入しは天運循環、此上包に及ばねど、石淵を殺害せず、鐵砲消たる我仁心、おかるが案内の要害迄、由良之助〳〵相ゐらせ、人數と倶に乘込れよ、女ばらは身共に任せ、早急がれよと聞より彌五郎、詞「ハッハ、、、、、恐入たる御厚情、兼て今宵を期したる故、藁苞は忍びの挑灯、串貝竹は繼梯子、紡針鍵縄に至る迄、歳暮の支度に准へて、斯まで下家へ運び置ば、詞「追付本望達する吉左右、片時も早くと勇立、表を指て翔行、透さず駈下りおかるが縄目、とくより謀の師直親子、隱居の間より動ぎ出、詞「丑平めは何して居る、コリヤヤイ丑平〳〵、手箸は爰と敷へても痿藥にひり〳〵と、身動ならぬ有樣に、苛つ兩人騷がぬ羿秋、詞「ホ、ウ最前我に進る茶の色、紫の泡立て、湯氣に變氣立登るは、麻敗湯の痿藥と推量し、根太下へ打明たるを、頬へ浴たる下郎がまびれ、ヤ念の入たる御馳走と、手盛に挫まず冷笑、詞「ナニサ〳〵羿秋が肩持と見て取た鎹思案、ソレ〳〵悴人質に留置た、かほよを引出し糺明せよ、畏つたと駈入内、コレ〳〵待た佐平太殿、かほよは爰にと庭井戸から、思ひがけなく立出れば、親子が恟り、詞「ホ、身共が家老廣島源五右衛門が、後家の沖野、かほよと名乘せ入込したればこそ、師直が此贋者を、計知たる右馬頭、ナニ某を贋者とは、ヲ、夫々額に去年の古疵迄、紛ひもない親人を、ヲ、サ贋物と見極めん爲、宛行置しかほよが贋者、似ても似付ぬ沖野を捉へ、押推に見忘れぬ、

戀人のかほよとは、そちやどうして見知て居る、サ夫は、ハ、、、、、化の皮の剝れ口、サア正躰を顯せ〳〵、ヲ、ソレ〳〵おかる樣と内通して言合したるさつきの仕組、誠のかほよと心得て、閨へ立込置し故、師直殿の抜道迄、自然と知れたる此空井戸、探り出たも殿樣の、深い方便のお指圖と、おかると共に手番を、悦事は限なし、詞「ヤァ重々憎い女めと、二人を目掛切込佐平太、天の與へと落たる抜身、手ん手に拾ひ渡り合、破かぶれと贋師直、石堂に打てかゝるを刎飛し、膝に引敷下緒のいましめ、庭には女を苦にせぬ强勢、見兼て羿秋遠殺しの、秘術にうんと倒るゝ佐平太、二人を制して氣遣ひ致すな、詞「十間殺しは石堂が家の極秘、そいつに搆はず此贋者が、額の疵ソレ〳〵兩人洗見よと、椽よりはつしと蹴落せば、ハット兩人立掛り、雪を手早に摺付〳〵、洗へば疵も白髪も流れ、四十に足らぬ斑の黑髪、詞「ハイ私は此家の譜代空右衛門と申す者、ホウ師直に能似たる、儕をこつちへ取上て、屋敷の廻りは身が同勢、透間もなく堅置ば、空を翔つて行んはまらず、地を潜る抜穴まで、顯し置ば袋の鼠、夜半を相圖に乘入る手筈と、詞もいまだ終らぬ内、御迎ひの爲推參と、白洲にこそはかつ蹲踞ふ、詞「ソレ家來共、其贋者を連歸り、身が館に引据置と、引せる元の空右衛門、沖野おかるも羿秋の、供の人數に引纏はせ、壹岐の館へ歸らるゝ、程もあらせず東西に、拍子木の音くはつし〳〵、大門碎く大槌の響、俄に騷ぐ屋敷の内、周章る隙も京都より、飛立歸る驚坂が、勝手口より聲かけ

付、詞「ヤア申し若旦那、佐平太様〳〵といふ聲に、氣の付く佐平太、詞「伴内か遲かつた〳〵、ハ、ア夜を日に繼で今晩到着、今宵の様子聞たる故、些少も猶豫は怖物と、寐耳へ水の騒動に、俱に胡亂〳〵丑平も、騒ぐ内より、三重「鐘太皷、詞「夜討じや〳〵切入た、遁すな怪我すな早逃よと、夜詰の座頭妙下婢、茶道小性に至まで、銘々得物の鎗長刀、鞘口突やら弦張ぬ、弓を彈やら上を下、更に分ちはなかりけり、後の襖さつと開、顯れ出るは誠の師直、詞「コリヤ〳〵富士山が崩れて、來ても氣遣ひない、我に續けと上を見ぬ、鷲に引添ふ瓜、糸の縺るゝ志どろ足踏途も覺へず、三重隨ひ行く

三册目

榮耀にほたへる舘の構、座敷〳〵も明渡し、軍慮にすゝどき由良之助、四十餘人は馬挑灯、手番ひ定め責入ば、晝と輝く廣庭先、周章騒いで逃行下部、偶々敵對ふ者あれば、千崎矢間郷右衛門、力彌堀部矢頭の面々、天と川との入亂れ、秘術を盡して三重「切立れば、降雪よりも烈しき戰ひ、中にも岩淵丹藏が、抜刀にて踊出、詞「ヤア痩浪人の及ばぬ腕立、刀の引導受取れと、喰留懸るを、重太郎苛て突鎗打拂ひ、結び合ては振ほぐし、暫し勝負も分ざりし、八相の手を卷崩し、脇腹ぐつすり突通され、無念と岩淵言せも立ず、止を指も矢間が手並、徒黨の人々此

處彼處、戰かふ内に大星力彌、佐平太に渡合ひ、詞「親の最後の先駈せよと、無二無三に打刀、開く肩口後さま、切れて佐平太たぢ〳〵〳〵、藥師寺爰にと力彌が眞向、切てかゝるを換す間に、逃行佐平太捨置て、次郎左衛門遁さじと、太力差かさす力彌が勢ひ、氣を呑れて藥師寺も命からく〳〵逃て行、言甲斐なしと奴の丑平、痺藥の本復に、見せ付呉んと段平物、千崎彌五郎飛で出、懸合ぬ敵なれど、商ひ得意の馴染だけ、成佛させんと上段下段、切合半へ寺岡は、かけや引提走寄、エ、面倒なと首の骨、どうど胴突體は微塵、氣味能かりける死ざまなり、由良之助に引添て、一味の人數駈付〳〵、詞「抜道までも立切て、舘の隈々捜せども、師直には出合ず、風を喰うて落失しか、イヤ〳〵〳〵斯まで固めて遁れん様なし、羽秋公のお差圖の、柴部屋を最一度吟味、畏つたと駈行先、矢間が鎗に突留て、柴部屋よりも引出す、師直駈寄人々制する大星、詞「年配と云額の古疵、覺悟有れと言せも立ず、詞「ヤア奇怪なる陪臣共、師直が死物狂ひと、鎗引抜たる腰刀、打て懸るを由良之助、透さず押へて首撥切、初太刀の跡に折重る、四十餘人が取圍、鱠と擲く寸斗〳〵切、浮木に逢へる盲龜は是、三千年の優曇華の、花を見たりや嬉しやと、躍上り飛上り、一度にはつと嬉し泣、理りせめて三重「哀なり、暫く潜む裏門のくゞりを出るも明近き、思案そゞろに寺岡が、傍見廻し合印の、頭巾裝束脱捨〳〵、一つに括り脊に負ひ、合羽包の文箱の緒、首に引掛大小ぼつ込、詞「ヱ、殘念〳〵本望達せし上からは、

諸士方諸共追腹と、思込だ平右衛門に、由良之助様のお指圖にて、お國へおらせの飛脚の役目、是も忠義と達てのお頼み、辭退ならざる此場の時宜、ハテ是非なしと咳きの、隙もおろ〳〵夜明の鐘、詞「南無三時かと驅出す、後に窺ふ伴内が、うぬをと懸るを刎飛され、又取付を引廻し、首筋腰際引掴み、まそつと伏されと高塀の、内へ閃々驚坂を、投越帶も引締て、驅出す足輕平右衛門、飛が如くに三重「行空の

第四冊

詞「ヤア足利殿の嚴命を蒙る藥師寺、驚坂迚も上使同然、鹽冶崩れの浪人共、コリヤ家來共へ手向ひ致すか、アイヤ全く手向ひ仕るには有ね共、理不盡に御詮議とござる故、いかにも浪人共の手際、少し許お目に掛る、シヤこしやくなと權威の兩人、逸り切たる千崎矢間、留るは年配鄕右衛門、繩をかゝれと家來が口々、光明寺の廣庭先、犇めき合たる計なり、詞「ヤレ旁暫時と、聲を懸て立出る、大星由良之助良金、功成名遂此寺へ、籠居の内の丸腰も、上を憚る身の謹み、上使に式禮事終り、詞「主家の仇を報じてより、公の御裁斷待設けたる今日只今、何にもせよ御不審の儀、申開かぬ其内は、荒氣は上への恐れぞと、愼深き一言に、各々はつと心付、差扣ゆれば次郎左衛門、詞「ハ、、、、腕なしの振ずんばいとは、和ぬし等が事さ、足利殿の御不審別

儀でない、去冬高の館へ押寄、狼藉の夜武將より御預けある、諸家の記錄幷に御添金千兩、行衛しれずと高の佐平太殿より、訴へ察する所浪人等が、仕業ならんと評議一決、サア眞直に白狀せよと、聞に堪らず鄕右衛門、詞「御疑ひも事に寄、諸士の中に盜賊有とは、餘り敷御詞と、迫立面色並居る義士、各々一同に立懸るを、猶も制して由良之助、詞「コハ存寄ざる仰、本望遂なば泉下の主人に、仕へんと欲する我々、何しに不義の所存を抱かん、イヤ其言譯暗い〳〵、あらがはれぬ證據が有ぞ、フム驚坂殿證據とはな、ヲヽ望ならばお目に掛ふと、取出す金の短冊、詞「寺岡平右衛門と書記せし、此短冊覺が有か、成程〳〵、夜討の砌味方の者へ、附させ置し袖印さ、シテ其寺岡平右衛門は、ハア子細ござつて此場には、居ぬといふのか、居ぬ筈〳〵、諸家の記錄お添金、二品を納置し寶藏に、落散有し此短冊に、寺岡が姓名記せし上からは、知れて有る金子の盜賊、ヲヽ伴内が申す如く、二品の盜賊は平右衛門に相違なし、但し又足輕めが仕業でなくば、サア爰へ出し言譯させい、さなくば一味徒黨の者へ係る大罪、ソレ家來共繩打と、重る雜言無念の人々、指當る理に良金も、暫詞もなき折柄、入來る桃井若狹助、詞「ヤレ騷しい皆引けと、家來を退け悠々と、藥師寺に打向ひ、詞「舊冬夜討の砌より、大星父子を始め、人數を引分拙者が屋敷と、當光明寺へ預置るゝ諸士の始末、相糺すは身共が役目、譬御不審有にもせよ、某へ屆もなく、自己の詮議其意を得ず、殊に陪臣たる驚坂伴内、誰が赦しての詮議

呼はり、察する處桃井を、輕んじての仕業なるや、サア返答有れ藥師寺殿と、詰懸られて俄の廢亡、詞「是は〳〵御尤、そこへ心の付ざりしは、此方の不調法、ソレ鷲坂もお詫をと、眞面になれば揉手の伴内、イヤモ主人を討れ愁歎の上、二品の紛失、何角心配故の失禮、眞平御免と頬眞赤、志よげり返るぞ心地よき、さのみはいかゞと面を和らげ、詞「斯申すも役目の表、必ず心に支られな、ナニ由良之助、殉死の願お上にも、御聞濟有にもせよ、計らざる珍事出來、旁返答いかゞぞと、仰にはつと平伏し、詞「身に覺なき無實の汚名、差當る寺岡は、本國へ時限の早使、歸り次第に申譯と、いふを打消そりや叶はぬ、詞「何時戻らふやら知れぬ寺岡、落着は未の刻との嚴命、夫までに言譯立ずば、縛り首だ覺悟せよ、イヤ〳〵左は言れな藥師寺殿、諸士一統に付たる短冊、殊に烈しき騷動の場所、落し有しを誠の盜賊、拾取て科を負せる手も有事さ、未の刻迄二時計、夫迄待て遣はされい、ムヽ若狹殿の御意無下にも成まい、暫時が中は待ても呉ふが、七つの鐘の鳴迄に、寺岡が歸らぬ時は、ハア由良之助が二品の盜賊、詮議致して御覽に入れん、面白い、お預けなれば寺を限り、他出叶はぬ身を以て、いかにも此身此儘此場を去らず、確と七つの刻限迄、見事詮議を、御意には及ばぬ、イザ桃井殿先お先へ、然らば後刻と藥師寺は、鷲坂引連客殿へ、邪智を廻して入跡へ、寺僧一人罷出、詞「桃井樣へお願ひ有と、二人連の旅の女、門内迄參り居ます、いかゞ計ひ申さんと、聞より扨はと若狹助、心の割符大

星初め、諸士の銘々式禮し、殘らず立て入ければ、詞「願ひと有れば聞、捨られず、是へ通せと赦さるゝ、詞洩聞庭傳ひ、寞れやつるゝ旅勞れ、禮義計の白粉も、艶なき胸に只獨、思ひ有げに座に着ば、若狹助温順に、詞「途中におゐて乘物より、見受たる其方、願ひとは何事なるぞと、仰に猶も手をつかへ、詞「我々は都方より、病ふに恟む嫁諸共、鎌倉へ下りしは、厚恩有御主人の、石碑の在す此御寺へ、心計の布施物ながら、御前の御赦し受し上と、押てのお願ひ慮外の段は、幾重にも御免なされて、下さりませと、携へ持し一腰を、差出せば手に取上、詞「見覺ある差添、布施物なりと言なすは、我預りの大星親子に、暇乞致させ呉よとの、願書代の一腰よな、ハアお慈悲深い桃井樣と、見かけましての御訟訴、嫁を御門に殘せしも、お暇願ひし家來の娘と、お呵りを憚る遠慮、不便と思し願の品、お聞屆給はらば、生々世々の御情と、土邊に平伏し願ふにぞ、詞「ムヽ夫婦親子の愛情さもあるべし、心を込たる願ひの一腰、桃井よきに計ふ間、當寺に暫く休息は、ナンレ心任せ、長途の勞殊に又、病ふに恟む嫁とやら、隨分慰り介抱有、用事有ば某へ必ず遠慮無用ぞと、表を立る情の差圖、何とお禮の數々を、言ねど洩る有がた涙、隱し兼たる冥加なさ、いざと寺僧が案内に、連て表へ桃井は、客舍をさして入にける、寺は俄の客設け、忙しき中を同宿共、熱た鼻の油取、墓の小陰に寄擧、詞「ノウ念西、鹽冶浪人共が去年から、喰ひ潰したあげくの果、酸の大根のと混交鱠、入佛事なら布施にも成ふが、三

文にもならぬ厄介、詰らぬ物じやないかい、ソレイ孫子に傳へて、坊主にやど成物ではない、シタガ欲入、咄したい事が有と爰へ連ておじやつたは、サァ折入て無心があるが、何と聞てくれる氣か、ム、無心といふてない事は、知て居やる欲入坊、錢銀の事では有まい、ヲイノ外でもないが、此寺の鐘撞は貴樣の役、今日の七つを一時か半時、早ふ撞て貰い度と、計では合點が行まい、何を隱そう此欲入、元は高の師直樣へ仲間奉公、失廢ての飯焚坊主、され共忘れぬ古主の敵、寺岡が戻らぬ中、七つの鐘を撞や否や、浪人共は縛り首、殺して仕廻ば旦那の敵、討たも同然、夫故の此賴と、聞より西念顏色違へ、詞「ヱ、めつそうな、預りの鐘つき違へたら、忽おれの身の上じやわいの、サ、、、そこを賴が相弟子の好誼だけ、イヤ〳〵〳〵人を助る出家の身で、大勢の命を取、釣鐘は得撞まい、そんならどうでも聞ぬじや迄、ヱ、置あがれづくにうめが、大事を聞れた上からは、欲入が百年目、もうコリヤ生ては置れぬはいやい、ヨウそふいや樣子を和尙へと、駈出す首筋引戻し、どうど蹴倒し乘掛り、力に任せ衿絞に、ぐつと留たる呼吸の通ひ、折柄禪の勤時、木魚太鼓の物音に、紛れて夫と四苦八苦、手足をあをち死でけり、始終小陰に窺ふ伴內、詞「欲入息は留つたか、ヤァ驚坂樣そんなら樣子を、ヲ、最前より是にて殘らず、ホイ是非に及ばぬ、併こなたの爲にも主人の敵、浪人共を仕廻ふ計略、見遁す心か繩打か、返答次第で思案が有と、ちつとも挫まぬ頑魂、伴內勇んで出かした〳〵、詞「仲間

風情の其方故、未だ面は見知らぬ共、適忠臣感心せり、花は櫻煮鯛坊主と、譽そやされて落付欲入、詞「然らば愚僧は此死骸、取片付て七つの鐘を、ヲ、撞が相圖にきやつらが自滅、甘い甘い、併失たる二品が、若し出ぬ時はお家の越度、イヤ氣遣ひない、紛失せしと足利殿へ、申上たは浪人共を、罪に取て落さん計略、二品共に屋敷に有る、出來た、シイ高い〳〵、其方は能時分、鐘撞終らば身が屋敷へ、スリヤ此働きを功になされて、ヲ、還俗致させ以前の奉公、褒美は其時、ヱ、忝い、隨分ぬかるな、合點と、示合して欲入は、屍骸を肩に鷲坂も、別れて入や奧書院、一圓相の窓を打、風も餘寒の二月の空、義心變ぜぬ操の松も、花なき春に大星良金、何角工夫の獨言、殉死願ひの時も時、計らさる公の御不審、加之らず桃井公、帶劍叶はぬ某へ、附與ある一腰、子細ぞあらんと柄に手を、斯と洩聞次の間に、二人の女が聞ぞとも、白刃扶持打詠め、詞「ム、加古川の重代波の平行安、是を持參の女とは、我夫が舅御樣、此世の名殘只一目、お逢なされて下されと、言つゝ親子が明んとする、襖を押へて罷ならぬ、詞「家を出て妻子を忘るゝは武士の常、僅に薄き此唐紙、明れば夫婦親と子の、緣も是迄早歸れと、御す詞の錠前に、明ぬ岩戸の胸の闇、くらき思ひを打寄る、袖に小涙が寄方も、涙先立ばかりなり、斯と白洲の庭傳ひ、立出る千崎彌五郎、詞「桃井公のお情にて、得心は致しながら、上使を甲に氣儘の藥師寺、有無の返答疾せよと、權威の催促、貴殿の御賢慮いかゞぞと、急ども躁かぬ由

良之助、詞「藥師寺如きが佞奸を以て、謀らんとは及ばぬ、〳〵、及ばぬ工に猿猴が、水の月取縁頭、覺なき身の鈷も追付晴る、雲間の雁は後藤が目貫と、目貫の通ひに心を付よ、親鮫は傍に居れど、子鮫は二の切羽には居ぬぞ、折角來ても詮なき切刃、時節を待と差添に、擬へて志らす詞ぞと、悟る千騎母娘、互に心奥の間の、襖引明次郎左衛門、伴内召連のさばり出、詞「七つといふても間はない、時が立ても歸らぬ寺岡、明りが立ずは反逆人も同然、逆磔の仕置は遁れぬ、返答早くと重る雑言、堪へ兼て駈寄千崎、押隔て由良之助、詞「ホ、慣り至極ながら、開城以來の千辛萬苦、夫に比すれば瑣細の辛抱、七つの時刻もまだ一時、急所でない待れよと、一句の金言千鈞より、響く鐘樓に、撞出す鐘、志て遣たりとぞくつく伴内、詞「ア、レ〳〵〳〵今撞出したは大方七つ、ソリヤこそ鳴つたは今ので二つ、三つ四つ五つ六つ七つ八つ、ア、八つでは詰らぬはい、其筈ではと胸算用、三五の十八二九十六、桁違ふたる算盤の、呟やく鷲坂、挫まぬ藥師寺、詞「ヤア半時一時待た迚、所詮言譯立まい〳〵、隙取ては上への恐れ、腕を回せと無法の權柄、大星莞爾と打笑て、詞「仰を待ず二品とも、疾より詮議致し置、ヤア〳〵兩僧早是へと、聲に隨ひ同宿欲入、續て出來る念西坊、見るより鷲坂二度惝り、お肝が潰れたか、大星樣のお差圖で、欲入坊と云合せ、寺役の戻りに見て置た、歌舞妓役者の身振を似せ、詞「死で見せたはこなたの工み、繰出し位牌は出家に相應、手目が上つてこつぱい灰寄、仕上料理のぜん

まい機關、首尾よふ參つてお目出たいと、聞より伴内ヨウ〳〵〳〵、詞「そんなら以前は師直公の、ヲ、〳〵〳〵家來といふたは眞赤な、啖と一所に鐘撞坊主、欲入と名が敵役、しぶとい仕打でぽつくり往生、小六代もやり兼ぬ、どんな物じやと兩人に、ひやらまづかれて恍惚鷲坂、投首するぞ心地よき、大星重て、紛失せざる二品を、失しと武將へ訴へられしは、我々を罪に落さん、佐平太殿の計略なりと、鷲坂が自身の白狀、此事露顯致すに於ては、足利殿を僞る大罪、咎なき内二品とも、有所知れしと言上あるか、サ夫は、但しは某鷲坂を縛上げ、二品の代りに御上使へお手渡し仕らうかな、サア其儀は、サア〳〵サア〳〵何とと詰寄千崎、二人の僧も禪棒追取、擲伏せんず勢ひに、ア、申し〳〵藥師寺樣、斯成たれば叶はぬ、記錄も金子も屋敷に有たと、お屆なされて下されと、いふもおろ〳〵獅嚙頻、不省〳〵に次郎左衛門、詞「由ない事を口走つた、伴内の大白痴、二品紛失を訴へしは、高の佐平太心得違ひと、武將へ言上いたし呉ふ、ム、さすれば諸士の疑ひも、念に及ばぬ言譯立た、ホ、大星始め旁の潔白、是にて承知と、若狹助、徐々と奥より立出、詞「不糺しなる疎忽の訴へ、御咎も有べき所、混雜の砌なれば赦し置、此上は諸家の記錄、御添金諸共別條なき旨、言上の儀延引せば、藥師寺殿、貴殿のお身にも係る御咎、早く〳〵と理の當然、詞「成程疾より左樣存じ居つた、上躰宜しく申上ん、ナント伴内そふではないかい、イヤモ結構な桃井樣のお捌き、ア大星氏にも暫時の心配推察致

した、斯申譯相立も、天道正直神や佛と、太神宮の御詫宣、扨々感心仕ると、片言交りの追從口、苦笑ひして若狭助、詞「某は大星へ嚴命の趣有ば、跡より登城仕らん、藥師寺殿には先お先へ、成程〳〵兎も角もと、挨拶そこ〳〵、出行兩人惣門迄、お見送りは千崎彌五郎、跡に附添兩僧も、門前さして急行、既に日陰も傾きて、此世を申の時刻ぞと、威儀を正して若狭助、詞「即刻明り相立上は、心置なく由緣の人へ、對面の儀は心任せ、情も籠る演說に、由良之助謹で、詞「ハァ殘る方なき御厚情、御意を返すは恐ながら、申開き立にもせよ、妻子に逢んは死後の人口、此儘殉死の御願ひ、御許容仰ぎ奉ると、覺悟の詞次の間に、洩聞くお石が曇聲、忠義一途に侍の、表を立るお願ひを、無理とは更々思はねど、爺御に離れ柱とも、杖とも頼む力彌にも、逢ふは別れの此小涙、夫を苦にして病身より、傍で見る目のいぢらしさ、推量して給我夫と、歎けば俱にない嘘り、こがれ〳〵た力彌樣、お赦受ての契りさへ、一夜切なる憂別れ、せめて名殘に今一度、お顏が見たさ逢たさに、慕ふて來た未練者、憎い奴じやと必ず、お呵りなされて下さんすなと、娘心の一筋を、思ひ遣りつゝ諸袖に、涙を落の姑も、雨に霑るゝ俱涙、若狭助聲烈まし、詞「イヤ〳〵歎く所でなし、個程功有る旁なれば、助命させよと仰を受け、認置し赦免狀、力彌が方へ告知さん、ヤァ〳〵近習の者共早く參れと、聞よりお石は、泣入し嫁を引立、椽より下へ突落し、詞「小涙去た、ヱヽハテ緣切たれば他人のそなた、人の謗もないからは、

逢たい人に逢ふたが能い、姑去に此母が、去だ〳〵と胴欲に、表は見せて心は情、頓智を感て ホヽ、尤の計ひ、詞「大星の緣切たる小涙、父本藏に成代り、今日歸參の奉公始、力彌への使者言付ると、仰は耆婆が藥にも、勝るはお主の惠ぞと、嬉し涙にお石も勇、詞「お情籠る此役目、片時も早ふ、アイ〳〵〳〵是も矢つぱり母樣の、お慈悲〳〵と伏拜、頓て立寄赦免狀、押戴きおしいたゞき、夫に逢を力草、病苦も忘れ勞たる、足もしどろに桃井の、舘をさして急行く、後姿を滿くる涙、押隱して由良之助、詞「重ね〴〵の御情、此上は拙者を始め、諸士一統の落着を、ホヽ武士の鑑と成べき方々、助置度物なれ共、死罪を願ふ高の佐平太、元來徒黨の科あれば、願ひに任せ兎も角もと、仰にハッと禮服を、脫ば用意の白小袖、寺僧が運ぶ上下の、無紋は死出の無常門、開く一間に原千崎、小寺矢間に至るまで、皆々覺悟の死用意、詞の端〳〵氣遣ふお石、詞「申し我夫助けよと有御上意に、あなたお一人殉死を、お願ひなさるゝお心は、ヤァ未練の繰言、二君に仕へぬ一味の義士、某始一人も、助かるべき所存有らふか、イヱ〳〵夫でも助けると、御上使樣の御赦免狀、ハヽヽヽ赦免狀迚遣されしは、悴を始諸士の銘々、切腹御免の御書物、ヱヽイハァそんならどふでも助からぬ、お命かいのとだうと伏、又も涙に暮居たる、歎きを察し若狭助、白地に聞せなば、病苦に惱む小涙が命、即座に死せん不便さに、赦免狀と偽りしは、力彌に一日存生の、暇乞させん爲、是迚も本藏が、今端の恩愛察し遣り、

心計の追善ぞと、清き御目に浮涙、詞「ハヽコハ有がたき御仁計、さは知らずして助かると、女心の一途に思ひ、勇進んで立越しに、悴も殉死と聞ならば、其場で直に嫁が臨終、不便の者と計にて、慎深き良金も、堪へ兼たる憂涙、お石はいつそ正躰なく、詞「ホンニ思へば無端い、現在夫が切腹の、撿使代の御使とは、知らずいそ〳〵悦んで、往た心根がいぢらしい、海山越て死に來た、あの子計か親子御共、今を限りのお命と、思へば身も世も有られぬと、兼て覺悟も今更に、取亂したる口説泣、間は隔ても隔なき、夫婦の歎想像、桃井始一座の諸士、恥て隱せど堰兼る、涙は膝に落瀧津、袴の襞に淵なせり、早刻限ぞと近習の武士、短刀載たる三方を、諸士の前に指置ば、各上使へ式禮し、肩衣刎退座を占れば、ハ　ア惜むべし〳〵、詞「時刻來たるに國許より、歸らざる平右衛門、對面なくて殘念ならんと、仁慈の仰に恐入、詞「ハヽコハ有がたき御賢察、今端に及び何をか期さん、イザ御見屆下さるべしと、氷の刃手に取上、鋒突込膝樣、ノウコレ今は別れかと、思はず岸波と襖の尻栓、斜んでばつたり轉込むお石、國許よりの歸り足、息を量りに平右衛門、此躰見るよりどつかと座し、詞「ハツハヽ、夜を日に繼で急の道中、お國の手番達する上、御存生に御對面は、まだしも本望、拙者めも殉死と、刀の柄に手を懸れば、詞「ヤア狼狽られしか寺岡氏、夜討の場所より退けしも、深き所存有ての事、大星が末期に殘ず貴殿へ遺書は、コレ此生花、ナニ梅花を拙者へ御遺書とはな、ホ事ならば折盡してん

梅の花、我待人の來ても見なくに、今折盡す四十餘人、貴殿は殉死を止つて、我待人はお家の榮、見する命を生花の、秀句に鹽冶の御跡目、我亡跡も寺岡氏、偏に翹存ると、忠言重き大石に、心魂徹する平右衛門、止る忠臣死するも義心、名殘牡鹿を慕ふ妻、涙果しも七つの刻限、若狹助感じ入、詞「ホヽ適々、異國本朝例なき、義心の鏡大星の、末期の願ひ先達て、行衛知れざる縫之助、有家知れなば鹽冶の跡目、國に替ても麁略は無いと、聞より莞爾打笑て、詞「ハヽハヽヽヽヽあら樂し思ひは晴る身は捨る、浮世の月にかゝる雲なし、いづれもさらばと並居る義士、我後れじと取直す、劔の光石の火の、果敢なき譬有爲無常、實に類なき武士の、辭世と俱に朽せざる、代々に名のみぞ三重「殘しける

五冊目

宇治と桂と木津川口を、ひとつ流れの淀川筋を、下りや棹さす登は夜船、引や綱手の長繩手、陸は魚荷がゑいさつさ、酒よ奈良茶よ商ひ船の、野鄙な賣聲牧方堤、晝は往來も絶間なき、道を息急躓し、石も鹽冶の縫之助、跡を慕ふて浮橋が、脫て廓の追人の者、漸追付、詞「見付た浮橋、虫に成た縫之助、うせい〳〵と無法の手込、詮方盡たる威の刀、わつと恐れて逃行隙、浮橋おゑやと手を引て、行を遠目に見付る大勢、又引返し京道の、跡を慕ふて追て行、川は下

りの大屋形、船を座敷と鳴物に、囃立たる太鼓三味、龍田川には紅葉を流す、粋の名取と難波に流す、よいや〳〵よいやな、水は淀屋の辰五郎樣よ、都下りの此船遊び、よいや〳〵よいやな、藝子法師に花車仲居、末社が音頭取楫は、川市丸も及びなき、岸は茂し柳陰、彼方此方と縫之助、逃迷ふたる浮橋が、難儀の樣子船と陸、見合す顔は、詞「浮橋樣か、さう云まやんすはあづま樣、あなたは鹽冶の若殿樣、辰五郎か能い所で、追人に出合手詰の難儀、イヤ其咄しは跡での事、先々船へソレ船頭、早う〳〵に漕寄〳〵、駈る歩行を縫之助、渡るも夢の浮橋が、乘も心は關破り、捜せ〳〵と追人の者、駈來る間に漕出せば、ソリヤ關破りの浮橋太夫、二人を埋んだ屋形船、着よ戻せと喚く聲、詞「ハテ姦しい關破り〳〵と、身受さへすりや言分有まい、ヲヽ面白い浮橋太夫が、身の代は皆まで言ふな、五百兩でも千兩でも、客は淀屋の辰五郎じや、不足は有まい跡金は、下り次第當座の手附、ソレ受取と有合ふ金子、掴んで堤へばら〳〵〳〵、入日に耀く金の花、日相觀を目の前に、寫す榮花も身の行衛、水の流は定なき、船は遙に三重遠ざかる

六冊目

和泉に名にし大湊、堺の町の上に立、人の用ひに天川屋、主義平は去年よりも、代官所に留られ、跡は家内も預け人の、緣邊涙の片思ひ、女房お園は憂中に、笑顔も人を頼の氣兼、詞「どなたにも御苦勞樣、嘸お氣詰り酒一つと、差置盃臺女子共、お銚子是へと挨拶振、太郎兵衛押留、詞「ア、イヤ申し毎日〳〵町中が、交替の御馳走で、足腰迄が痛入て、ハヽヽヽと笑ふても、居られぬ氣の毒な役目、ノウ久右殿、左樣〳〵、町中の上に立、是の旦那去年から、代官所に留置れ、此樣に番を致すも、是がほんの御大法、成程常から慈悲深ふて、御發明で男一匹な義平樣、斯いふ災難が有うとは、住吉樣も御存知ない事、番するにも及ばぬ共、一度づゝは町中が、お見舞に參る心、盃は又重て、モウお暇申ませふ、ハテ御遠慮に及ばぬ事、何はなく共心計、平に一つと强られて、詞「イエ〳〵萬事目出度ふ濟だ上、御祝儀に下されます、カ、申あなたも隨分お身を大事に、お勞の出ませぬやうと、力を付て出る門口、道は三里を三枚肩、走らす駕にも心の鞭、急〳〵と老の苛立、難波の名醫佐山良筑、おろすと出る出合頭、詞「ホウ是の舅御大坂の良筑樣、ようお見舞なされました、是は〳〵お町の衆、御番の替りか御苦勞〳〵、早速ながらまだ落着の御沙汰もないかな、ハイ長引ましてお氣の毒、ぞやがもう濟でござりませう、御息女樣の御心遣ひ、早ふお逢なさりませ、成程〳〵御深切忝い、駕の者は遠慮の中、宿を取て夜の内に迎ひに來い、ハテ扨それは入らぬ事、町會所で留まする、サア〳〵ござれに近頃お世話、おさらば〳〵と互のおれそれ、内と我家へ別れける、お園は聞知る父の聲、父樣

お越なされたかと、娘が挨拶聞間も待ず、詞「イヤもう内に居るも心懸り、毎日でも來たけれど、太切な病家を引受、捨置れぬが則ち仁術、老の五日目七日目に、早駕で見舞に來るも、そなた衆夫婦孫が可愛さ、今町の衆に尋たが、御免の沙汰もないとの事、ア、聞へぬは聟殿、出入のお屋敷町家でも、聞合して見る所が、專ら噂に天川屋は、町人に稀な魂、四十餘人が敵討も、義平が有た計に成就さした手柄者、見込で頼んだ大星殿、いづれ劣らぬ忠臣義心と、大坂中でも此沙汰計、お上にも御感心、助け度思召ど、聟が口から白狀せねば、彌外に頼人が有ての、事かとお疑ひ、懸りや繫がるこちら迄、跡の歎きを想やり、なぜ白狀はして呉ぬぞ、女房子にまで隱さふと、親へ預けて置程の男氣な心から、打明なんだも尤じやが、詞「謗り走りを聞たとて、他言する佐山じやない、樣子を聞て置たなら、今證人に成て出て、助ける仕樣も有うのに、聟でさへ此魂を疑ふて、隱した物知らぬ他人は猶の事、欲に目が闇娘を引取、聟が義心を妨たか、敵役の良筑じやと、淨瑠璃歌舞妓のてんがう書、芝居にでも取組んだら、やんまひよや友右衛門めが、仕居るで有うと、それがおりや口惜い、何の〳〵父樣の、常の誠は知りながら、隱した主もよく〳〵の、義理ある事でござんせう、お前や私が精力でも、やんがて目出度ふ逢ます、其上今宵は義平殿の、樣子を尋る便りもある筈、マア氣を鎮めて夜と倶に、宜い思案して下さんせと、悲しい涙押隱し、親に仕ふる孝行心、神も守りのなかるらん、同じ神でも髪

髭の、延た手先の神樣株、破れ布子に繩の帶、ぬじけて見へる二三人、ハイ些とお頼申ます、畫手紙を上ました者共でござりますと、密めく聲に飛立お園、詞「ようこそ〳〵、番の衆も往んで貰ひ、指合ふ人はござりません、サア〳〵こちへに、おづ〳〵と、閃く姿に良筑目を付、詞「人相と云其風躰、油斷のならぬ何者じやと、咎むる老功、詞「ア、エイナア、此お方々は義平殿と、彼地で一所に去年から、心安うなされたげな、今日お赦しが有た故、こちの人の言傳を、聞て來て下さんしたが、餘り形が見苦しさに、今夜行ふと、御叮嚀なお文の樣子、ア、それで聞へた、マア〳〵いづれもお目出たい、聟殿もあやかつて、どうぞ近々、戻らるゝ樣咄しも聞たし、サ、是へと、親子が躁々饗應ぶり、詞「イエ〳〵是が勝手でござります、ハテ遠慮深い平に〳〵、イエ最う其處へ上りましても、身中の千手觀音を、置て往んでは跡の御難儀、矢張庭が分相應、詞「ホウそんなら其處へ上敷でも、早ふ持て來い伊五よ〳〵、ヲツト心得勝手より、阿房が擔し緣取莞筵、庭へさらりと引廣げ、皆能ふ來んしたの、サア此敷物に乘んせ〳〵、エゝめつそうな、敷に乘れとは此方が禁句、看す〳〵知れた商賣も、闇い所に爰な旦那と、一所に居た此三人、ほんに一門一家より睦じう致しまして、言傳も聞ますする、ナア權よ、ヲ、何なりと用が有なら、此方の女房に頼めてい、それいやい氣の付た旦那殿、酒も存分呑だ上、商賣を始るなら、元資も貸て貰へてい、ナアそれは〳〵男氣な、深切なお方じやと、追從交り三人

が、言並べたる得手勝手、詞「ヲ、何が扨聞悪い、主の便りを聞嬉しさ、酒も上いで何とせふ、コリヤ伊五よ、用意して有酒肴を、ヤそこらをぬかつて宜物かと、駈入取出す硯蓋、詞「コレコレ〳〵見やんせや、白いが蒲鉾、黒いが生貝、コレ〳〵〳〵此胎屎色が焼玉子、どえらう飢へた五音の調子を、替るが邪魔じや、おれも一盃相伴をと、畫から願ふた五升樽、詞「茶碗で手酌に始めた〳〵、サ、、、早ふ〳〵と競懸つた、酒には目のない一人のいがみ、詞「是は〳〵お氣の付た、久しぶりの御對面と、茶碗片手に樽の口、ドブ〳〵〳〵〳〵、詞「コリヤ御馳走でござります、ア、ゑいは、身に付樣な甘露〳〵、仁三よ、廻したけれど持た次手、マア一つ呑して臭れ、ヲツト〳〵〳〵ござります、權よ、何ぞ肴せぬかい、ヱ、酒さへ見ると目のないたんぽめ、儕計ほざかずと、此方へおこせと引奪り、皆息なしの牛飲、其間に内儀は三包の、銀取出し並べ置、侮りがましい事なれど、是を元手に何成とも、直な商賣始めさしやんせ、ヱ、アノ此お銀を私ちへ、ヱ、有難い、男が男ならお内方迄、見事なお捌き、へ、戴きまいつでござりますと、銘々摑みの鵰爪、銀懐へ占たる顔付、傍からあはうが、詞「コレぬすびの伯父樣、幸こちの掛屋敷、大道筋の角引廻した、東側に西向の明家が有、彼處を借て商ひさんせ、ヱ、忌々敷い、漸〳〵今日出た此方等に、引廻しの西向のと、指合計ぬかすがな、ハテ扨それは悪い聞やう、西向の明家を借て、店出さんかと言事じや、アレまだぬかすと三人が、白眼付たる腹立上り、

詞「ア、申し今のは阿房が言損ひ、氣に掛て下さんすな、爰に置ほど麁相計、アレぼんが泣聲がする、奥へ往て賺して來い、ヱ、そんなら彼奴等計呑して、おりや奥へ行のかへ、ハテ細言云わずと早ふ行ぬか、サ、、、行はいな〳〵、コレぬすびの伯父樣、まだ爰に鯛の濱燒、是で機嫌を直しておくれ、ガコレ胴売は突かふ共、わしが見入た樂しみの、首は置て行んせやと、嫌がる詞を言散し、とつぱかは奥へ逃て入、ホ、、、呵るにも呵られぬ愚な奴、了簡して下さりませ、然してマアこちの人は息災で居られますか、何といふ言傳ぞ、どうぞ聞して下さりませと、急ぬ顔して問かくれば、ほんになあ肝心の言傳は、アノソレ權よ、われそこへ言ぬかい、ハテわれが先へ頼れた、われから言へと言兼るを、良筑引取、詞「ア、イヤ何も遠慮はいらぬ、どうで彼地へ行からは、少々の責苦も有うち、包まずと聞して下され、どうじや〳〵と、親と子がせり懸る程顔見合せ、うぢ付中に一人の酔どれ、詞「ヱ、埒の明ぬ奴等ぢやはい、いつそおれが口明るは、ガ其口明に又一盃、ア、よいは、扨斯じやお聞なされ、アノ義平殿は去年から、ヱ、謀反人の同類じやと、疑ひが掛つて有げなはいな、それでとり〳〵お尋なれど、ア、くろとも及ばぬ据つた物じや、言ぬとこそいへ〳〵、そこで手を替品をかへ、でして〳〵でし扳た、其留りが、ナア仁三よ、奇躰な物に成て來たじやて、ヤイ〳〵〳〵何言すぞい、仰山に言す故、アレ見い二人ながら泣てじやはい、ヱ、氣の毒なやつでは有ぞい、何じや氣の毒、氣の毒ならば

此跡は、酒の力で又一盃、ァ、よいは、ヤ又斯呑据た所と云物は、首が無ふても搆やせんは、況て己が體じやなし、旦那で有うが、お内儀樣でござらうが、人の首の五つや六つ、飛でも拔ても搆やせぬは、ヤイ仁三よ、權め爰へ來て足揉めと、言つゝ轉り早鼾、只ぐう〳〵と音計、殘る二人も手持なく、逃尻搆へる空笑ひ、詞「ハ、、、、へ、、、、、イヤモ名さへたんぼの喰倒、必お案じなされますな、旦那も隨分御機嫌能う、追付目出たう死る程に、アイヤ〳〵追付目出たふ往ぬる程に、内も奇麗に掃除して、ヲ、それ〳〵ぼん樣に風感すなと、くれ〳〵のお言傳、お返事が有ならば、近い内に又來る時、聞て呉いて、へ、、、、イヤわたしらは最ふお暇、コリヤたんぼよ、起んかい、ヱ、此形では性根は付まい、お邪魔ながら醒る迄、庭の隅にと二人して、やんやのよいやらさと米俵、轉せど起せど死人も同然、詞「ハイ〳〵早うお休みなされませと、挨拶すれど諸さへ、泣目を隱す親子が風情、詞「仁三よ、權よ、ァお氣の毒なと投首し、萎々として出て行、殘る思案は親と子が、心懸りの數々を、胸に呑込涙の車、落て痞の種と成、思ひ草とや生ぬらん、良筑漸く顏振上、詞「ヱ、口惜いなァ、、大坂で佐山と呼れ、匕取る中にも一二を爭ひ、いかな重病難病も、平癒さする覺はあれど、國法と云ふ大病には、仲景が再來有、目前華陀が顯れても、配劑叶はぬ聖が命、シヱ、仕成たり殘念やと、吐息繼だる有樣に、お園は袖に取縋り、詞「コレ爺樣、そんなら彌義平殿は、科人に成て死なしやんすかいなァ、ヲ

、譬死罪に逢れば迚、手痛い事さへ知ぬ聖、今三人が詞の端、責苦を請る計でも、何の命が續かうぞ、ハ、ァ、其苦しみを聞身さへ、俱に呵責に逢心、若しもの事が有たなら、わたしやどふせう何とせう、仕樣は無いか爺樣と、聲迫らせて泣噦噎、詞「ヲ、道理じや道理ぢや、ガコリヤ只た一つの獨參湯、附子人參でもそれ〳〵の、症に依て能毒有り、サ主方を換るが醫師の發明、此度の病には、大を取小を捨るが醫案の第一、手後のせぬ樣に、ナ娘、方を替るが其方の了簡、どうする心じやサ聞たいと、醫案に擬へ由松を、代よと敎へる詞の謎、それと解ても籠兒を、親の代りの捕われと、爲のみならず命まで、取れにやならぬ苦しさつらさ、詞「サ、、、、悲しいは理りじやが、コリヤやい、人の鏡となる聖を、見殺してはおれも其方も、人中へどうも顏が出されぬ、我子を貯へば夫の呵責、地獄の憂目は遁れぬぞよ、サァそれも悲しい、詞「合點が往たか、あの子も可愛し、詞「ヲ、尤じや、いづれ劣らぬ我子と我夫、代らるゝなら〳〵私が身は、八裂一分樣にも、代て二人の助る樣、思案して下さんせ、詞「アイヤイ道理は道理じやが、こりややい、おれじや迚娘や孫、マ可愛なふて何とせう、誰が代つても濟事なら、末の近い此良筑、ァ何の生て居やうぞやいと、恨も混る悔し泣、目さへ涙に塞がりし、子故の闇に親娘、跡は譯なく成にけり、斯る歎の中仕切、襖くはらりと丁稚の伊五、詞「隱居はんお家はん、ヱ、泣事は無いわいな、コレ己がゑい思案をして置た、サコレ是見やんせと、重ねた半紙の粒

々書、差出しても返事さへ、泣入二人が顔差覗き、詞「ヱ、これいなァ、早う見て譽て下んせ、ヱ、ヱ、つつと最ふ物言んせいのふ、大躰混沌した書樣じやないかなァ、サ、見てお呉見てお呉れ〳〵、コレ見てお呉いなァ、ヱ、いかに愚な生れじや迚、心もない彼方へ行、コリヤ阿房め、生る死ぬるの大事の相談、邪魔せずと行せ居らぬか、サァ娘、泣て居ては事が濟ぬ、彌孫を遣る心か、アイ〳〵能う得心致しました、由松〳〵爰へお出や、アイと、頑是も七つ子の、敏捷至極の器量よし、詞「祖父樣能うござつたのふ、ム、孫よ、爰へ來いほんとちお出やと、引寄て、詞「コレ由松、父樣の代りにの、代官所へ行て給もやいのと、言殘てわつと計に咽返る、中に分入、詞「成らんぞ〳〵〳〵、ヲ、ぼん樣遣る事はならんはい、サア其爲の此書付じや、ドレ〳〵おれが讀で聞かそ、コレ聞かんせや、一理穴を以て願上まいらせ奉り候、ふらいかへ〳〵、何とゑらかろがな、一私は天河屋伊五、俗名あはうと云て、何にも存じやせぬ不調法者、此方の旦那はんの代りに、ぼん樣を遣るとの事、それでは跡で淋しいさかいで、お家はんも泣しやる、隱居はんも泣しやる、又己も泣しやる程に、わしが首切て旦那はんを、堪忍しておくれべく候、殿樣まいる、伊五より、ヤアそんなら其書付は、主の代りに出る心、ヲ、殊勝らしい能言ふた、能ふ書て呉たなァ、ソレ〳〵〳〵おれが行ふと言てさへ、其樣に泣んすのに、此幼少なぼん樣を、只つた一人遣らうとは、ヱ、胴欲な人樣ぢやはい、彼方へ行の邪魔じやのと、啊

られても大事ない、ぼん樣はやる事成ん、いやじやァ〳〵、いやじや〳〵と足揉し、繻の切た る鍋錢涙、扱た思案も一筋な、忠義に不足なかりける、良筑も感じ入、詞「日頃あはうよ愚鈍者と、言た詞が恥かしい、出來した〳〵、ヲ、出かしたなァ、それでもどゑらふ啊つてから、サイノウ啊つたはわしが誤り、了簡して給も堪忍しや、マ愚な氣にさへ然う思ふに、何のぼんが遣りたかろ、義理と世界の國法に、取らるゝ命は此子が因果、詞「ヱ、そんならどうでもぼん樣を、ヲ、遣る母が氣は諸共に、付て死より苦しいと、抱締たる稚子を、可愛〳〵と祖父娘、別れの涙一時に、波門の入江の霖日和、涙打寄る如くなり、醉倒れたる以前の邪、堪へ兼てや大聲上、詞「ヱ、へ、、、、、マ何にも知らずに愛しやのふ、皆其樣に愛褻るが欝陶しさ、すぎなしで置たれど、モウ打明て聞さにやならぬ、コレがりまを遣うのやるまいのと、いちや付は跡の祭り、肝心の助たがる代物はな、責に係つて存病付、わしに往だら現妻や小悴が、狼狽かぬ樣に言て呉てゝ、ヱへ、、、、狹少聲でほざかれたが、情一杯の遺言でござつたはいのと泣出せど、家内は分らぬ唐音同然、心元ない樣子なれど、良筑一圓合點が參らぬ、が詞の内に遺言とはナ、アノ此方の人がどう致されましたへ、サイノウ水責火責はまだな事、荒繩で脊中を擦り、一夜鹽を振おるか、又粒か玉錢の樣に、此膝を切割て、鉛込に迄する事じや物、遲いか早いかふらにやならぬ、アそれでも丈夫などぜう骨、素人には稀な根性、あの和郎に盜人さした

ら、適な能い代物じやに、是計が殘多ひ、ヱ、借い事は、最う今比は落たはいなふ、ムウ落たとは何が落たへ、ア、旦那はんは二階にかいなア、ヱ、是は仕たり、呑込の悪い衆じやはいの、コレ義平殿は病付て死だはいなふ、ヱ、そりやまあどうして、何として、實か誠かほんまかと、親子はいつそ正躰も、歎きも思ひも胸一ぱい、咽に詰つて詞さへ、詞「父様、コソヤまあどうせう〳〵ぞいな、サイヤイどふせうぞいやい、どふせう〳〵〳〵と、前後不覺に取亂し、息も絶入計なり、詞「折から外面に權威の高聲、上意〳〵と内に入、詞「天川屋義平事、お尋の箇條白狀に及ばず、今燒落命致せし故、家財を取上妻子とも、國境よりお拂ひなさるゝ、ソレ者共はつと心得、泣入親子を引立れば、良筑周章取縋り、いか躰の罪にもせよ、暫の猶豫は下さる筈、用意の間御容赦と、願へど小頭耳にも係ず、詞「ヤア妨なさば打据よ、家財を運べと下知をなす、イヤ申し〳〵お役人様、道具類は跡へ廻し、マア金から手前でお仕舞なされと、邪が指出、詞「ヲ、サ能い心付、其丁稚めに案内させ、金箱改め持出せ、サ早く〳〵と、指圖して奥より手んで手に、持出す金箱表の方、お役人暫くと言つゝ通る丸額、月も三五に足ざる年齢、ムウ見た所は若輩なれど、二腰させば武士の悴、待と留たは何用有て、アイヤ餘の儀でござらぬ此家の一件、何故狼藉なさるゝな、ヤア狼藉とは慮外の一言、落命せし義平が跡式、取立歸る役目の某、ムウスリヤ彌義平は落命とな、ヱ、去迚は疑ひ深い若衆じやはいの、コレ一所に構つて居た、

其證人は己じやはいの、ハテ其方には尋ぬ控へて居れ、罪極らず相果し、義平が妻子を糺しもなく、追拂へとは胡亂な御上意、サアそれは、殊に家財を跡へ廻し、金銀を持出せと、此泥坊めと馴々しい、お役人の取捌き、餘り不審に存じまして、サお尋申と立板に、水を流せし詰開き、一器量ある頭伽の雛鳥、詞「ヱ、是は又情ないませでは有はいの、二言辭吐ても高が小悴、いつその事お役人、けした〳〵と邪が目配、點頭小頭扳懸る、刀を柄留め確かと押へ、詞「仕込だ衒の顯れ口、一人も遁しはせぬ、覺悟致せと突放せば、詞「ヤア重々憎い素丁見めと、切込白刃を引外し、沈んで入身に付入手練、大の男を絹被ぎ、頭轉倒つさり投越す早業、詞「汝奴らが衒の正銘は、助命叶ひし義平殿、相果しといふコナ僞り者、ヒヤア、詮議仕扳て一々に、首を並ぶる其處動くなと、尖き詞に氣を呑れ、迚出す門先舁据し、駕飛出る天川屋、是はと驚く相盗共、突退刎退投倒せば、詞「手目上られたら百年目と、邪が組付首筋摑み、捏と捻伏乘掛れば、殘りは拍子ぬけ〳〵に、顛つ轉びつ逃歸る、良筑お園は飛立計、詞「ヤアほんに矢つ張り此方の人、聟殿無事に有たかと、打て代りし悦び涙、詞「ヲ、女房共、舅殿、坊主も無事で嬉い〳〵、ガ衒は此奴か捨へ事、一所に居たとは何奴じやと、引起して顔詠め、詞「ヤ此方は進藤源四郎、盗賊衒と成しやつたの、ヱ、そんなら其盗人様が、咄しに聞た大星様の、ヲ、甥と生れの悪黨者、不忠不孝の天の罰、ヤモ此形に成下る筈、生置てはお家の名折、いつそ爰でと締かゝる、

詞「ヤレ待れよ義平殿、悪人にもせよ手に掛ては、又もや其身に係る罪科、所存も有ば其儘〳〵、ヱヽ、此以後根性直さつしやれと、突飛されても負惜み、詞「ヤイ義平め、儕昔の好みも思はず、ヤむこつけなふ締上たぞよ、覺へて居れと減らす口、足早にこそ出て行、お園は頓て夫に絶り、二月三月と云物は、案じに胸を痛める計、つらい責苦と聞たのに、能ふ顔見せて下さんしたなア、詞「思掛なふ戻らしやつた、御上の樣子はどうじや聟殿、ハイイヤ助つた譯は私も存じませぬが、毎日〳〵手を替ての問狀、今日一日はアレアノお子樣が、役目を代てお捌なされ、思ひも寄ず相濟で、戻り係つた内の樣子、控へて聞とお指圖で、顯れた衒の詮議、御器量と云ひ御發明、マどなたの、御子息樣かは知らねど、義平が爲には命の親、ガマアあなたのお名は、何と申ます、アイヤ御合點參らぬ一通り、逐一お咄し申ませうと、義平が手を取上座へ直し、詞「鹽冶家の義士四十餘人が、事故なく本懷を達せしも、全く貴殿の大丈夫、ハヽア御芳志謝するに詞なし、私事は壹岐の家中、廣島家へ養子に參りし、大治郎でござります、ムヽスリヤあなたが大星樣の、いかにも次男と生れし力彌が弟、是は仕たりと二度悔り、又も下座へ押下り、詞「ヱ扨々々御發明なと思ふたが、由良之助樣の御子息樣なら、左樣なふて叶はぬ筈、敵討の御樣子も、捕はれて居る内に承はりまして、モウ〳〵〳〵私が嬉しさ、責らるゝ苦しみは、手强ふ堪へて居りました、ガ其噂を聞た時は、ほんに涙が翻れまして、ヱ有難い事じやなア、命一

つが御恩返りと、彌覺悟を極ました、ガ日本一の武士の鑑、お上にも麁末は有まい、お預とやら聞ましたが、シテ最ふ御歸國なされましたかと、搔手繰程男氣に、言並たる眞實心、我身に當る大治郎、顔振上る目は涙、父を始兄力彌、四十餘人が諸共に、お願申て四日以前、鎌倉にて殘らず切腹、ヱヽイ、スリヤ此方からお願なされて、義平殿、武士の身の上程、果敢ない物はござりませぬ、ホイア町人と侍の魂の違ふは此處、ヱお恥かしうござります、我も血脉は繼ながら、他家へ參りし武士の常、親兄にも引分れ、漸寺岡平右衛門が、密事の早打、誠に諸士の氏神にも、勝つたる其元を、苦しむるは本意ならず、我に代つて助け出せと、申越たる實父の文躰、見ると其儘主人へ願ひ、當地へ登つて願書を上、白狀是なき始終の節義、言顯はして助けし今日、再度の早打父兄の最期、聞悲しさにいとゝ猶、身に彳亍々と御遺言、喪に入ての吊ひより、此對面が父への追善、ハヽア悅ばしう存じますと、涙を隱す立派さは、泣よりも猶天川屋、ハヽヤモ御心底察し入、詞「町人風情の私を、お心に掛られて、あなた樣に仰付られ、お助下された由良之助樣の御厚恩、セヱヽ有難う存じまする、サイナア、それ程迄に此方の人を、思ふて給はる大星樣、お殘り多いと申さうか、お目出たいと申ませうか、女房、聟殿、舅殿、お悼はしやと三人が、見上見おろす大治郎、其鎌倉の別れの涙はら〳〵〳〵、爰に篠衝く春の雨、外にも振來る足並も、揃ふ行列狹箱、臺笠立傘鎗印、餝立たる牽馬も、爰に繫がる奇

緣の門先、大治郎殿へ御用に付、難波の留守居朝野起右衛門、態々伺公致せしと、挨拶終つて上座に着き、在鎌倉の殿樣より、早打を以て上意の趣、御實父大星瓦金殿、本意を達し其上に、殉死有しは武道の龜鑑、其功を賞美の餘り、大治郎に元服させ、苗氏も改め是よりは、二代の大星由良之助、則ち當家の家老職、御加增四千七百石、四十七士の英名を、末世に傳る御墨附、イザ頂戴と指出せば、詞「ハッハ、、、、是も偏に亡父が、忠義の餘光名君の、御賜と三拜九拜、義平が家内も悅に、歎を忘るゝ計なり、役儀終れば起右衛門、席を下つて兩手を突、大星殿の遺物なれば、殿にも慕ひ思し召、忌服の謹慎かりなく、早々出府致させよと、重る上意、お供の用意も調へ置、早御發駕と勸むれば、大治郎はつと恐れ入、詞「斯計深き御惠、御辭退申さば返つて憚り、此大恩は本國にて、報ずる時節は改むる、政事に心納方、豐に實のる麥秋稻秋、一國の家老職、暇乞して牽馬に、乘移つたる嫡の忠臣、義平が悅び女房員、祝ふ出世の門送り、詞「イヤナニ義平殿、代官所の仰なれば、當地に住居は叶ひませぬぞ、ガ落付先はコレ此書付、ム、シテ此證文はナ、亡父が方便に求めし田畑、五十餘町は山科にて、白家なれ共當座の隱れ家、セッヱ、有難ふござります、おさらばお立、實に會稽の春に逢ふ、花の袂や兒櫻の、榮を見せて三重「別れ行

七册目

咲た櫻に土佐駒斑駒放れ駒、お馬繫で花車や仲居が繼づら、率たか〳〵どう〳〵、どうでも乘たは布袋つぱら、ワイ〳〵ワイトサ、新町の九軒に並ぶ井筒屋に、物言ふ花の幾座敷、續く勝手ぞ賑はしき、詞「手の鳴方へ〳〵、捕まよ〳〵捕まへて酒呑そ、サア占たぞ〳〵。コリヤ旦那どうなされます。そういふ聲は番頭の惣兵衛か、ア、仕舞〳〵。ヲ、辰樣だんないわいな、惣樣も粹じや物、何の時代がつて居なませうぞいな。ヲ、さうじや、コリヤ番頭碎けやれ〳〵、ハテ内でこそ四角四面は番頭の表向、斯來た所は、旦那も家來も一蓮託生、雪の肌より黃金の、光りで浮む千兩箱、お指圖の通り勝手迄持込ました、ソレ作兵衛早う〳〵、抱出たる千兩箱、座敷へどつさり、詞「イヤ最ふ淀屋の白鼠、忠義一疋受て居ります。ア、作兵衛登してくれな、其白鼠も丹州の黑鼠には、困つた物じやて。ヤア黑鼠じや、ア、おれを粹とは有難い、有かた次手に彼奴等にも、見立盡しで其金を、手柄次第に取せい〳〵。此奴はゑらい大はづみ、先番頭が金箱の、蓋を此ちらへ斯取て、裸小判の摑取、銘々見立て取たりな。アイと榮が取上る、小判と小判を遣違へ、鷹の羽の紋とはどうじやいな。コリヤ又ちとひえらきこい。私も頭へ斯上て、二枚櫛とはどうじやいな。是はもじのが味やつた。次は仲居が五六

兩、片手に廣げたてんまよ札、よいあげ手とはどふで有ろ、それは只今法度なり。跡は作兵衛が思ひ付、こいつをぐるりと斯並べ、相撲の土俵は、どうで有ろ。夫では餘つ程捗が往た、此方も透さず稻吉が、兩手に小判を斯掴み、内懷へ斯入て、援參とはどうで有ろ。ヤイ〳〵其樣な事して參つたら、爰に居る榮坊の樣に、道で馬に嚙れうぞよ。ヱ、惣兵衛樣ぎえんの惡い、まだが是程有たら、馬所か天狗に掴まれても、大事ござりませぬ。去とはえらいお好樣、しつこけれ共作兵衛が、此二兩をば遣達へ。そりやこそ鷹の羽か古いぞや。そんなら是も取て置き、最一つ土俵の繰返し、けん相撲とはどうで有。それも矢つ張古いなり。そんなら是も取て置、片手に小判八九兩、讀骨牌とはどうであろ。それも合せの歌句なり、去とは古いなら古い。古けりやいつそ新らしう、三色の見立を斯寄て、一所に受納はどうであろ。イヤ〳〵〳〵そりや成らぬ〳〵。成らずは代つて辰五郎が、作兵衛に智惠貸さう、殘つた金を引寄て、ばらり〳〵と時散し、土器投とはどうで有ろ。こりや又えらいと惣々が、拾ひ集むる山吹の、花吹散す其所へ。京の六條の質屋の手代、つか〳〵閃で、詞「イヤ申辰五郎樣、受戻し度と有彼代物、一躰ありや鹽冶の重寶。ア、コレつか〳〵と物言まい、呼に遣つた京の正六、サ、爰へ來て一つ呑や。アイヱ〳〵酒所じやござりません、見りや澤山に有金で、つい埒の明た金の鷄。これはまたり〳〵、ア、貴樣も見立をやる氣じや、遣る氣じや〳〵〳〵程に、欲くば一所に奥へ來い。イヱ〳〵見立じやござりません、彼ソレ今の鷄の。サア鷄々〳〵鷄絞させ鍋燒さそ、やつさもつさは此方でせい、ソレ〳〵〳〵やつとせい、踊に紛らし打連入。殘る惣兵衛小點頭亭主を呼留、詞「コレ作兵衛、旦那に金の遣はし鹽梅、どんな物じや〳〵。イヤモワウワ詰でござりますはい。さいのふ沸ふと涌出る井筒の作兵衛、追付金の釣瓶縄で、淀屋の水を渫出すは、此鼻が胸中じや、彼是云間に節季前、定て附は出きて有ふ。ハイ〳〵則是にと差出せば。ホウよし〳〵京行の雜用揚代、仲居共へ揃の衣裝、藝者の紙花〆た所が五百三拾五兩かい、外に中藤の取替小間物屋から何や彼や、是も大方百兩餘り、二口〆て六百三拾五兩の内、マア三拾五兩の端金は負に仕やと、箱より小判掴み出し、詞「一ィ二ウ三ィ四ウ五ッ六ッ、六百兩有る、扨此内一割引はお定まり、所を我等が顔づくで、正味の内を又二割半申し請る、宜か〳〵都合三割半、引殘てマア三百九拾兩かい、是からが相場の段じや、ソ算盤お越しや、壹兩五拾目の積で直せば、コウッ五九四十五、三五十五、銀高拾九貫五百目と成じや、是を又七拾目金にして其方へ拂ふは、宜か〳〵、カウッ七一加々三、七五七十の一、七六八十の四、壹兩を七拾目に仕掛て、金高貳百七拾八兩二歩貳匁五分と成じや、宜か〳〵、此貳匁五分の所へ、南鐐一片加へてはづんで遣たいが、是も次手に負て置や、ソレ金取たり、書出しに受取書たり、跡は我等がちやくぶくと、金懷へ納めた顔。作兵衛靭れて、詞「申し〳〵、其樣に酢に引粉に引、〆高六百兩餘りの内を、

三百五拾六兩餘り引落されましては、揚屋は何に成ますぞいな。ハテおれじやといふて欲氣はないわいの、手代の役徳せめて是程の、びんは有うちかい。それでも餘り。ハテ言やんないの、見立盡しで取やつたも、餘つ程の事じやぞや、是から奥で殘りの金を撒散す、が言ぬ事は聞へぬ、其内でも二割程は旦那の頭字、たつを上るが合點かと、指手引手の熊手性。苦い顔して生膽を、抜れた心地亭主が投首。詞「ハテ其代下に是からは、隨分と儲けさす、爰な粹め〳〵、算用酒は預けて置、自立の時に張込やと、金箱抱へいつそ〳〵、勇む惣兵衛猩々舞。壺は亭主が。禿のもじ野、詞「辰樣が呼なます早う〳〵に、兩人は、連て入相燈す火に、廓は晝とざゞめきて、奥は騷ぎの太皷三味、三筋の町を二つ歯に、引摺散して仲居のお國、直に中戸へ通り者、庭の小石を小座敷の、障子目當にばら〳〵〳〵、知らせと心得辰五郎、外す書院の、詞「お國じやないか、そんなら今のは。私じやはいな、橋さまからの此お文を。太義じや有た返事は跡から。辰樣後にへ、唄「實は心に思ひはせいで、他な惚た〳〵の口先は、いかい艶では有はいな。傍見回し辰五郎、何事やらんと心急き、釣燈籠の灯を照し、封じ解けば延紙に、まいらせ候の散し書、奥は押への無理酒を、外す座敷の腰障子、明て吾妻が醉醒し。見やるも不審。立聞惣兵衛庭より廻つて椽の下、見付られじと四這に、忍ぶと知らず讀む文を、繰下さねば下家には、求食計かり手は屆かず、それと吾妻が夜目遠目、扨は戀かと疑ひの、いとゞ心も廻り椽、足音聞

付隱す文、椽の下には猶すかたん、吾妻は態と何氣なふ、詞「辰樣何して居なますへ。ヲ、太夫か遽ましい何じやいのふ。ア、何じや知らぬが面白さふな。何がいの。ヲ、げゑん隱しなますないな。ム、わがみや何ぞ見やつたか。アイ見たでもなし。アノ見ぬでもなしか。アイ。ホイ。辰五郎樣、そりやお前聞へません、逢初てから一日も、便り聞ねば氣も濟ず、うつら〳〵と夜を明し、晝寐ぬ程に思ひ詰、難い苦界を樂しみと、思ふ私に增花の、餘所に盛りが有ふとも、なぜ打明てくれもせず、隱しなました文よりも、讀ぬお前のお心と、延の幾重を泣盡す、恨涙はそれしや程、愚痴に返りし思ひなり。ヲ、此文の疑なら、其れ篤くりとゝ投出す文、奥より亭主が、詞「惣兵衛樣〳〵、呼は心に覺のかすり、返事はならず密そ〳〵、下家傳ひに忍び行、吾妻は文を讀終り、詞「ム、スリヤ此文は浮橋樣から縫樣の事を。コレ聲が高い、其文故の心遣ひ、まだ此上にと吾妻が手を取、庭に下り手拍子三つ四つ、相圖に集る藝子仲居、牽頭の稻吉亭主の作兵衛、詞「旦那首尾能う。シイ稻吉、作兵衛、榮、おのぶ、賴んだ品は。ハイ敎への通り見立盡しで、貰ひました二百兩。三人中へ紙花の、集めた所が四五拾兩、此作兵衛も番頭めに、掠り取れた殘りの金子、合して丁ど五百兩、御用にお立て下さりませと、銘々包を指出せば、詞「皆の深切過分〳〵、マア此金を待して有、京の手代へ早ふ〳〵、イヤ申しさうなされては浮橋樣の跡金が。ハアラまあ二三千兩撒捨たら、其身請も出來るはいの。そんなら質屋へ元

利の内入。殘りは跡から遣ふといや。心得たいことが持て行、吾妻は猶も重る不審、詞「どぎ〳〵と合點が行ぬ、辰樣皆の此躰はへ。ヲヽ、かくまふた縫之助樣が、賴んで質にお入なされたゐんすの鷄、受戻す金の入用、世を忍ぶ若殿故、表立ては出されぬ金、皆を賴んで斯々と、言合した今日の時宜、淀屋殿よ長者よと、大名の樣に言れても、僅の金の出入さへ、自由にならぬ人任せ、せめて手代の身分なら、今の御用に立ふ物、旦那に成た身の因果、推察仕やと儘ならぬ、悔に吾妻も俱涙、さうとは知らず恨んだは、矢張り私が愚痴ながら、詞「皆樣の心遣ひ、ぢんぞ忘れぬ嬉しいぞへ。何の〳〵勿躰ない、師直贔負の番頭が、旦那の目を拔其内を、又引拔て上ますも、あなたのお金をあなたへ返し、是迄お世話の御恩送り。我等もお家へ御恩送り。とは言へ仕なれぬお氣苦勞、お寵さまやと誰々も、勤の涙打こして、眞實涙繰返す、廓の育ぞ賴もしき。旦那〳〵と出て來る番頭、詞「是はぢたり明日は屋敷の御用、最うお歸りなされませ。往のふ〳〵吾妻も一所に皆の者。毎もの通り送れ〳〵、唄「送り返せば比叡の山風身に入て、菜種の花もうら枯、諷ひざゞめき行跡に、引下つて番頭物兵衛、詞「旦那めをおだて上、掠りは十分味い〳〵、時に此比登つてわせた、鷲坂殿から賴まれた、縫之助が有家、旦の鈍まが知つて居る筈、何處に埋んで置おつたぞ、搔出す工夫が有そうな物じやがなァ、最前下家で手に入た此ゑと、透し詠めて、詞「ヤァコリヤ皆白紙、ァヽ、そんなら吾妻めが口舌の内、涙を拭た延紙を取

違へたか、ェヽ、白眼でこそは立歸る、道は夜更て只一人、胡盞な形に吠付犬、詞「ェヽ、情ない畜生め、何で吠さらすのじや、シイ〳〵、ァヽ、是は又難儀な事では有ぞ、皆の奴等は土橋筋と思ふたに、通り筋から往におつたそふな、ェヽ、忌々敷い、大方今夜も七ツ過、提灯なしにおれ一人、酷ひ目に合しおつたと、呟く向ふへ、鷲坂伴内、提灯の火に見合す顔、詞「ヤァ伴内樣。お身は惣兵衛か。ェヽ、惣兵衛所かい、犬におだてられて大難儀して居ますはいな、よう今迄待さつまやりました。されば〳〵、據なき用に付思はぬ遲參、サテ兼々お身に賴置たゞさればいなァ、其縫之助が有家、何でも旦めが知つてをる筈、一躰鹽冶の出入と云、天川屋の弟なれば、忠義立は知れた事。成程それ故藥師寺と言合せ、淀屋に傳はる金の雄鳥、節句迄に差上よと、上意でかしに右の手段。出來ました其時には、長者の跡式此惣兵衛へ下さる樣。ハテ氣遣ひ致すなまだ外にと、咄半に東西より、一犬吠れば萬犬が、隣横町向ひ町、集り吠付勃誘聲、おへど喚けど多犬に二人、へこどれ廻つて闇雲に、當途定めず三重「逃て行

八冊目

淀川の流れの末に家富て、爰ぞ三國市司、百萬石も一筆に、買人賣人が附分る、大福長者と隱れなき、淀屋の奥の大騷ぎ、桃の節句の祝ひ日と、子供が運ぶ掛盤も、次第に並ぶ手代ども、

素袍烏帽子も大名出立、上段に主辰五郎、尤顔に詠やり、詞「今日は一家老惣兵衛が、思ひ付の大名格、其方達も官位昇進、知行は腹の裂る程、大食すべしと有ければ、詞「仰にや及ぶべき、平皿焼物其外も、爭か殘し申さんやと、威儀堂々と著の音、喰ひは互格の一日大名、詞「番頭惣兵衛出仕なりと、自身奏者の早替り、大紋の裾踏しやなぐり、顔にしるせし摺足にて、時代崩さず頭を下げ、詞「今日の御祝儀千鶴萬龜、恐悦至極奉ると、申上る此趣向、どんな物でござります、氣疎い〳〵一入心も長閑に、西王母が桃の酒、家老殿へ盃せう、三方是へと取上て、廻る盃祝言は、寂光の都喜見城の樂みも、斯やと思ふ奢りの最中、庭へ久三が、詞「申し〳〵節句の御禮は存じませぬが、八幡にござる天川屋の、旦那が是へと皆迄聞ず、何じや兄貴の毛虫か、そりや堪らぬ、惣兵衛どうせう、どうと言たら石部金吉、此形では居られませぬと、俄の周章にぐはつさ〳〵、烏帽子脱やら大紋を、脱す手代も亂騒ぎ、取膳ふて待間もなく、鹽冶出入の町人頭、見懸計は天川屋、高等風の絹ずれ男、詞「是は〳〵兄者人、能ふこそお下りなされました、ヲヽ辰五郎、惣兵衛、無事で目出たい、今日は古郷住吉の汐干、夜船で下つて今朝疾から、參詣した戻り道、夫はまあお早い事、御中飯もまだで有ろ、ソレお盃と差配ぶる、詞「アヽイヤ番頭、是へ寄たは辰五郎へ、言ねばならぬ事がある故、密々ながら急度した用事じやと、聞もどうやら底氣味の、悪い墨付辰五郎、詞「密にと有御用事は、氣遣ひな儀じやござりませぬか、ヲヽ、我身は何とも有まいが、辰五郎、親類とは云なから、養子におこせば猶々義理の有此淀屋、義平が聞ては大恐た、アヽイヤ居間へ行て篤くりと、サアお玄や早ふと先に立、勝手覺た一家中、是非も投首辰五郎、心ならずも連立行、殘るは惣兵衛獨言、詞「兄貴のわせたは手を廻して、言て遣た工の臍、旦の鈍知を意見とは、古い奴の癖して〳〵、斯遣つて、是から直に隱居へも、あくぞもくぞ焚付て、淀屋の家は我等が併呑、味い〳〵、ゞ爰にある、手代敵が鈍まの兄に。サア〳〵〳〵と投られるのも古い奴、いつそでんどへ右の事、打明た上押取、三方四方、コリヤ闘しい節句働き、ぶせうで行ぬと走入、それとは知らず白張の、襖開けど打明て、言れぬ兄の志、意見も胸に染々と、詞「段々のお詞を、餘所に聞なす空言譯、隱すも矢つ張大恩ある、鹽冶家の御爲じやと、御免なされて下されませへ、ア、役にも立ぬ悔言、嘸お氣詰りと奥口を、見廻し窺ひ床脇の、地袋あけて手を取て、上座へ直す縫之助、其身は遙に身を逡巡、詞「若殿様、今日は節句の御祝儀、惣兵衛が勸を幸、勿躰ながらお大名の、學びをせしはあなた様を、心で祝ふ儀式の裝束、お家の御紋を染させしを、御着用はなされず共、順て世に出給ふ様、御先祖への御式日、是にてお勤下されと、烏帽子裝束白臺に、載て差出し座を下れば、詞「ヲヽ、過分なぞや辰五郎、兄の敵を得討ぬは、寶を失ふ身の誤り、其方衆の心にも、嘸世話甲斐もなき者と、さみして居やらふ恥かしい、詞「是は又お詞とも存ませぬ、其あんすの鶏も、お家と

則私が、家に傳る雌雄の名器、取揃へて差上よと、上意を請しが難儀の幸、私が所持の雌鳥を、態と隠して置ましたは、まさかの時にお祟りを、淀屋の家へ受る覺悟、がそれ迄もない質物に、お遣りなされた伏見の松屋へ、マア五百兩遣りさへすりや、何時でも手に入寶、お心慥に思召と、力を付るも誠なり、詞「サア譬寶は手に入ても、欠落した浮橋が、ハテそれも親方へ、今宵中に身請すると、井筒屋で約束致し、關破りは濟します、アヽお氣の弱い、併し御尤でも有、昨今迄私も、其樣な事計、ハヽヽヽ必お案じなされなと、遂言事も色事に、想像よき若氣同士、安心ならぬ實事なり、次に足音折悪と、又も忍ばす縫之助、隱す此方へ、詞「旦那樣、何やらお目に掛りたいと御隱居樣が、是へお出か、そんなら其邊片付いと、座を改めて煙草盆、銀の煙管に吹く煙、外さぬ顔で待居たる、留氣の伽羅も夕部に消て、けさと替りし香染や、薫り計は振袖に、殘る姿も隱居の小庵、侍女が傅き立出れば、それと見るより辰五郎、詞「御隱居には何御用で、いざマア是へと、互に禮義も納る座並、詞「ハイ參りしは外ならず、承はれば今日の節句に、町人の有まじいお大名の學びとやら、萬一世間の沙汰と成ては、家の障と憚りながら、御意見申も衣の役と、爪繰る珠數の、心も清き水晶輪、詞「是は又譯もない、日本國の大小名、御用を聞此淀屋、拜領の小袖上下、家の冥加に餝せたを、奢がましう申上たは、ユヽ憎いやつと、紛らす詞のおれそれを、傍に聞居る女共、元お云號の小庵樣、日外の御病氣から、

男嫌ひと御出家同然、旦那樣も女房を、隱居樣〳〵と、いかに家の娘御でも、ほんの是が立でかし、親子御樣やら御夫婦やら、お娘御やら御出家やら、不思議は三つ四ついつ見ても、六づかしいお出合じやと、笑ひも遠慮の中庭先、詞「旦那お禮申ますと、這入は井筒の、詞「作じやないか、ハア、節句の御祝儀何方も、目出たく存じまいらせ候、其次手に今一人禮者がござりまして、ドヲレ些とお通りと呼入る、雪の丸綿素人に、めかせどそれ者の粹仕立、詞「ヤアそなたは吾妻、アノヤ粹神子、ナ粹神子じやノウ作兵衛、賴んで遣つたを間違なふ、是は〳〵御苦勞と、俄慇懃三つ指割膝、折の悪いをくろめる氣轉、ウンと呑込作兵衛、詞「成程急にと承り、天王寺へ廻りましたが、幸此神子殿も逢ねば濟ぬ事が有ると、ナア黑格子のお萬樣、アイわたしや神子でござんす、今表で惣兵衛樣に、何も角も聞て來たぞへ、そこにござるが小庵樣じやな、あた美しい事いいの、アヽコレ〳〵〳〵それを神子が搆ふ事か、初めて來て小庵樣の、惣兵衛のとはきつい見通し、ノサそれ故に彼の、今の大名のまねび抔と、わんざんを云た奴生口を寄て見る氣、お賴み申こなたへと、目交で押へる疳癪虫、突張る吾妻を無理遣に、連て座敷へ押直せば、小庵は遏町育ち、珍しい粹神子、神佛一如の御教へ、南無阿彌陀佛〳〵、ハヽア御隱居樣は信心者、扨お萬樣お始なされ、併道で供は見失ふ、道具は幸有合す、床の文臺胡弓の弓、詞「サア何成と思ふ事を、これで寄たが宜ござりますと、吾妻に渡せば恥かしさも、何の儘よの

神おろし、悋氣の火炎張詰し弓打鳴し、天清淨地清淨、詞「アノ内義清淨とは、油斷がならぬ、詞「振袖の戀衣に、結ぶの神は否じやぞへ、詞「ハテ此辰五郎は六根清淨、物數云程春日明神、詞「シタリ懸合の神おろし云やな、尾の出ぬ内に稻荷樣、妙見樣金比羅樣天神樣太夫樣ホイ、コリヤ差合の神じやいのふ、サア變らぬ貴船の神ならば、釋迦の小神子が弦音に、來り給へと寄添ば、中へ分入女子共、詞「目遣ひと云合點の行ぬ梓神子、作兵衞どうじやいなア、アヽイヤあれは今の生靈が問ふて給つて嬉しやと、此神子殿に乘移つたのじやはいの、ヱヽと恟り怖氣立振、見て取る吾妻、詞「アイ生靈じや〳〵、此樣な事とは知らず、昨夜も中戸に夜明まで、松吹風の音ばかりして、見へぬはほんに胴欲なと、人目構はず打付に、厚い志かけの梓神子、戀の口寄千早振、神ならね共それぞとは、氣の付小庵も何氣なふ、生靈死靈も彌陀佛の、誓ひに洩ぬ攝手不捨、人の恨も無いやうに、お願申さん女共、なむあみだ佛ど辰五郎に、粹を利して惣々が、宵のお勤なされたら、雛の盃桃の緣、跡賑やかにと詞いて、裏の隱居へ伴ひ入、影見送つて辰五郎、詞「モウ能い〳〵、思ひ掛なふ來た故に出放題の梓神子、間に合したは器用肌、何云ぢやんすやら、惣兵衞樣に聞た樣子、小庵樣と一所に、好ぬ仕方とまだ覺ぬ、心の湯玉辰五郎、詞「是は又疑ひ深い、逢に行ぬも金の才覺、浮橋殿の身請のせつぱ、寶の献上何も彼も、覆ひ重なる難儀の最中、そこ所じやないわいの、ヱヽそりや大躰の事じやない、か金の積りは

出來たかへ、けもない〳〵、井筒思案は有まいか、どざります共、漸今ぬく〳〵の思案といふは小庵樣、元乞聟の旦那なれど、つん〳〵と成さるゝ故、當付ての佛嬲と、此粹が見た目は違はぬ、今でも此方から持て參つて、陰裏の豆から取入金の工面、どんな物でどざります、いかなる樣なう隱居料が付て有れば、五百兩や千兩は手元にも持て居る、此思案が上々吉、イヱ〳〵あゑやらが誠に業平男、お前を遣つては氣が濟ぬ、詞「ハテ些との内の御辛抱、跡は井筒が請合ます、旦那は直に御隱居へ、そりや合點と辰五郎、二人は暫しと叮き諾き、引別れてぞ入日影、忍ぶ便りと夕間暮、氣は定ても夫迚は、今宵に迫る三百兩、心當途も出來心、活も少しおり立庭に物好し、飛石傳ひ駒下駄の、音さへ餘所を忍び足、詞「ア、思へば世界は味な物、淀屋殿の長者のと、大名の樣に云はれても、金銀迚は人任せ、取惱ねば無も同然、別家の息子か迫て又、丁稚上りの手代でも、三百兩は出來る物、因果な長者の旦那には、何が成た事じやまらぬ、アヽ斯いふ譯は御存知なく、兄者人の御意見も、餘所に梨子地の硯箱、明て言れぬ憂事計り、詞「ムヽ、常から堅い隱居家に、珍しい彈諷ひは、女子共が節句の遊びか、何にもせよ言寄綱、とは云へ是迄嫌ふた中、遂誠とは思ふまい、唄「今身の上となる鐘ならば、可愛からふに儘ならぬ、詞「イヤ〳〵〳〵家にも身にも代ぬ大事、若し聞入ずは命づく、唄「譬どうした憂目に逢をと、鬼住里の勸であると、男故なら私しや苦にならぬ、詞「誰じや〳〵何者じや、そふ云は小庵樣か、辰五

郎様、何れへお出なされまする、御隠居には何しに此處へ、あなたに些つと願ひが有て、此方も密に頼の用事、聞屆けて下さりますか、何なり共否とは申さぬ、サア其譯は、サアそれはな口で言れぬ私が願ひ、立て知らせを待合の、撞木取上鳴物を、數うちゃりも姉婢取々に、詞「嫁入じや〳〵、御隠居様の嫁入じや、雛の道具假荷物、行器も對の屏風箱、小袖箪笥も一棹三棹、十三筋の餝琴、何れに縁を引ぞとは、白地塗地の長持も、所狭迄置並べ、小庵様のお願ひは、是で推もじ遊ばしませ、詞「ムウ雛の道具で嫁入とは、ア、解ました、出家を止るお心かと、問はれていとゞ恥かしながら、義平様に留られて、髪剃さぬが今の仕合、必笑ふて下さんすなと、綻び係る花の香は、誘ふ嵐ぞ穂に籠る、詞「何のア〳〵、其願ひなら千代掛て、急度聞氣の辰五郎、ヱ、そんならあなたも得心で、殿御持ても大事ないかへ、ハテ末長ふ添たが宜い、幸今日は花の縁、曲水の盃事、善は急げじや女子共、早ふ〳〵と明た口、持て出たる桃の酒、嫁御へ酌で其跡を、請る聟顔あての槌、違ふて外へ運ぶ躰、詞「ア、コリヤ其盃を何處へ遣る、ハイお赦しの出た御祝言、戀人様へと云捨行、詞「ヤア〳〵戀人とはそりや誰が事と、急ど此方は今更に、言ねばならぬ身の徒、日外芝居見物に、歌舞妓役者の其中に、所縁の色は紫の、藤田靱負と云人を、思ひ焦れて忍び寐に、數重なりし妹脊中、詞「ム、そりや道頓堀の女形、何の事じやと辰五郎、昨日に替る放埒に、けふを覺せし計なり、競掛つて殘りの姉、詞「ほんに目出たい三々九

度、聟様も嘸お待兼、是から直にお園で、又改めての新枕、斟酌なしにと勸られ、赤らむ顔に袖屏風、中に取卷入跡に、むしやくしや腹も打越して、獨とぼんと辰五郎、詞「チエ、扨見せ付て仕おつたな、手詰の金に跡先見へず、己惚して恥頽かき、ヱ、面目ない口惜いと、身を震はせし男泣、窺ふ吾妻も案の外、詞「辰五郎様コリヤどうじやへ、尼の身だてら、餘りな自惰落も能い加減、宜い〳〵、いつそ嗤込で恥係すが腹愉じやと、駈入裾を引留め、詞「コレモシ負惜みは退て置て、嫌はるゝはおりや嬉しい、義理のある家の娘、氣に入た様にして、頼まにやならぬ身受の金、イ、エイナ、浮橋様も誰じややら、請出したとの知らせを聞、作兵衛様が行きやんしたぞへ、ヤア〳〵〳〵そんなら金は跡へんか、ハアはつと驚く氣はそゞろ、堪へ〳〵し口惜涙、詞「是非に及ばぬサアおじやと、屹相變つて駈寄茶の間、向ふに立たは天川屋、詞「ヤア兄者人かと逃出す、胸づくし取て引据、詞「コリヤ待居らふ、小庵が今の不心底、見事儕も腹が立か、廓通ひの居續け、嫌はれて居た娘の心、我身捻て人の痛みを知り居らぬか、其上最前も太切な金の鷄、卒爾はないと吐したが、藏を見れば箱は空売、サ何處へ遣つた先を言へ、サアそれはな、エ、情ない心じやな、コリヤやい、今日中に寶を差上ねば、此家は潰れるぞよ、ハア、ア、伯父の家とは云ながら、一人の娘に娶合せよと、お果なされた殿様が、町人風情に勿躰ない、お聲を掛られ請繼だ、此名跡潰して濟か、罰當りめが、殿へは不忠、伯父へは不孝、サ、

寶はどうじや、サアサアサア〳〵、エ、言ぬかと引寄て、擲く扇の親骨に、代りし兄が强意見、見兼て吾妻が、詞「コレ申し辰様に科はない、其鷄は、アヽコレ何にも云まい、兄者人の御存分に、ヲヽ、能い了簡と疊掛、打手に縋つて聲を上、詞「コレ申し其寶はござんすはいなア、それ云はしてはと辰五郎、あせるを義平押退て、詞「ナニ寶の有所を知つて居るか、アイ〳〵〳〵辰五郎様堪忍して下さんせ、現在兄御の責打擲、是が默止て居られませふかいな〳〵、詞「サヽヽ、そりや宜い、仔細はどうじや、アヽイ、どうぢや、アイ、どうちや〳〵〳〵、アイ〳〵〳〵、鹽冶のお家の雄鳥とやらを、縫之助様が質にお遣りなされた故、一つに上る淀屋の雌鳥、彼方が出る迄隱して置と、井筒屋へ預けさゝやんしてな、ムヽ、シテ〳〵跡はどうぢや〳〵、サア延引の科は淀屋へ引受ると、たわいのない放埒も、金の才覺縫様のお爲じやと、お最寵い程心遣ひ、仇事にして云明すも、矢張お前が太切さ、必呵つて下さんすなと、縋る貞節弟が義心、始めて聞て天川屋、詞「スリヤ大恩ある鹽冶のお爲、身を捨ての心遣ひか、ヲヽ、出かした〳〵〳〵なア、兄に優つた御恩送り、打擲仕たは義平が誤り、堪へて呉と引寄て、手を取交す兄弟が、胸も心も一時に、解て流れは淀川に、涙の水倍增りける、何時の間にかは圍の障子、朱の色增す大振袖も、ざどけ媚く娘の小庵、詞「辰五郎様、段々のおせもじで殿御を持ば、此家は血脉の私が治ます、あなたは里へお歸り遊ばし、お氣に入た其女中と、お添なさるが互の御勝手、義

平様お連申て下さりませと、ずつかり云出す不緣の挨拶、聞兼て辰五郎、詞「スリヤ隱し男に心中立、我を追出す心じやなと、躁立傍から吾妻も俱に、詞「ほんに〳〵厚皮な、尼の身での役者狂ひ、義理も法も世間の聞へも、何とも思はぬ徒娘、彼恥ざらず道ざらずと、二人が角目立旦那と成、悪ほだへした報は目前、今日からは女名前、此番頭が代判して、淀屋の家は萬々年、納るは此願書、御寮人様私しや直に代官所へ、ヲヽ、其方に任す早う行きや、とんで居りますすて所緣拘りのない所に、胡亂〳〵して居る愚鈍達、追拂つてお仕まいと、當り眼の鼻油熱切てぞ急ぎ行、詞「エヽ、儕迄が其悪口、堪忍ならぬと立懸るを、詞「コリヤ〳〵〳〵今と成て何虛云、言程此方の恥の上塗、それじやといふて此儘では、ハテ捨置れぬは忠義の一つ、大事を忘るゝ場所ではないかや、小庵殿、辰五郎は此兄が碇りと、請取ました吾妻も一所に、去來と二人を引立、立出るを娘は聲かけ、詞「辰五郎様、行ざやんすなら此世の名殘、未來は女夫と只つた一言聞かして行て下さんせ、何と、命に係た役者狂ひ、其戀人の年季證文、是持て行て下さんせと、投出す一通訝しながら、詞「ヤアコリヤ浮橋殿の身請の證文、スリヤ請出した客といふのも、アイあなたのお氣が休めたさ、縫之助様諸共に、密に八幡の下屋敷へ、そんなら放埒惰弱と見せたも、辰様への悪口も、皆僞りでござんすかへ、僞りかとは胴欲な、お爲で無うて言れませ

うか、詞「悪者共に隠さうと、心遣ひの其中に、今日に約まる寶の紛失、家さへ續ばわたしが身に、係る難儀が嬉しうて、覺悟極た御身代り、詞「扨はさう云ふ氣で有たか、終に優しい詞さへ一言掛ぬ辰五郎を、夫程迄の深切は、忝いぞや嬉しいぞや、喃勿躰ない、是迄お氣に入ぬのは、皆な私が不調法、詞「イヱ〳〵〳〵、さう美しう仰しやつても、皆此吾妻が作す業と、嘸憎かつたでござんせう、詞「イヽヱイナ大事な殿御を太切にして、下さるは私や嬉しい、アレ又あんな事計り、私こそ腹立儘、役者狂の徒娘、義理も法も忘れたかと、言たのが恥かしいやら悲しいやら、どうも顔が上られぬわいな小庵樣、詞「それよりは此辰五郎、科を負せて往かれうか、お咎請るは兼ての覺悟、イヽヤ私が、イヤわしがと誠を立る三人が、心々を想像、適貞女突かくる涙睚に天川屋、過し難儀の責苦にも、百倍越し思ひなり、早明過て表には、寄ます〳〵拍子木の、音賑わしく聞へける、詞「アレ〳〵相場を始める知らせ、群集に紛れてお早う〳〵、實尤米市を、涙花に始めし此淀屋、今日の相場の終る迄、お祟ないは家の德、小庵殿は女儀の事、代判なれば惣兵衛へ、科を被けて日を延し、雌雄の鶏揃ひし上、萬事目出たう義平が計ひ、暫時の別れと諌られ、出る二人に留まる娘、言たひ事も今更に、包む火炎の火繩さへ、消る心の物案じ、祭りし雛の甲斐もなく、離れ〴〵の女夫中、順てぞ歸る大坂に、名のみ殘して三重「賑はしき、淀屋の表は帳合正米内證とら市、日本一の商ひに儲る取込ヒ込、金

は石砂水番か、早追立る水放れ、人數に紛れ三人が、出る姿を戻り足、見付る惣兵衛コリヤ何處へ、詞「代官所の仰には、疑掛る辰五郎、返しはせぬと取付番頭、コリヤ何ひろぐと天川屋、支る手利のいれ股に、丁ど蹴飛す五りん飛、遣ても取たと又組付、委細は志らぬ買使、仲衆仲間が目を付て、旦那に向ふて立づく番頭、占て遣せと助け米、可愛がられぬ驗にや、打す堂島米市の、群集に紛れ三人は、八幡を指てぞ三重「落て行

九冊目

何方に鳴て行らん時鳥、淀伏見まで京よりは、三里に足らぬ長繩手、夏さへ半竹田街道、繁る彼處の藪際に、他國と見へぬ人手代、切殺されし非道の劔、葉に置く露も短夜の、知死期を告て息絶たり、止めを指もの源四郎、血刀拭ひ傍を見廻し、詞「今鳴たは早七つ、夜明ぬ内と傍なる、風呂敷包押戴き、詞「此代物を手廻ふとよつ程の骨折と、呟く向ふへ徒士若黨、箱挑灯の劔菱は、目印目角の藥師寺殿、好折柄と猶豫内、件の死骸に驚く供人、跡に引添驚坂伴内、何事やらんと驅寄ば、詞「イヤコレ騒んすな、おれゑやはいの、ヤアこなたは進藤源四郎、シテ彼密事の一件は、ヤレ驚坂暫くと、乘物より下立次郎左衛門、詞「ヤイ〳〵者共、身共は是に暫用事、我達は先へ馳せ、久世の渡で相待おれと、供の人數を追遣〳〵、三人彼處に擧寄り、詞「驚

冶崩れの源四郎、此藥師寺へ奉公望めど、佐平太殿と合躰し、大望ある我々なれば、聊爾に心赦されず、縫之助めが質物に、差入し彼鷄の片々、奪取て相渡さば、褒美の金子與へし上、品に依て召抱へんと、約諾したは先々月、ヲ、サ聞れる通り主人師直、討れ給ふ其後は、此伴内も御家來に、召遣はるゝ此砌、貴殿の賴みは餘儀なうても、迂濶の取次成がたく、身共も念を入たりと、咄しも密々包を開き、詞「サア其邊を失敗て宜い物かい、八幡へ逼塞して居る淀屋が、方から受戻した此鷄、京の質屋松屋の手代が、持て失る此街道に、待伏して殺して取ても、氣しんどな奉公より、兎角褒美の大金をと、欲悪不敵類なき、金の鷄手に取て、藥師寺は縱目横見つ、詞「ホ、ウ出かいた〳〵殺して取とい跡腹痛ず、容易手に入る此重寶、足利殿の命に依つて、天龍寺の御普請に、上洛せし某と石堂、深草の屋敷より、未明に嵯峨へ立越る、道で逢ふたも好い手番と、内懷へ確と納め、詞「褒美の金子は望に任さん、短夜の勞休息旁、持參の冷酒を遣し呉よ、畏つたと殘し置く、茶辨當より取出す瓶子、酒に目のない笑ひ顔、詞「ハ、ゝ、ゝコリヤ有難いは、御褒美違はぬ固めの盃、伴内樣石五器は有まいかい、ヤ幸〳〵、盃代りは此馬柄杓、ヲット宜いはと片手に瓶子の、口からどぶ〳〵〳〵ぐつと一息、詞「ア、伽羅た、や〳〵、ドレ最一つと又どぶ〳〵〳〵、詞「ア、空腹に迄付て呑た故、コリヤ急にぐざつたはいの、好物と知つて態々、お持せに預るとは、酒呑冥加に叶ふた仕合、大名もで藥師寺樣は、

邪人ぢやはい、何でも惡らふ御褒美を力づいたら、天鵞絨の淵縮に縫でもさして、金拵への刀きめて、踊込に搆てこまそ、ハ、味い〳〵、ヤ是を肴に最一つと、言も卷舌妄言半分、好時分ぞと伴内が、袖に藏せし用意の一藥、密と瓶子へ入るとは、夢にも夫と白銀の、瓶子取上口から口へ、銚子有たけ斯の通りじや、詞「サア〳〵肴には褒美の金を、ヲ、最前より認置し此一通こそ金子の代と、差出す書物受取源四郎、押廣げて篤つくと見、詞「此賴みを他言させまいと、啞に成る藥を呑せ、事成就した上で、即座に治する妙藥を與へ、其時褒美と書物を、引替にするといふ、手形代の文言でごんすの、ヲ、大酒に亂れ若他言せば、我々が身の一大事さ、イヤサ夫が大きな素人根性、其方をくらせば此方のばれ口、人殺しのぼくが高い、夫ともに氣遣ひなら、サア悉皆とばらさんせと、尻居に臺座どつさりと、据た性根ぞ不敵なる、呑込藥師寺打點頭、詞「出かした〳〵、其据つた魂を見込し故、鹽冶が弟縫之助、寺岡が首取らば、我家の秘法を以て、啞ごろも治しくれん、ム、スリヤ兩人を切した上、兼て聞居る秘法の藥で、ヲ、サ御褒美も遣さるゝ證人は此伴内、といふをも聞かず、イヤ〳〵〳〵、詞「些との間でも啞に成事おりや否じや、あんだらくさい置しやれと、呑だと知ぬ納め顔、見るより伴内吹出し、詞「ハ、ゝ、、何ぼやんちや云た迚跡の祭り、其藥は今呑だ、酒に身共が入て置た、ヤア〳〵そんなら啞に成藥を、ヲ、半時過れば忽ち留る、汝が言舌、叶ぬ事と諦め居れ、ヨウ〳〵〳〵是は又情ない、

コレ藥師寺樣、イヤ藥師寺殿、人に臓揉して置て、合點もさせず呑すとは、おれより悪越す敵役、ヱ、〳〵と云ふてもどうも仕樣がない、餘り酷ひ胴欲じやはい、コリヤどうせうと立つ居つ、體を揉ばいと〻猶、五臓に染込秘藥の利目、氣は言ふ氣でも出ぬ聲に、ウン〳〵〳〵と叫くより、外に仕樣は泣計、足摺したる見苦しさ、ぞろりと見遣て、詞「ハヽヽヽヽハラ妙藥も有物じやな、藥の利目御覽なされ、御主人にも嘸御安心、ヲヽサ〳〵、ナニ源四郎、今云ふ如く兩人の内、一人にても討取來らば、即刻得難き妙藥なれ共、藥師寺が威光を以て取寄、以前の通り本復させ召抱へん、コリヤ必ず吉左右相待居る、イザ驚坂と打連て、歸るを遣じと源四郎、驗雜腹に取付を、ヱ、面倒なと振解、脇坪丁ど藥師寺が、一時殺しの眞の當、呼吸を止られ倒るゝ隙、間近き人音主從は、見咎られじと足早に、堤傳ひに立歸る、おのが古鄕は伏見の里、藤の森よりいつきせき、夜深に拵ぐ平右衛門、通掛つて挑灯の、明りに見付る手代の死骸、詞「ヤアコリヤヤア慘酷しう殺して有、慥に盜賊邪の仕事、ハテ强欲な奴があると、云つゝ通る横顏を、息吹返し源四郎が、天の與へと後より、思掛なく切付るを、引外して早速の寺岡、尻餅搗せば源四郎、起上つて眞かせ矢筈、刀扱取り顏見て悔り、詞「ヤア不忠者の進藤め、體の血は此死骸の、樣子一々白狀と、挫ぎ付れば只うん〳〵、藥の利目に啞ごろの、一句も出ぬ荒涙、詞「ヤヤ此奴物の言れぬ仕うち、幹太い方便とせざされても、是計は嘘でないと、云ふも言れぬ目

をぎろ〳〵、もがく間に懷の、密書落れば取上る、見せじと啞が武者振付、其手をがつくり膝車、乘掛つて狀繰廣げ、詞「其方殿働きを以て、件の鷄慥に落手致し候、ヤアと驚く寺岡が、足の緩みに起立源四郎、取に掛るを張飛し、詞「此上彌縫之助平右衛門、二人の内密に討取來りなば、約束の妙藥を與へ、過分の恩賞遣すべき者なり、進藤源四郎殿と計、賴人は知れぬ共、詮議の手掛り忝いと、云ふ間も落たる刀を拾ひ、切込四寸の身を開き、附入早足に叶はじと、挑灯ばつたり切落し、逃出す源四郎寺岡は、跡を慕ふて三重追て行

十册目

世を忍ぶ身は深草に、荒にし宿の東窓、賴む日陰も寺岡が、爰に移らふ藤の森、軒に祝儀の菖蒲葺、今日の神事と内祝ひ、老の心も忠實に、闘し内義の手傳ひは、常に中好き證なり、詞「申し嘸樣、鱠も大かた刻みました、鰹は跡で削ます、さうして置て下さりませ、イヤ〳〵今日は此藤の森のお祭り、殊に孫が誕生目出たい節句、老先祝ふもあれが可愛さ、手傳はにや成ませぬと、機嫌は願ひの宜い出端、一つと汲で差出し、詞「毎日〳〵申上るも氣の毒ながら、又跡月鎌倉より、戻られた夫平右衛殿、どう云ふ子細か詞さへ、お掛なされぬ他人待遇、お腹の立事有ば、夫は斯是はどうと、言ふて機嫌をお直しなされて、下さりませと夫思ひ、詫る詞の先折

て、詞「コレ嫁女、又其事を言やるかいのふ、其方迎も小身ながら壹岐の家中、間島文太兵衛と云侍の娘、母迎も同じ事、此譯を云て仕舞ば、一生母は平右衛門に、顔合す事もならぬぞや、聞ぬが花、言ぬが了簡、彼奴が事は投て置て、樂しみは孫の平吉、詞「聲がせぬが何所へ往たの、イヱハイ今迄表に居りましたが、ヱ、居りましたとは大凡な事、斷然神事の賑やかなで、宮の方へ行はせぬか、大事の孫に怪我でもさして能物か、ア、氣の付ぬと呵られて、詞「夫なら次手に お宮へも、何角の願ひ遂一寸、見て參りましよと尻輕に、行親よりは殘る身が、子に遣はるゝ物案じ、老母は跡をこて〳〵と、取片付て煙草盆、憂吹晴す煙より、薄い暮しの我内へ、歸る寺岡平右衛門、とつかは急ぎ門の口、詞「女房共、お北〳〵坊主めも内に居ぬか、ヱ、母者人お一人置て、のら〳〵何所へと呟きながら、負た半櫃どつさりと、卸すも直な竹椽へ、押直して這平伏、詞「今日は端午の御祝儀、お目出たふ存じますと、云も尻目に見た計、答なければ猶摺寄、詞「日外歸つて二た月餘り、お詞迎も交されぬは、能々の儀と存ずれど、差當つて覺なき身、主人に離れ涙々の、便にも賴にも、大事に致すは母お一人、見放されては天地の内に、住所なき平右衛門、コレ御了簡下されと、眞身の涙諸共に、願へど更に耳へも入ず、詞「ア、嫁や孫は遲ひ事や、常と違ふて表も雜〻、姦しや鈍ましや、ドレ裏へ出て氣を散そふと立上り、あいそ納戸へ入影を、見送り〳〵溜息つぎ、詞「矢張今日も直らぬ御機嫌、物さへ言ぬ母人の、心

の怒りはどう哉と、思ひ傍に氣を配り、先何よりはと半櫃の、蓋引明れば源四郎、ぬつと出るよりきよろ〳〵眼、寺岡を見て摑付、手を捻上て頭轉倒、庭へ投付戸を引立、詞「サア何程手向ひ立しても、斯成たらモウ叶はぬ、盜んで遣た寶の行衛、眞直に白狀仕やれ、サどうじや〳〵と問詰ても、喚く計に頭振る、詞「ヘ、ハ、、、、、知らぬとは言れまい、證據は其方が懷中に、持て居た此一通、鹽冶の重寶印子の鷄、受取たと有文躰の、賴人は知らぬども、奥の宛名は進藤源四郎、御恩を忘れし惡計、言ずば斯と衿絞に、綾付られて返答も、泣顔計チン〳〵と、口を敎て伏拜めば、詞「サア誤つたらば行先を、早々言へと突放され、涙に混る水涕を、啜上たる指を筆、詞「ナニ〳〵他言せぬ誓言に、藥を飲され、啞と成たも皆金づく、ヤアスリヤ言舌は廻らぬとな、ム、と當惑チン〳〵と、又書下すを、詞「何と云啞を治す妙藥を、調へ吳なば寶の行先、白狀せふとは面白い、サシテ其藥は、ムウ〳〵スリヤ忽ち治る妙藥とは、ホイと心に差當る、思案の透間に逃出す、帶際摑んで引戻し、詞「其妙藥を調へて遣ろ、再び物を言さねは、證據にならぬ後詰の對決、マア夫迄は手放されぬと、又も投込半櫃へ、鐵碇と胸を据、妻子の歸り松風の、音も夫かとつおいつ、思ひ入たる折柄に、國幾つ隔る中も恩愛の、緣が行合下向道、お北が親の文太兵衛、西國武士の堅親父、孫が手を引急々と、伴ひ歸る門の口、詞「父樣内は爰玄やはいなァ、ア、是が　聟の名も替つて有ば、尋ては知れ惡からうに、好所で逢たな

ア、サイナア明神樣のお引合、コレ平吉御案内仕遣らぬか、アイ祖父樣、ござれと先に立、這入を目早き平右衛門、是は扨珍らしい舅殿、御用に付てお登りか、サ、是へ、コリヤ女房、お足洗がせませぬかい、アイと盥に、汲込む水の打解し、他人交ずの孝行振、詞「イヤ〳〵搆て下さるな、互の無事は娘に道々、言たり聞たり先お袋も息災で、孫めが成人モウ八つに成居るか、アイ丁ど今日が誕生日、幟の節句所の祭、何や彼や取交ての祝日に、能マア來ては下さんした、目出たい中に肝心の、コレ此方の人、母樣の御機嫌は直つたかへ、何じや娘、お袋の氣に違ふたか、ア、イヤ〳〵別でもない内證事、コリヤ坊主よ、祖父樣が國からお出と、母者人へ申て來い、アイと立子の年よりも、かしこに響く鐘太皷、音に恟り文太兵衛、詞「ヤア〳〵〳〵、アリヤ何事と追取刀、油斷なき武士の心得、ヲ、父樣の遽ましい、アリヤ祭を仕舞た鳴物じやはいなア、ア、所の神事か、おりや又村に一揆でも、發つたかと思ふた、ハ、、、、ホ、、、、、ウム、ハ、、、、笑ひも機嫌に入口より、役に當りし鎧武者、何か嘐々鳴物を、擔た儘に、詞「御亭内にかわけて欲い、ヲ何でも分て貰ふのじや、おれが勝か、おれが負か、元侍の貴丈故、鎧武者の捌方、サ、、、、分て貰をと口々に、聲高調子は百姓の、困出入としられける、詞「ア、コレ喧しい勝の負の分、のどは、一つも合點が行ぬ、エ、惡い呑込、コレ斯じや、中程迄は乘勝た此どれ作、馬から落たは怪我といふ物、コリヤやい下手から落た牡丹餅なり、乘拔たはお

れが勝じや何吐すぞい、行際に寄て飲した鬼殺、目論で落したな、デモ牡丹餅が負た證據じや、鬼殺をなぜ呑した、イ、ヤ餅じや、酒じや〳〵、酒じや〳〵と跡や先、どんちやん叩く鐘太皷、響渡りて氣の毒なり、詞「ア、何事かと存じたら、コリヤ競馬の爭ひじやな、お互に目出たい御神事、御了簡〳〵、中直り酒は拙者が振舞、ソレと指圖に女房が、取出す茶碗德利酒、大將權兵衛押留、詞「呑過すから此爭ひ、酒も餅も會所へ住て、腹存分にどれ作腹八、モウ了簡をしたが宜はい、いか樣祭りに腹を立るは損、是から直に會所へ住て、酒で敵を討て呉す、併も春から評判の、四十七人の敵討じや、大酒喰の助と見やうがな、イ、ヤソレ寺岡とやら云足輕めじや、腹切段に逃たとやい、此奴が〳〵、臆病者は我が仲間じや、イヤ腰拔の親類じやと、知らぬ土民の爭ひも、肝に答ゆる平右衛門、妻も舅も無念泣、吐息繼だる計なり、權兵衛は天窓を搔、詞「エ、ぎゑんの惡い足輕沙汰、出入と一所に山へ行〳〵、ノウ御亭主、折角出された此お神酒、呑ぬが損じや一杯宛、酌で廻るが德利酒、殘りはおれがと、がぶ〳〵〳〵、詞「サア〳〵〳〵わつさり勝鬨も、しどろもどろの鐘太皷、囃立てぞ立歸る、人に詞の禮儀さへ、投首エイ〳〵したる三人が、心々の屈詫顏、思案を極め文太兵衛、旅の用意の印籠矢立、紙取添て差出し、詞「平右衛門、今日只今他人と成、娘北へ暇の狀、一筆書て貰いたい、コレ父樣、めつそうな何

で私に、ヤア搆ずとも沈默て居れ、サ思案に及ばぬ書た〳〵、ハテ變たお望、どう云子細で女房を、ヤア云な平右衛門、臆病者と緣組では、此親父迄武士が立ぬ、ヱ、我はなア、御主人石堂樣と、鹽冶樣とは近しい御一家、互に似合の足輕同士、娘を呉たは十年以前、所に日外の騷動、足輕寺岡平右衛門も、大星樣の連判に加はり、敵討のお供したと、聞た時の其嬉しさ、傍輩の付合、上役の旁迄、適れな聟を取た、文太兵衛は果報者、手柄者と有難い仰を受、聟の蔭で譽らるゝと、嬉し涙が飜れたはいやい、詞「武運に叶ふて師直が、首取したいと祈る内、敵討も濟だは、春に成て義士の銘々、切腹の人數に寺岡は見へぬ、ソリヤこそな根が賤しい小身者、逃た〳〵と打て替、爪彈する譏口、役所へ出るも面目なく、詞「何でも逢てと、病氣と云立、登つて來てあつけに入たはい、百姓町人に迄、人畜生の樣に云はれ、生殘つて頰恥搔を、無念にはないか、口惜ふは思はぬか、ヱ、見下げ果た此卑怯者と、老の逸徹齒に絹を、着ぬ詞も荒涙、至極の道理に女房も、どう取成も泣噦、胸を立切一間より、詞「一旦迎た大事の嫁、戻す事は成ませぬと、平吉連て立出る母の親、詞「ヲ、お袋、久し振の挨拶も、斯成ては他人向、何で娘は戻されぬ、サレバイノ、ならぬと云は此平吉、嫁を力に成人させ、適武士に育にやならぬ、不肖ながら母に免じて、成ませぬ、其心なら孫めも一所に、此親父が連て往て、侍に成育て見せる、平吉來いと引寄る、手を扱放し平右衛門、詞「男の子は男に付、此方の儘には成ますまい、

ム、夫なら娘も去らぬのか、アイヤ女房は心任せ、コレ此通りと、さら〳〵〳〵、書て渡すを文太兵衛、引手繰て三行半、詞「去狀慥に受取た、サア娘立、ヱ、立居れと、つかうどに云れてわつと聲を揚、常の氣質で尤と、思へど餘り我が强い、武士の意氣地の退去も、最寵可愛い我子と云、血統の緣に維がれては、是が往る物かいなう、詞「コレ〳〵〳〵平吉、些つと祖父樣へ詫言をして給ひなう、コレ祖父樣、父上樣、モウ堪忍して母樣と、一所に置て下されと、父が顏色打護り、泣目を蔽す意地らしさ、聞く祖父祖母も一時に、ヲ、可愛やと云事も、成らぬは武家の表向、内に涙を湛へけり、氣を取直し文太兵衛、詞「ヤア未練な娘、緣切たれば孫とも思はぬ、サア來いと手を取て、迫立らるゝ憂難面、詞「平吉、母は最ふ往ぬぞや、悪い虫が有程に、氣を付て下さんせへ、祖母樣お健で彼兒が事、賴まするも都度〳〵に、言せぬ親の武士氣質、何時晴間なき五月雨、降は涙の別れ路を、無理に引立出て行、跡に不便や平吉が、詞「父上樣、アレ母樣が往ちやつた、わしやどうせうと泣出す、我子を膝に抱き締、詞「ヲ、能う堪た、辛抱した、夫でこそ爺が子じや、出かした〳〵〳〵と、無量の思ひ數々の、心の歎き人ちらぬ、老母は漸立上り、開く佛間に御明しの、光も闇き世を觀じ、詞「日外家に歸りしより、母が詞は交ぬど、今改めて我子寺岡平右衛門、エイスリヤお詞を下るゝか、ヲ、ヲ言ねばならぬ今日の今、アレあの佛間に餝しは、御主人鹽冶判官樣、大星御親子義士の方々、爰に迎へし三つの位

牌、サ近ふ參つて御回向しや、ハヽァ有難しと敬ひ深く、摺寄我子の衿元摑み、隱し持たる逆朱の位牌、折よ碎と打杖に、縋る平吉おろ〳〵泣、母も涙の聲震ひ、詞「ヤイ悴め、今打据し位牌の逆朱、是を見い、我子の最期を待暮し、忠死寺岡平右衛門と、書た文字も恥かしい、世間の譏り人口も、親の欲目に若や又、生延はるには子細でも、有ての事かと思ふたが、女房には無理暇取られ、舅の悪口一言の、詞も返さぬ今の仕躰、武士道は捨つて有ぞよ、詞「サァ位牌の御前、母が見る前、潔う殉死せい、死と勸むる今迄も、不忠不孝と物言ぬは、憎さ故か可愛さか、母が心を想像れ、武士の鑑と云はせたい計ゑやはやい、是程の事此母に、習ふ其方では無つたが、どうした天魔が見入しかと、位牌を撥と打付て、諫る忠孝貞心に、只ハッ〳〵と平右衛門、指伏ひて赤面の、樣子表に親と子が、戻つて聞と内にはまらず、詞「返答せぬは聞入ぬ心じやな、ハァ、是非に及ばぬ、サァ平吉、兼々婆が言た通り、用意〳〵も曇聲、渡す刺刀受取孫、雪の肌を押脱で、詞「コレ祖母樣、わしが死ぬると父樣が、手柄者にならまやるなら、敎へて囉ふた此腹を、終今切て見せますと、敏き覺悟に嬉しさ悲しさ、洩聞く外に女房が、何でと叫ぶ口を留め、制する祖父も氣は無端、涙呑込呑込む老母、詞「ヲ、健者じや善ふ言たなァ、七つや八つの子供でさへ、忠と孝とを合點して、潔いァノ形を見い、詞「其方が代りに腹切が、助けふとは思はぬか、是でも死なぬか殉死せぬか、サ其儀は、サァ〳〵〳〵と恩愛に、柵掛し義

理の繩、締付られても、詞「此身はどうも、得死なぬか、ヘヱ、胴欲な身知らず、詞「平吉、婆も跡から行、武士の子と譽られて呉ヨ、ァ、合點と突込刄、二目とも見ず寺岡が、指添扳取老母を押へ、詞「母人暫く、イヤ〳〵放せ〳〵、先づ〳〵〳〵拙者が胸中、悴を見殺す一通り、表にざる舅殿、女房も倶に此方へと、詞に開く門の口、朱の我子に取付女房、詞「可愛や平吉、母じやはいなう〳〵、ヲ、祖父も爰にと縋り寄、意地も立派も今更に、泣倒れ俯計りなり、詞「母樣逢たかつたに能う來て下さつたなう、コレ祖父樣、父樣の代に腹切たら、寺岡は卑怯じやないぞや、ァ、死ぬるのは痛い物じやが、父樣の手柄に成と、婆樣が言うてじや故、おりや堪へて極樂とやらへ行ますはいなう、ヱ、成らふ事なら大きう成て、父樣を卑怯者と云た奴を、首切てから行たい、是が腹が立はいなうと、遺あどなき口説言、是を限りの斷末間、引取息ぞ便なけれ、ヤレ可愛やと正躰も、泣入〳〵祖父と祖母、女房はいつそ氣も亂れ、詞「コレ〳〵〳〵〳〵平右衛門殿、どれ程の事が有にもせよ、現在の子が腹切を、能うも見捨て居やまやんしたなう、苛心と身を悶、恨歎、ば文太兵衛、子細が有らば言へ聞ふ、サどうじや〳〵と母親も、涙と倶に迫掛れば、詞「ハヽァ母の諫舅の意見、御尤とは存ながら、命を惜生延しは、大星樣の御遺言、縫之助樣にお家の相續、請合し身の大役、跡目の願ひも實の紛失、詮議の種は捕へしかど、秘藥を以て啞となしたる敵の計畧、是を治するは五月五日に、誕生せし男子の生血と聞た時は、

南無三寶廻り逢しは悴が不運、我手に懸けふか兎や角と、思案に苦しむ其中に、自身の覺悟を幸と、腹切したはお役に立たさ、詞「坊主よ、出かした能く死んだなァ、親の名揚る計でない、お家を立る大功は、四十餘人の人々にも、劣らぬ忠義の手柄者、詞「女房泣な何吼る、泣な〳〵〳〵と言宛も、睚張裂血の涙、恨も晴て三人が、心々の悔言、一所に死なふと思へばこそ、祖母が敎へて殺しやすれ、跡に殘つて何樂しみ、詞「嫁は猶しも悲しかろ、ハイ〳〵〳〵悅びは悲しみの元とは聞けど情ない、生た其日が敵にて、殺さにやならぬ因緣なら、出來ぬが優しで有た物、誕生日に死ぬるとは、どうした報でござんせう、詞「ヲヽ道理じや娘尤じや、忠義故とは云ながら、一人も一人健氣な孫、死する際まで爺親を、卑怯未練と苦に病だが、日本一の大忠臣、詞「聞したら嘸悅ばうに、莟の花を先立て、世を盜んで居る此親仁、ヲヽ〻〻此婆迄が生殘るは、詞「こなたも〳〵、其方もお前も、因果同士と一時に、打交へたる溜涙、三筋四筋の瀧津涙、庭に張る如くなり、寺岡はつと泣目を拂ひ、詞「此上は悴が忠孝、立るは是と死骸の血汐、器に引受以前の半櫃、開けば飛出る源四郎、又逃出すを引戻し、詞「サァ約束の妙藥と、手に持添て一息に、呑せば忽秘法の利目、うんと悶絶扨こそと、皆の驚き平右衛門引起して、詞「サァ白狀、言ずば此儘芋指と、白刃を胸に指付られ、詞「ァヽコレ〳〵まだ物は言れぬ〳〵、早まるまいと云言舌、自由に成たは天の助け、きり〳〵吐せと捻付られ、體も俱に横手を打、

詞「コリヤ奇妙、藥も有れば有樣に、言て仕舞ば言分あるまい、賴人は佐平太殿、實は則ち藥師寺が、京の屋敷に持て居らるゝ、スリヤ推量に違なく、縫之助樣此寺岡、二人の內を討て來いと、言ふたも彼奴が計じやな、成程〳〵其通り、密書を割符に褒美の金、受取手筈も皆すかたん、モウ此上はお助と、油斷を見すまし捨たる刀、取手も早く切付るぞ、換す早速の平右衛門、刀蹴落し呼吸を一當、倒るゝ源四郎、詞「コレ聟殿、詮議の種を失ふては、アイヤ氣遣ひあるな具殿、暫時に戻る半時殺し、仕上は斯と半櫃へ、打込思案の締括り、詞「此奴を此儘詮議の證人、是より直に藥師寺が、舘で悴が敵も一所に、ホヽ〻〻、適聟殿上分別、孫が忠義も立つ一件、隨分首尾能、お早うと、隱し涙の母女房、坊主が亡體宜しくと、一聲殘す時鳥、わつと血を吐三人が、泣音を餘所に別れ道、世の憂伏見の隱れ里、歎きを跡に三重「急ぎ行

十一冊目

西八條の在番所には、藥師寺次郎左衛門、預る役儀の表向、邪氣を隱せし箒目も、夫と白洲に奴らさが、打水ばかり都なり、其水よりは水際の、立た取形細そりすうはり、端手な姿の二人連、詞「是は專ら吾妻にて、四十餘人の敵討、賣て歩行は紙代計、當世流行忠臣藏、見立盡しを買はまやんせ、お買なされと賣聲を、聞て立寄る奴共、何だこりや珍しい、敵討の見立より、

女子の賣人が新しいなア、イヤサ聞事で有べいなれ共、是の旦那は彼今の、敵討には差合たら〳〵、聞て濟ない早く行〳〵、ヲ、何じやいな町方よりは武家方で猶買しやんす、見立づくし、ソレ〳〵買てさへ下さんまよは、二人が踊を添るがなと、恥かしさうに言事も、夫者の手管に奴共、現抜してぐんにや〳〵、詞「見れば見る程美しい、其顔で歌を諷つたら、びやくらい堪ら ぬ物で有べい、ヤア〳〵譬主人が御目玉で、お暇が出ても大事ない、所望〳〵と口々に、望懸れば今更に、恥かしいのも何の其、いつそ儘よと目交して、師直が〳〵、かほよ見初て賄賂取て、果は鹽冶の家潰し、四十餘人が年比の怨、高の舘へ押寄る、忠臣孝心適義心、終に殉死も善悪の沙汰、見立盡しを買はまやんせ、詞「ヤイ〳〵〳〵姦しい參り掛つて聞とも知らず、鹽冶 贔負の踊歌、此舘で云觸すはア、聞へた、扨は奴等は大星抔が由縁よな、ヱ、憎い奴と、鷲坂が、目に角を、立端のないは奴共、詞「夫見をらう、是じやに依て身共等が、歸れと云を聞入ぬ、はつさい共早立〳〵と言捨に、己から先へ逃て入、おづ〳〵二人も立出るを、詞「コリヤ〳〵〳〵待居らふ、いかにしても詮議有奴、其持て居る見立とやら、身共が前で讀上い、イ、ヱハイ夫はどうぞお免下されませ、イヤ鮮太い奴の、讀ぬは曲者引括つて、何も角も白狀させうか、サア夫は、サア〳〵〳〵早く讀め、ハイ此上は是非に及ばぬ、お橋樣讀まやんせ、サア私も讀けれど、マアお妻樣お前から、そんなら私と押開き、詞「マア此度の敵討、敵味方も澤山有内、

第一の大關は、聞迄もない大星、由良之助で有うがな、イヤ私等が賣まする大關は、鷲坂伴内樣とやらでござんすはいなア、ヤア何じや鷲坂伴内、そりや又どうして大關じや、サア其處にこそ謂れ因縁、能思ふて御覽じませ、時の拍子で師直樣が、鹽冶殿に切れて死なまやんした、其時は相手代つて、討は伴内樣、イカニモさうだ、由良之助は卑怯者、一人の敵に四十餘人。徒黨して討のが何の手柄でござんまよ、いかにもさうだ、伴内樣なら一人して、四十餘人が百人でも、討まやんすは知れた事、夫で今度の大關は、鷲坂樣でござんすはいな、いかにもさうだ、イヤハヤ〳〵奇々妙々たる評判な、夫で疑ひさらりと晴た、出かまた〳〵〳〵と、打て替たる滿悅顔、サア仕て遣たと二人は摺寄、詞「是程名高い伴内樣、どんな殿御じやお顔なと、見度が望で此讀賣、必ず笑ふてお呉なへと、可笑さ隱して嬲掛れば、ヲ、安い事〳〵、遠からん者は音にも聞、近からんは、寄て此鼻が、恥かしながら伴内ぞや、去ながら今其方達が言如く、振替つて師直殿、御切腹なされなば、敵を討て此伴内、名を滿天に揚んず物、能く武運に盡果しと、思へば悲しい〳〵と、無念の涙疎々と、出さうな所を得出さぬは、家相應の忠臣なり、折から小者が聲として、詞「石堂樣の御入、聞たか女共まだ咄したい事も有れど、堅ぞう殿の御入、コリヤ臺所へ往て待て居れ、コリヤ必ず往なよ、合點かと嫌な眼付の女子好、アイ〳〵〳〵と二人は目交首尾能と、勝手口へと急ぎ行、早評定の刻限と入來る石堂右馬頭、遠太守の其骨

相、徐々座席へ通らるれば、次郎左衛門出迎へ、詞「是は〳〵石堂殿、今朝も又鎌倉より飛脚到來、雌雄の鷄相知れなば、大切なる御造營、急がせよと重なる嚴命、いかゞ成さるゝ御所存と、盜ませ置し寶の詮議、空恍けして尋る佞奸、右馬頭莞爾と笑ひ、詞「寶を失ふ越度に依、淀屋の家も遁れぬ罪科、併し捨置れぬ寶の詮議、奪取たる盜賊も、慥に夫と石堂が、睨んだ眼は違はじと、見透す詞に底氣味も、左有らぬ挨拶紛す折柄、詞「申上ます、鹽冶判官が浪人と申、藥師寺樣へ御直談と、押て是へ通りまする、ヤア素浪人の分際で、藥師寺樣へ對面とは、身の程知らぬ慮外者、早追返せと驚坂が、苛つて下知する間もなく、支る雜人刎退蹴退、脊負半櫃屹りと、腰を定たる足輕寺岡、ヤイ瓦礫馱奴等、藥師寺殿に逢までは、跡へは歸らぬ平右衛門、留立して怪我捲るなと、白砂に動かと押直る、詞「ヤア過言なる狼藉者、夫引立よと伴内が、下知に取付下部共、摑で投る强力强勢、ヤア手向ひひろがば身共がと、立寄驚坂、ヤレ待て伴内控て居れ、ムウ誰ぞと思へば、扶持放されの足輕めじやな、藥師寺に直談とは、ア聞へた素浪人の、喰ひ物が無さに無心に來たか、ハレ不便な奴なア、ヤア悦まい藥師寺殿、サア四も五も入らぬ其方が盜んだ、鹽冶の重寶雌雄の片品、雄鳥を爰へ出さつきやれ、默れ此藥師寺を盜賊とは、出る儘の詛言、石堂殿も是にお渡り、今一言吐して見居らふ、ヘエハ、、、、御家門のお殿樣も是にお渡りなさるゝからは、猶明白に糺して見せう、イヤナニ平右衛門、藥師寺殿を盜

賊とは、身の程知らぬ非禮の過言、夫共に證據ばし有ての事か、何と〳〵、ハア證據と申すは不忠者の、進藤源四郎引捕へて何かの白狀、イヤサ證據抔とは皆僞り、源四郎は子細有て、啞ころと成たる由、伴内に聞て居る、但し啞めが物を言たか、ぬけ〳〵としたア頬はい、ム、ハ、、、、、ヲ啞と成た源四郎に、今物を言はして見せう、是見て置けと半櫃を、明て引出す源四郎、詞「サテ今一度此所で、賴まれた計の一々、白狀ひろげと捻付れば、アイタ〳〵〳〵さう手强うては物が言れぬ、少と緩めて下されと、廻る言舌、詞「コリヤどうじやと怪轉の藥師寺、伴内も色を違へて閉口す、詞「さう有れば赦して遣す、斷然言せと突放せば、些つと逃退、詞「何じやい〳〵、おりや何にも知らぬぞよ、いかに弱い者じや迚、手込にして知らぬ事を、白狀せいとは後闇、知らぬ事は何時までも知らぬ〳〵と、横に突張竹性根、落付藥師寺引取驚坂、詞「サア寺岡證據はどうだ、僞りと仰しやつたは、藥師寺樣の誤りで有まいかな、ヱ、人畜生の源四郎、譬白狀せぬにもせよ、外に證據は此一通、名宛は無けれど自筆の書面、書人は慥に藥師寺、コリヤ〳〵〳〵平右衛門、そりや證據には成まい〳〵、石堂樣、自筆で書た此狀、なぜ證據には成ませぬな、サレバサ名宛がなければ反古も同然、胡亂なる儀を言募り、若も寶に凶事有ては、イヤサ寶の有所知る迄は、身を慎しむが義心の肝要、慮外の段は誤れ〳〵、藥師寺殿にも御了簡、短慮なるは下郎の癖、イヤ打やつて何かの密談、藥師寺殿、いかにも、赦

されぬ奴なれど、石堂殿の御挨拶、イヤナニ伴内、見苦しい源四郎め、奥庭へ打込置け、イサ石堂殿、先奥へ御入有れませう、五月雨は降しく池の水増して、様子窺がふ二人の女、密と忍んで庭に出、平右衛門様、お前の教に入込で、始終の様子は聞ましたが、寶とやらが手に入ねば、大事の〳〵縫之助様、最愛と思ふ辰五郎様、お二人のお家も立ず、こりやどうしたら宜からうぞいなァ、浮橋様、吾妻殿、何にも氣遣ふ事はない、最う此上は破れ被れ、石堂様のお詞は重けれど、手延にならぬ寶の詮議、奥へ踏込藥師寺め、首筋押へて受取寶、お前方は不忠者の源四郎め、欺し寄てコレ斯うナナ、アイ〳〵命に代ても二人して、仕課せませう、出來た早う、合點でござんす、足輕め待居らふ、コリヤ粕奴め何で邪魔する　ヲ、そりや身共が言付た、ヤァ其方師直が悴佐平太、此屋敷にはどうして居る、ヲ、藥師寺殿と言合せ、密に登つた其子細は親師直を討たる敵、四十餘人は自滅ひろぐ、迫て殘つた平右衛門、首打落すが父への孝養、覺悟して夫へ直れ、御意じや直れ〳〵〳〵、ハ、、、、、討洩した高の佐平太、出會したは此方の幸、念佛でも突出せ、ヤァ入ざる廣言、ソレ者共、心得組付四人を相人、手練の寺岡事とも せず、受身の待遇取手の秘術、暫し揉合三重「間もなく、苛て切込佐平太が、刀を更して飛鳥の入身、又打掛るを受たる庭石、ハラ心得ぬ、佐平太が懷中にて、鳴たは慥に金の鶏、盗隠せし寶の有所、ヤァ此鳴聲を寶とは、ホ、ヲ鹽冶家淀屋に傳る名器、唐の玄宗皇帝、御秘藏有し金

の鶏、久しく雌雄別れし時、邂逅相逢奇瑞には、音を出すと有不思議を聞、詮議の種に預りし淀屋の雌鳥、今鳴音に知らせし寶、此方へ渡せ、ヲ、斯顯れたら渡して呉る、代りには已が首と、又打懸る刀を押へ、突込腕に引出す鶏、さうはさせぬと伴内が、一寸掴んで逃出す、留むる、支ゆる入亂れ、爭ふ内に伴内が、屋根へ投遣る件の寶、南無三寶と平右衛門、屋根を目掛て駈登るを、數多の家來が取卷を、ばら〳〵と薙倒し、何れ隙なく爭ひける、此方の間には浮橋吾妻、源四郎相手に詰寄〳〵、詞「不忠の天罰源四郎、我々が手に掛るぞ、ヤァ一寸才な幻妻めら、嬲殺しと段平物、氣は勇ども女業、嫋き受太刀躊々々、既に危き一闘より、飛來る手裏劍、源四郎が究所に中つて倒るゝ有樣、一間を出る右馬頭、詞「天より中る小柄の手裏劍、平右衛門が忠義にて、追付揃ふ雌雄の寶、鎌倉殿へ差上なば、其功に由り縫之助が、科を赦し我國へ分地させよと、赦免の御上意、又師直積悪も、一々御聞に達せし上は、佐平太初藥師寺迄、頓て遁れぬ天の責、二人の貞女は家土産に、源四郎が首討て、夫夫へ早う〳〵、擬と二人は有難涙、餘る憎さに進藤が、首搔切て躁々と、詞「そんなら殿樣早お暇、急と一聲賢者の詞、引別れてぞ三重「棟高き、見るも危き家根の上、難なく寶奪返し、下り立寺岡支ゆる大勢、突込長柄を切拂ふ、手練の太刀風强氣の鋒、切立られて叶はじと、逃出す大勢追行寺岡、詞「ヤレ待て暫しと聲を掛、物見の亭より右馬頭、詞「ホ、ウ出かした寺岡、汝が忠義の働故、二品の寶手に

入る上は、鹽冶の再興近きに有と、悅ぶ後に藥師寺鷲坂、そうはさゝぬと上と下、二人へ懸るを取て押へ、詞「敵の餘黨惡事の同類、鎌倉へ引立て、御裁許受んと石堂が、智勇の詞治りし、御代の賑ひ門々に、餝立たる染幟、御贔負御祝儀進物も、大入國入取雜て、目出度筆を納めける

寛政九年丁巳如月廿一日

作者　若竹笛躬
　　中村魚眼
　　並木千柳

忠義墳盟約大石 終

風雅でなし
洒落でなし

忠臣一力祇園曙

建長寺山門

作者　司馬芝叟

比は曆應初の年、彌生の空もうらゝかに、桃に柳の咲つゞふ、上巳の拜禮お請の爲、足利將軍直義公、建長寺にお成有ければ、昵近の大小名、追々込合我一に、肩で風切乘物の、戸ざゝさぬ御代の式日に、門前市をなしにけり、詞「ヤア片寄れ〳〵、今日は足利武將直義公、此建長寺へお成、我々主人も上巳のお禮を此所で相勤る急ぎの參勤、早々通せ〳〵。そりや此方も同じ事、大手先なれば格式有れ共、此所は先勝、そこ退け〳〵。イヤ先勝なれば此方から通る、邪魔ひろぐな〳〵。イヽヤならぬ、此方が先じや〳〵。イヤ我々が、イヤ此方と、互に角め立別れ、いつ果べきとは見へざりけり、かゝる所へ東の方、お先手を振る行列に、紋は五三の桐のとう、役義を高の武藏守、先手の近習聲を掛け、詞「ヤア〳〵片寄ませい〳〵、執事高の武藏守師直公の出仕成ぞ、片寄ませいと大音に、鶴の一聲諸大名、ハッと左右に立別れ、道を開けば、いう〳〵と、御前をさして打通る、跡につゞいて諸侯の面々、列を亂さず去と〳〵と、門内さして三重「入にけり

大書院

されば足利將軍直義公、上巳拜禮の爲として、建長寺の大書院に出給へば、御かたへには執事高武藏守師直、己が權威を立烏帽子、素袍の袖もたぶやかに、伯州の城主鹽冶判官高貞、つゞいて桃井和歌三助安近、其外石堂藥師寺始袖をつらね、皆々拜禮なしにける、師直くはん〳〵と見下し、詞「いづれも今日の拜禮、君にも甚御祝着、ハッと計に一同に、恐れつゝしみ敬ふ中、御簾はさつとおりにける、判官高貞優然と大紋の袖かき合せ、詞「桃井殿、石堂殿、いづれも今日の御祝儀お目出たう存ると、互に祝する其所へ、御上意なりと呼はつて、武藏守師直、志づ〳〵と歩み出、詞「鹽冶判官高貞殿。ハッ〳〵。桃井和歌三助殿。ハッ〳〵。前年極月十五日、勅使饗應司兩人相勤むべきよし、鈞命の通り此度則御下向、麁略なき樣相勤むべき、嚴命なりと述ければ、判官高貞すゝみ出、詞「ハッ〳〵。憚りながら某元より不才なれば、堂上設けの故實式禮、甚以て不案内、兎角貴殿のお差圖を以て、首尾よく役義相勤る樣、和歌三助諸共に、師直公のお引廻し、偏に賴存ると、兩士の願に何さ〳〵、詞「氣遣ひさつしやるな、仕くぢらそうとどうせうと師直が心任せ、お賴なれば據ない、いかにも御傳授仕らふ、併執事を勤るも、イヤもめんどい物でござる、聊箸のこけた事迄、拙者が詞をかけねば何事も納り申さぬ、扨々迷惑千萬と、高ぶる例の高慢を、柳に請て右馬之丞、詞「イヤもう當時出頭の師直殿、そこ元のお差圖に漏ましては、足利の世は眞くら闇、藥師寺殿、左樣ではござらぬか。イヤもうそれは申すがくだ、師直殿の威勢は夜に增日に增、空飛鳥も落まするとも、何がな取入れ追從口、猶も師直圖に乘て、詞「左樣でござらふ、先頃拙者鶴が岡へ社參仕り、乘物より出ます所、鳩が七八十羽、鶴めが凡十四五羽、忽ばた〳〵と落ましたを、近習共が持歸り、其夜打寄て、芹燒にして賞翫致したと、人もなげ成廣言に、桃井鹽冶石堂も、靭れて暫し詞なし、次の間より茶道一人、執事の前に兩手をつき、詞「ハッ師直公へ申上ます、諸大名の奥方宿坊へ御入、いかゞ仕ませふな。ヱ、又勅使に見せる和歌の添削か、ハテ面倒な、ヤ是はきたり、各々方の奥方もお出で有ふ、ハ、、、、、麁忽申た。イヤ〳〵師直公、どふで判官などが愚妻、貴殿の御添削でなければお勅使へは差上られませぬ。イヤ〳〵判官殿、こなたの奥方かほよ殿は、聞及んだ歌人、器量もお歌も無と存ずれば、師直どうもこうも、イヤサ師直萬事繁多で寸暇を得ず、後刻よい時分に此方から差圖致さふ。左樣なれば此判官始、いづれもは此所を退參、只幾重に師直殿、明日の義を。ハテよくでざる、魚心あれば水心有、イヤサ此義は申さず共御承知でござらふ、ハ、、、、、と欲惡無道、盛の花も時あれば、散るとは白髮の師直に、互に式臺諸大名、表をさして三重「出て行

櫻の馬場

櫻は花に顯はるゝ、建長寺の櫻の馬場、一目ちもとに咲揃ひ、散も始ぬ風色は、絶景いはん方もなし、鹽冶が家來早野勘平、當世風のやさ男、のつしのし目の麻上下、家來に持す臺の物、走づ〳〵と出來り、詞「ナニコリヤ角助、執事方へ差上る其一品、南の宿坊に御入有れば、御前へ其品を、早く〳〵と追立やり、詞「誠に主人判官樣は、御大切な役目、それ故師直に取入事は取入たが、サテこちらが難題、おかるには咄して置たが、もう來そうな物じやがと、待人よりも待るゝ身の、きどくぼうしに後帶、携へ持し文箱より、逢た見たさにちよこ〳〵走り、思はず見合す顏と顏、詞「そこに居やしやんすは勘平樣。ヲヽおかる、よう來てたもつた。サイナァ、定て待兼て居やしやんせうと、心はせいても女の足。ヲヽそうで有ろ〳〵、そうしておかる、頼んで置た今の事は。サァとつくりと此文箱に、認めて持て來たはいな、隨分奥樣の御手に似る樣と思へ共、根が拙い悪筆故、それにまだ奥樣は、彼師直に添削の短冊、詞「自が手で書も穢らはしい、そなた代筆に認めてたもとの御意、新古今の古歌とおつしやつた通り書ましたが、それに其文大事有まいかなァ、詞「ヲヽ、大事ない〳〵、短尺の歌も、此返事もそなたの手、あつちは知ぬ、やつぱりかほよ樣じやといふて悦ぶはいの、何も角もわがみを奥樣に仕立るおれが魂

膽、まだ咄したい事も有、どこぞへ連立て行たい物、詞「ヲヽ、それ〳〵宿坊の供部屋でと、手を引合ふて若い同士、伴ひ行んとする所へ、詞「勘平殿〳〵と、呼立出る鷺坂伴内、ちやつと飛退、詞「是は〳〵伴内樣、只今御宿坊へ參る折から、陪臣の此勘平、高家の師直樣にお目見へ致し、お詞を下されし段、誠に有難い仕合。ヲヽ、サ〳〵、そう思ふが身の冥加、神佛を拜まんより、おらが主人を拜むがよいはさ、堅ふ見へても物和らかな主人師直、お頼なされた、かほよ殿の色よい返事はどうでござるな。イヤモお氣遣ひなされまするな、拙者が爲には、御主人のかほよ樣なれ共、師直公よりのお頼、取持致さいで何と致しませう、殊に此度、お勅使御下向に付饗應司の役目を蒙る鹽冶判官、何かのお差圖、立ふと伏ふと師直公次第なれば、此度の役義を、兎角首尾よう、其かはりかほよ御前の色よい返事は拙者が胸。ハテ扨てそれは身共が呑込、見ぬ戀にあこがれし主人師直、貴殿の働にて戀が叶ふ御滿悦、判官殿の首尾は上首尾〳〵、氣遣ひ召れな早野氏と、言つゝおかるが形そぶり、見る目も忽からくり的、細目に成て、詞「イヤナニ勘平殿、アノ女は何者でござるな。イヤあの女はかほよ御前の召遣ひ、おかると申て大發才者。ナニおかるとな、おかる、かる〳〵〳〵しうは申されな、ハテ扨おかるで有たよなァハヽヽヽヽ。是は〳〵、テモ氣の輕い伴内殿、則かほよ樣よりのお返事を持て參りし者、是をお前へお渡しと、文箱渡せば受取て、詞「イヤもう〳〵是を主人に見せたらば、腰打扱て一向や

くたいでござらふ、イヤ勘平殿、ちと密々にお頼申たい事がござるが、何と聞得て下されふか。ハァ私にお頼とは。ナニ物でござる、拙者生れ付て、近がつゑでござるから、アノおかるを何が只今ちよと見初るといふや、例の持病がつゝはつて、どうもかうもかうもどうも成申さぬが、迚ものお世話次手、身共にアヽ、おかるを取持て下さるまいかと、藪から突出す傍若無人、勘平ほうど行詰り、詞「そりや早、貴殿のお頼ならば、ハテ扨。コレサ〳〵武士が手を下るはいよ。成程々々、行か行ぬか知ね共、マアいふて見ませう、暫くそつちへ控へてござれ。ハア畏まつて候。ア、扨おかる、もつけな事が出來て來たはいの。もつけな事とはへ。サアあの伴内がわがみに惚て、おれに取持てくれいといふはいの。アノ侍がかへ。ヲイノウ。ヲヽきたな、あたうるさいと以ての外、受のわるいと此方は志らず、詞「どふか〳〵、コリヤ勘公、首尾はよいか〳〵。ハテ扨せはしない、よいやら悪いやらまだ言掛りじや、爰へ來ると悪い〳〵ずつとそつちへ寄た〳〵、大分工合はよいぞ。ヤよいか、ヲット合點しめこの兎、詞「時におかる、あいこが事はマアほつて置て、今の事はいよ〳〵そうしてたもらねばならぬぞや。そりやもうお前のお頼故、どんな事でもするけれど、かほよ様には下地から惚てゐるあの師直、かはりに成て直にあふたら、いやらしい事をせうかと。詞「ハテ其時はよいかげん、口先で釣ておきや、何をするも此度、御主人のお役目、どうぞ首尾よふ。サアそりや心得て居るはいな、其か

はり言替した事勘平様、必違へて下さんすなへ。何の違よふ、侍冥理、未來迄も。女夫に成て下さんすか。ならいでどうせう。ヲヽ嬉しと、比翼の約束ひつたりと、羽根打かはす其の風情、見よりこなたはむつくりしやつきり、歇踏足付鷺坂伴内、是さ〳〵も裏に入る乙聲、勘平はつとそしらぬ顔、詞「伴内殿御用かな。イヤモ御用所か、今のは何だ。今のとは。ソレ必變つて下さんすな、何の替らふ、ヲヽ嬉しは、ありや何だ。エヽアノ嬉しでござりますかへ、イヤありや斯でござります、あなたの様な立派な、うるさい。ヤ。可愛らしい、フン老ぐむさい。ヤ。男のよいお侍が、私に惚て下さんしたに違ひはないかへ、ヲヽ違ひはない、ヲヽ嬉しと、思はず知ず○○たのでござります。エヽとつともうどうじやゝら、どぎ〳〵〳〵と、身共にくどいてくれるか、お身がくどくか、譯が知ぬ。知ぬ筈。どうして〳〵。サアいやと言ふてゐる。ヤア。あんまり男がよふ過る、あの様なよい男を持と、修羅の種じや、いやじやと言ふてゐる。エそないにもないがなア。イヤコレ伴内殿、此相談は出來まい、よしにしたが宜い。イヤ〳〵よしにしては詰らぬ〳〵、アノおかるさへ得心して呉れば、此方ハ隨分承知、たとへて申さば唐の楊貴妃、日本の小町などが、文玉章を送らうが、又は宮守の黒焼をふりかけふが、此方は石部金吉金兜、外の女に目もやらぬ、コリヤ取持てくれ、頼む〳〵。サア一躰ねそめはお前に惚てゐるけれど、有様はそう忙しなふ言ふては耻かしがる、サア其耻かしいと云は、あんまり

お前が男がよい故、ナ此内に、ちやつと何所へなと、早う〳〵と勘平が、まらす場合をこなたには、一所に行ふと招くやら、わるい〳〵と双方が、思はず知らず伴内が、天窓をぴつしやり詞「アイタ〳〵〳〵、コリヤ何で打擲する。サア、是は其樣に腹立る事はない、アノ爰な粹め〳〵。テモ諸侍のあたまを。サア色事仕といふものは、それではいかぬ、色事仕といふものは、常住そらいめに合たり、又はあたまを擲かれたり、既にもつておふさ徳兵衛、ソレ又はおはつ徳兵衛、其中でも色事仕の親玉となるお前も、おかるに惚てゐるは。勿論々々。あいつも又お前に惚てゐるは。勿論々々。所に急にいくと、負惜みいふて否といふ。勿論々々。そこを腹を立ずにたゝかれても、くらはされても、ぢつと辛防さへすれば此戀は叶ふ。成程、只今貴殿のおまめしにより、此驚伴悟りひらけたり、何でも戀さへ叶へば、どの樣な事でも辛抱するは、する〳〵〳〵、またふて〳〵、根つから葉つから、どもこも成ぬよ、サア〳〵其氣なら、もう氣遣ひなしぢや、直にくどいた〳〵。ヲツトよし〳〵、よしあし粽菖蒲刀やあやめ草、詞「コレコレおかるの君、どうじやいやい〳〵、コレ〳〵〳〵、どふぞ靡いてくれの鐘ハ、、、、、、詞「エ、傍へよらしやんすな、いやじや〳〵とびつしや〳〵、詞「サア〳〵辛防する〳〵、何ぼう擲かれても、だんない〳〵、大事ないと、又抱付を突とばし、勘平の手を取て、サアござんせと引はれば、伴内は振ちがへ、勘平が手を取て、めつたくたらに双方へ、引つり引ばる其の内に、

詞「伴内樣〳〵、師直樣の急御用、伴内樣〳〵、是はまたり伴内樣、サア〳〵早う〳〵とせり立られ、詞「サア〳〵〳〵行はいやい〳〵、エ、、よい事には寸善尺魔、御前のお召は大かたに、此返事のことで有う、コレサ勘平おかるが事をと、言ふを言せず奴ども、引立〳〵入れけり、跡打見やりハ、、、、、、詞「いかいたわけも有物じや、まんまと首尾ようやり付た、是からがソレ、今の事。サア其事は合點なれど、何角の咄しも有によつて、ちよつと〳〵と手を取ば、詞「ハテ扨はづんだ、マア待ちやいの。何言んすやら、メレよい事には寸善尺魔、邪魔のない内、サア早う、是非に〳〵と引立られ、下地はすきなり御意はよし、打連れてこそ三重「急ぎ行

奥方揃

いざ折て、人に見せなん櫻ばな、實に治れる君が代や、建長寺の庭の面、盛り爭ふ花の顔、諸侯の奥方女房達、銘々櫻の折枝に、結び付たる三十一文字、手爾葉も嘸と知れたり、仁木の後室漣御前、すがりと見へぬ品容、詞「ノウいづれも樣、今日は彌生の節句、おめでたう存じますと、いふにかほよは會釋して、詞「誠にけふは上巳の壽、我君樣は此建長寺へお成、我々をお召遊ばしたは、例年の通り都より御勅使樣の御下向にて、諸大名の奥方より、和歌を詠じて指上るが格式、則執事たる高の師直樣、御添削遊ばすとの事、ナア申し彌生樣。成程々々、及ばずな

から我々も、櫻によそへし此一首、お笑ひ草でござりませう、ホ、、、。アノマア彌生樣のお つしやる事はいの、此關の戸は猶以て、夫は堅い石堂殿、ほんに野に住む蛙より、遙劣りし口 號み、お耻しう存じます、詞「夫に付て此度お勅使樣饗應は、鹽冶樣と桃井樣と承はりました が、左樣でござりますかへ。さればいな、夫判官太切なお役目故、どうぞ首尾よう相勤ます樣 と、祈らぬ神もござりませぬ。詞「ほんにかほよ樣の仰の通り、太切なお役目なれば、相濟迄案 じるは、此彌生も同じ事、御推もじ下さりませと、女同士は上々でも、馴々しげに見へにけり、 詞「ヲ、お二人樣お道理でござります、が萬事に物馴てござる判官樣桃井樣、麁略な事もござり ませぬ。是は〳〵糸萩樣、御深切なお詞、併あなたはまだ殿御をお設けなされぬ故、ホンニ 〳〵皆物がたい顔をして、油斷のならぬが殿御の常、イヤ申彌生樣、桃井樣は色好みと承はり ましたが、必御油斷遊ばすなへ。ヲ、かほよ樣のおつしやる通り、ほんにコリヤよい氣の付所、 私が夫は登城より館が氣遣ひ、兎角目のとゞかぬは湯殿の内、詞「申關の戸樣、あなたは湯殿の 御政道はどうなされますへ。サレバイナ、そこをぬからぬ政道が肝心、湯殿の床をたよ〳〵と、 ゆるぐ樣に張せて置、鈴や風鈴太皷鐘、下家につらりと釣して置、互に〇〇〇〇〇〇〇、〇〇 〇〇〇〇〇、ちりゝんぐはらりん、どんちやん〳〵、いかな男も是にはげんなり、氣遣ひなし に夫の政道、皆樣どうでござりますと、いへば皆々打笑ひ、互に夫の棚おろし、上々方の千話

文も、別にかはらぬ樣まいる、笑ひ綻ぶ其所へ侍一、人罷出、詞「師直公只今御添削有んとの事、 大書院へお通りと、言捨跡へ引返せば、關の戸は打笑ひ、詞「ホンニ師直樣は音に聞へた性わる 男、必御油斷なされなへ、ソリヤ心得ておりまする、サア〳〵お出と一同に、繕ふ衣紋の色深 き、書院をさしてぞ

添削

見ぬ唐土の果迄も、詠る和歌の添削は、うはの空吹武藏守、伴内が取次せし、艶文に餘念詠め 入る、詞「此文は最前伴内より取次したかほよの返事、高の君樣參る、渡りを待つ八ツ橋より、 ムウ渡りを待八ツ橋とは、杜若かほよ花といふ事か、ハテ憎からぬやさしいやつと、封押切、 詞「ナニ〳〵つれ〳〵、の長雨に增る涙川とや、淺き渡りとは思ひながら、いな船の否には有ぬ 心なれど、元より神の木の身にしあれば、只人目を憚りの關にさへられ、御返事も心ならずう つり〳〵、只此上はゆる〳〵しき御げんもじの程、まつを時雨の染ばやと、うつし心の我な がら、はぢ紅葉の色をまし候、來世も同じ契り違はぬ事を祈り〳〵し、ヱ、可愛やつ〳〵、 ゆる〳〵しき御げんもじの程待とは、添い〳〵、ムウ君に逢瀨のかけ橋はと、あたりの文臺き りと詠め、夫と心に打點頭、詞「諸大名の奥方、いづれも是へ通らつしやれ、ハアと答へる一同に、

媚き渡る長廊下、襠捌きさとやかに、打連通る二人連、夫と見るより手をつかへ、詞「師直様には御添削、御苦勞に存じますと、會釋こぼるゝ袂より、巾紗をそつと兩人が、さし置心の付届け、師直は笑を含み、詞「ムウ石堂の奥方、細川の妹御兩人の詠歌はと、文臺ゑり分手に取て、詞「鶯の初音いかにと谷の戸を、明れば同じ君が代の春、此歌は關の戸殿。お耻しう存じます。イヤ適歌でござる、出來ました〳〵と、譽るは忽ち巾紗の威德、詞「扨、次は糸萩殿、春秋をひとつに見ばや武藏野に、都の花をうつし植てき。初心にござりますれば宜しう。イヤ〳〵、歌は中々面白けれ共、腰のてには、今少し、斯なされ、春秋を、ひとつに見ばやを迚もなら、春秋の眺はけふぞと聯ぬればよいではないか、都て歌といふ物は、詠人の心につるれば、一入可愛らしい讀方と、顔つれ〴〵と打守り、詞「ちと夜分には身が舘へござれ、歌の詠かた心入を敎へてまんぜう、ナ、承知なれば兩人共、下られよ、ハツト計に慇懃に、二人は其座を立て行、詞「細川の妹めは、中々よい頃合に成たはいと、女子さへ見りや誰にても、移らふ月の武藏守、見やる向ふへまと〳〵と、二人打連打通る、詞「ムウ此兩人は。桃井が奥彌生。仁木の後室、連、麁末ながらと銘々に、言ぬ色なる扇箱、さし置品を、一々に、手づからしびいて、にた〳〵笑ひ、詞「コリヤいづれも、いかふ御念が入ました、受納致す〳〵、時に各方のお歌、先刻より拜見致した、が中々お二人共秀才〳〵、添削には及ばぬ、此儘上覽扨いづれもは古へのの、伊勢小

町もお二人には及ぶまいと、めつたやたらに譽るも一物、二人は顔を見合して、目引袖引立歸る、實に杜若花あやめ、似たりや似たり紫の、かほよの前と夕ばへし、襠姿まとやかに、遙こなたに畏まる、武藏守は惚々と、詞「こなたは鹽冶の奥方かほよ殿よな。ハイ左様でございます。ヲ、誠に日外、鎌倉山の星月夜に、ちよつと見初たお姿、よく〳〵見ればハテあでやか、近ふ〳〵と餘念なく、見とれ見たる猫なで聲、こなたは猶もまとやかに、詞「そんならあなたが師直様でござりますかいな。ヲ、いかにも師直じや〳〵、カノ高の君じや。左様なればお目もじは初めて、此度夫判官殿、太切の役目と申し、自が及ばぬ和歌の口號、てにはさへ分ちなき腰折歌の御添削、嘸おむつかしうござりませう、兎角宜しう。コレサ〳〵頼むとはそりや何事、及ばぬ望と有様は、大いに心配を致したに、早速の御返し、イヤモ師直手に取るより、心もとけ〳〵、どうもたまらぬ〳〵、コレナ渡りを待つ八ツ橋めと、引寄る程うるさゝに、飛退裾をまつかと取り、濡ぬ先こそ露をも厭へ、そもじの心とくる上は、遠慮には及ばぬ、打とけ召れ、但しは文の返事が啌か。ア、申めつそうな、ふつゝかな自に、誰有ふ師直様、勿躰ない思召、冥加の程が恐ろしい。啌々〳〵、やつぱり判官が可愛からふがの。何のマア、心はとふから人こそ見へぬ、秋は來にけりでござります、ヲ、耻しと袖覆ふ、師直は現ぬかして、詞「ユ、有がたい心の底意を聞からは、二世も三世も執事冥理、そもじの仰はなよ竹〳〵。そんなら判官様の御

役目、いかにも首尾よふ勤さす。自が歌の事も。添削には及ばぬてや。ヱ、お嬉しうござります。嬉しいが實ならちよつと〳〵。ヱ、めつそうな人目の關。ハテ大事ない〳〵、身が詞を出さぬ内は誰有つて、此所へ通る事は罷成らぬと、聞て恟り勘平に、其場をくろめる約束とは、ぐはらりと違ふ此樣子、いかにお主の爲なれば迎あだうるさい、詞「ヤ、何がうるさい身が事か。イヤ〳〵判官樣が、サ世の譬にも言通り、遠いが花の香、とことはに、お傍に居ればつい隘阻が。いか樣、誠の戀は儘ならず、人目の關に隔られ。サア適のあふ瀬に互のうさ。語るが樂しみサア寐よふ。アサ夫は。サア。サア。サアと慕ひ寄程、身をちゞめ、うるさゝ悲しさ詮方なさ、ふり放さふか、イヤ〳〵〳〵、今荒立ては夫の頼み、無足となればお主の仇と、思ひ惱むは海棠の、雨を含みし其容義、詞「身共はどうもたまらぬと、たはいに成て無理無躰押へる、執事の横顆ぴまやり、詞「ヱ、いかに執事なれば迎、アタみだらなお嗜みなされいと、耻をめられてもこなたは夢中、拜む〳〵と○のはし、無理に引ばる煩惱を、振放して漸〳〵に、おかるは遁れ出て行、跡に師直忙然と、歸るかほよが後かげ、やゝ見送りしが吐息をつぎ、詞「ム、今のかほよが躰たらく、此狀とはきつい相違、ハテ心得ぬとくり返し、文臺の短冊取上打詠め、詞「さなきだに、重きが上の小夜衣、我がつまならぬ夫なかさねそ、コリヤコレ新古今の歌、此古歌を添削と、我に見せるかほよが心底、此文の文章とは餘程の相違なれ共、此文と短冊の、手跡は紛は

ぬ双方同筆、ハテ心得ぬと文臺に、詠め入たる武藏守、ム、かほよの前は帥の辨の娘にて大内に仕へ、歌道は兼好に習ふと聞く、夫に此手跡の拙さ、今の詞の引放しは下賤の女、ム、ヱ、聞へた、扨はかほよに身共が執心、勘平に頼みし故、此度判官が役目首尾よく勤さゝんと、面さし似たる女をつき付、此師直をコリヤ謀つたよな、ヱ、奇怪や、うぬと、きつと見やりし師直が、心にかゝる邪□の雲、さやけき月も曇り行、浮世のさまぞ是非もなき

鎌倉御所

四ツの海靜にして、草木もなびく鎌倉御所、此度勅使の下向によつて、定るお能の式禮も、脇能過てお樂屋に、皷のまらべ太皷の音、廣間は馳走の役人方、馳違ふたる足利の、威勢は類ひなかりけり、烏帽子大紋花やかに、打連通る諸大名、こなたよりは執事師直、權柄面に顯はして、藥師寺諸共出來り、詞「石堂殿いづれも今日は繁多故、御挨拶も申さぬ、最早お勅使もお入有て、お能も半でござると執事の挨拶、石堂引取、詞「是は〳〵高の殿には、今日は別して御苦勞、殊にお勅使にも、いつもより早いお入にて、混雜と承りましたが、事馴てござるそこ元なれば。イヤ〳〵左樣でもござらぬ、今朝は拙者も、餘程廢忙いたしたと、喞し半へお次より、立出る桃井和歌三助、執事の前に禮義を正し、詞「先刻仰付られましたる御對顏の間、洒掃申付

ましてござりまする。ヲヽ、出かしやつた、ァヽ、同じ饗應の役目でも笑止千萬、こなた計まんとをさつしやる。左樣でござる、群侯の面々さへ登城召れたに、肝心の饗應司が遲滯とは。イヤ〳〵藥師寺捨て置つしやれい、どう言ふ家筋か鹽冶殿は、役目麁畧で扨々氣の毒、其くせ常から智惠有顔、ぞたい我儘が過申すと、人喰馬にも相口同士、事がな有れと言立る、斯共まらず判官高定、執事の差圖の長上下、裾踏ましたきしづ〳〵と、廣間に登城有けるが、滿座を見るより大いに驚き、詞「是は高の殿、石堂殿と、見廻し〳〵、詞「是は桃井殿、同じ役目と申ながら、貴殿にはお早いお出仕、只今登城の砌り、お舘へ使者を立ましたれば、早御登城と承はつたが、貴殿は刻限より、お早く御出仕なされしかと、時計の仕かけが違ふとは、知ずうろ〳〵うろ付判官、氣の毒ながら執事の前、控へる桃井石堂見兼て、詞「判官殿お裝束の相違、是さ〳〵、召換召されと控ゆる袂、詞「誠に相役いづれもは大紋、某は。御用意がござるか、早く〳〵と石堂に、氣を付られて走り入る、師直はそしらぬ顔、詞「藥師寺殿、判官殿が出仕召れたじやござらぬか。左樣〳〵、只今是へ參られたが、何やら周章て立れしが、どれへござつたやら、どれにござる判官殿、判官殿と呼立られ、ハッ〳〵と計袴の紐、結びながらに取敢ず、出來る鹽冶をぞろりと見やり、詞「判官殿、こなた今日の饗應司、何と心得てござる。ハッ〳〵。イヤサ、今日は大切な式と、昨日も申渡したに、何故登城も延引召る、最早お勅使もお入有て、お能も二

番目の中入でござるぞや、ヲヽ、相役桃の井殿は、未明より登城召れてござるに、何じやとなた、畫狐追出した樣に、今頃にのう〳〵と頬の皮厚く、よく出仕召つたの。イヤ憚りながら今日の饗應太切なればこそ、何角お尋申度、夜前貴殿の舘へ趣きし所、御對面下されず、又々今朝。コレサ〳〵、こなたが尋ねにござらふかと、師直待合してをる隙はござらぬ、執事たる身は御用繁多故、夜の中から登城致して居る、こなたも太切の役目、夜一夜くらいは寐ずにいても根勤むべきを、ヲヽ、何か大かた、彼かほよ殿の懷へ計這入てござる故、朝寐が過る、ちと嗜まつしやれ〳〵。イヤ〳〵全く以て某。ァヽコレ〳〵鹽冶殿、貴殿遲參の越度、申譯には及ばぬ、お詫なされと石堂が、おもしに成たる此塲の押へ、無念ながらも判官は、眞平御免と平伏す、詞「御覽なされ師直殿、判官殿が不調法をかへりみて、ァレあの如くお詫申さるれば御了簡なされ、何角のお差圖を。イヤ〳〵石堂殿、某迚も意趣意恨はござらぬ、畢竟今の樣に申すも、役目を太切に存ずるから、此上は何角差圖を仕らふと、うはべはとけし此塲の縺、諸侯の胸も廣書院、奥は謠の聲高く、謠「爰こそ花の臺に、泉式部が臥戸よ迚、方丈の室に入と見へし夢は覺にけり、見し夢はさめて失にけり、詞「アリヤもふ東北の切、次能は春日龍神、祝言終らば饗應の配膳、鹽冶殿、桃井殿、サヽヽ、用意さつしやれ、いづれもは詰所にお控へなされ。然らば師直公。いづれも後刻と双方へ、別れてこそは三重入にけり、奥はお能も納れば、早配膳の刻

隈と、桃井和歌三助安近、儀式の小四方目八分に捧げ出、御殿の前後見廻し〳〵、詞「最早配膳の刻限、相役鹽冶殿はいづれにござる、判官殿〳〵、鹽冶殿と高らかに呼はる聲、ハッ〳〵と判官高定、次の間より走り出、詞「コレハ〳〵桃井殿、最早饗應の刻限でござるかな。左樣でござる祝言も、納れば配膳の刻限、シテ御用意はな。デモ某へは執事より何の差圖もなく、殊に見ますれば貴殿のお料理は七五三、ムウ同じ配膳の役目たる此方へは、三汁十一菜、膳部も懸盤、ハテ心得ぬと判官が、さし當つたる當惑の、折しも奥より追々に、詞「饗應司はいづれにござる、配膳の刻限成が、何故に遲參致す、早く〳〵と呼立る、詞「ハッ〳〵夫へ指上まする、判官殿コリヤどう致さう、サア其義はとうろ付中、諸侯隨へ藥師寺立出、詞「桃井殿、師直公のお待兼、配膳早ふ、サア只今指上ますれど、判官殿がと、氣兼を言せず、詞「ア、コレ〳〵鹽冶殿に構はず、貴殿は早く。じやと申して。ハテ刻限が延引致す、早ふ〳〵と口々に、言れて是非なく桃の井は、心を殘して打通る、詞「ア、コレ〳〵和歌三殿、暫く〳〵と、行んとするを藥師寺突退、判官殿こなたも饗應司、早く御膳を持しやれ。サア其の用意はござれど膳部の相違、桃井殿へは七五三、身共へは三汁十一菜と、師直殿のお指圖、イヤ左樣なお指圖某は致さぬと、禦あらはに出立る、權威を功に緩怠類、夫と見るよりせき立判官、貴殿よりお指圖下されし式禮は、何も角も相違致して。何が相違、どふ致した。サア今日登城の刻限と申し、大紋を長々

と仰られし故、先刻も、イヤ夫は格別只今さし上まする御勅使への膳部も。七五三五々三は大概知て有る、かけ盤は下官の膳部、夫も知ずに饗應使勤さつしやるか。イヤ左樣なれ共、貴殿が。何と申した、手前は職分、格式の通りお指圖申したが、此師直が誤りか、聞誤つたはこなたの空氣からだは、ア、コリヤ何か、木具の用意はないか、金銀拂庭ならなぜ饗應司を辭退召れぬ、イヤサ貧乏なら貧乏の樣に、なぜ辭退さつしやられぬ、いづれも見さつしやれ、判官殿は貧乏故、纔な饗應の品が調はぬそうにござる、ム、ハ、、、、、ハテ氣の毒な事ではござらぬかい。左樣でござる、纔五萬三千石の身上で、常から贅が過る故、得ては尾が出て、鹽からいあこ耻をかゝれます。コリヤ藥師寺の仰御尤の義でござる、イヤ又何ぼう家の規摸じやといふて、分にも合ぬ役目を勤るは、下世話に言ふ人參呑で首くゝると申物でござる。左樣々々、どうで仕舞は生て居られますまい、首くゝるか水に溺るゝか、イヤ貧乏大名、大方火にくばらるゝでがなでござらふ、ハ、、、、と銘々に、師直組の大小名、ひやうまづいてぞ嘲哢す、判官無念さ奇怪さ、扨は我に耶辱を與へ、科に落さん工みかと、重る無念を、イヤ〳〵〳〵、今此事を誤つては、家の大事身の大事と、逆立胸を押鎭め、詞「イヤナニいづれも御覽の通り、師直公の御機嫌を損じ、前後を忘ずる判官が一生懸命、爰の所を御勘辨下され、師直殿へお取成をコレサいづれも師直殿へお取なしを、是申し藥師寺殿、山名殿一學殿、師直殿へ宜しうお取な

しを、是さ〳〵師直公、最早饗應配膳の役目はかける、定て御前の首尾はさん〴〵、此度の役義仕損ずると、末代鹽冶の家の瑕瑾、またも頼みは下城の節、どう致してよいやら、何卒お指圖頼上る、コレ武士は互いづれも〳〵、傍輩の好み是申師直殿、何卒御下城式法のお指圖を、師直公、いづれも、コレ申〳〵〳〵と這廻り、心をつくし身を盡す、あはれは涙の捨小船、沖に漂ふごとくなり、師直心地よげに打見やり、詞「何といづれも見さつしやれ、此師直が息がかゝらぬと最期、尻もつ立てとこぼへまする、よい樣じやござらぬか、ム、ハ、、、、、と出傍題、判官腹にすへ兼、詞「ム、コリヤ判官に耻辱をあたへ、科に落さんといふ。ヲ、落さいでも鹽冶判官科が有る。ヤ、何と。お勅使我君をなぜ調伏した。ナニ調伏とは、證據は則此短冊、昨日添削といふてかほよが指上し此歌、ちらせばや見ぬ唐土の鳥も見ず、桐の葉落せ秋の夜の月、御代をなみせし一首の心、何と調伏ではあるまいか。イヤ〳〵奥かほよが差上しは新古今の中の、狹夜衣の此短冊か。いかにも。ムウスリヤ夫婦相對で、此師直に耻辱を與へし此古歌か。イヤサ其義は。さなきだに重きが上の小夜衣、我夫ならぬつまな重ねそ、と師直がうつ惚たを知て耻しめる此古歌、夫に得知れぬ女めをあてがひ、かほよ抔と似つこらしう落し穴へはめ、此度の役目を首尾よふ勤た上、此師直を馬鹿じやといふて笑ふのか。イヤ〳〵是は師直公のお詞とも覺へませぬ、何の女を便りに大切の役目、相勤ふと存ずる所存は曾以て。知ぬ物が此歌

をどうして知た。イヤサ其義は。但し此師直をうつけにするか。サア夫は。サア。サア。サア〳〵どうじやと、權威を功にきめ付られ、ムウと計さし俯き、暫し答へもなかりしが、ヤ、有て胸を定め、詞「委細の義は存ぜぬ共、もし又妻のかほよに御執心とござらば、某急度申付、譬武士の面目を失ひ、後指をさゝるゝと言ても、貴殿のお心に入る樣に。いやでござる、こなたの喰ひ餘りのかほよ望にない、いやじや、人我につらければ我又人につらし、判官何と思ひ知たか、無念なか、口惜いか、此師直に見事立つくか、コリヤ師直は四海の政務を預り、足利の執事なるぞ、無念ならばどうぞして見るかヨ、張合のないべら坊めだはい。スリヤ理を非に曲て詞を盡しても。いやじや。どう有つても。くどい〳〵、ガ又いやじやと言たら我どうする。ヲ、斯すると扳討に、眞向へ切付る眉間の大疵、是はと沈む身のかはし、烏帽子の頭二ツに切れ、又切かゝるを扳つくゝりつ逃廻る折も折、此躰見るより右馬之丞、走出で押とゞめ、詞「コレ判官殿、御短慮と抱きとむる、其隙に師直は、舘をさしてこけつ轉びつ逃行ば、儕師直眞二ツと、行をとどむる其中に、舘も俄に騷ぎ出し、家中の諸武士大名小名、押へて刀もぎ取るやら、師直を介抱やら、上を下へと三重「返しけり、營中騷ぐ喧嘩の樣子、追々聞付家來の面々、主人の安否を知せの往來、櫛の齒を挽く如くなり、斯と聞より早野勘平、宙を飛で逸散に、走付たる大下馬先、渦卷諸士を呼留め、詞「喧嘩の相人は誰成ぞと、問へば口々知た顔、詞「ヲ、サ

相人は鹽冶判官殿、師直公に意趣ふくみ、眞二ッにやられたげな、我々は主人の樣子、奥樣へ注進と、言捨てこそ急ぎ行、聞より勘平狂氣の如く、詞「スリヤおかるをかほよ御前に仕立、謀つたるを根にもつて、主人に耻辱を與へし故、此騷動に及びしよな、ヱ、心元なき主人の身の上、いかゝと見やる御門の口、驚坂伴内家來引連出來り、詞「ヤァ勘平の大馬鹿野郎、儕が主人鹽冶判官、叶ひもせぬほて轉業、御前を騷がす不届と、網乘物にてたつた今、見るも哀なお預け者、身が御主人は疵養生、何と高家の威勢を見たか、ァノまじ〳〵とした頬はいの、笑へ〳〵と主從が、一度にどつと高笑ひ、勘平は臓わたも、煮る計に雜言無禮、モウ赦されぬと扳放す、ソリヤ遁すなと家來の銘々、扳連〳〵切てかゝる、心得多勢を相人にして、切立〳〵追行後、透を窺ひ驚坂伴内、切込刀を早足の勘平、ひるまず去らず切結ぶ、斯と遠目に馬上の石堂、ひらりとおり立伴内を、一當うんと反橋なり、詞「ヤァあなたは石堂樣。シィかゝる主人の一大事、一時も早く本國へしらせの早打。ハァ、重々の御心配添なし、然らば仰に隨ひ是より直樣打立ん、幸の御馬借用と、ひらりと打乘、詞「石堂樣。早くお行きやれ。ハァ、飛がごとくに三重

大星屋敷

ゆるぐ共、よもや動がじ要石、其大石の底深き、光りを包む大星氏、鎌倉の騷動聞へしより、城内へ相詰て、日夜の評議留主居には、女房お石嫁小涙、お家の落着松風の、そよと計の音信も、胸打騷ぐ計なり、當家の譜代お婢の、おりんも流石物案じ、詞「申奥樣、今度鎌倉で殿樣の無分別、師直とやらいふ意地悪を、ましやつふりおいはしなされた故、城中はもいや〳〵、今日も評定々々と、親旦那のお城詰、一躰マァ此評定は、いつ埒が明ますへと、尋ねにお石はまとやかに、詞「さればいのう、心々になるといふ、何を言ても多い諸士、束ねをなさる由良之介殿、詞も出さず見合してござるには、深い御了簡、けふは大方決着して、殉死になるか籠城か、いづれ果敢ない身の納り、願ふて列に加はらんと、登城した悴力彌、今年は明て十六なれど、近年殿樣御病身にて御入部なき故、御目見へもまだ等閑の部屋住ながら、生るも死るも一統と、覺悟しての今日の出席、遺は武士の胤ぞやと、我子ながらも立派さを、譽るは親の習ひかや、小涙は始終聞よりも、案じ重ねて申母樣、詞「殉死とやらに成ますと、お爺樣も力彌樣も、最う御下城はなされぬかと、娘心のはかなくも、またふも道理尤と、思ふ程猶胸の戸に、洩る涙を笑ひに紛らし、詞「ホ、、、、、何のマァあられもない、生は難し死は安し、生先有る悴力彌、譬死ふと言た迚、おとゝ樣がよもやかし、お殺しなされてよい物か、そなたと力彌の言號は、勿躰なくも殿樣より、お差圖有ての事なれど、詞「まだ兩方共若い同士、先へ延すを相談で、本

藏殿にもらひ受、マア此石が娘分、是非此春は婚禮と、思ふに任せぬ此騷動、是非もない事ながら、祝言さして初孫の、顔見にやならぬ大事の力彌、コレ〳〵〳〵めつたに死してよい物かと、納得させる母親の、詞の尾に付婢のりん、詞「イヤ申御寮人樣、何ぼう祝言なされても、若旦那は御器量よし、御油斷なさると人が取る、若外へ出なはるなら、どつこ迄も付て御出なされませへ。ア　コレおりん、そんなさがない事は言ぬ物、悋氣は女の嗜み事、詞「ヲヽあなたとした事が、そんな大氣な事が有物でござりますかいなア、何でも男の癖として、女夫に成た其當座は、珍らしい故べた〳〵と、夜も晝も引付て、そなたは○じやの、○○のと、めつたむせうに譽そやし、扨秋風が吹や否、夫から跡は尻くらい觀音樣をかこ付て、逢に北やら南やら、行く先々を喰さがし、灰汁の垂粕後々は、捨られるのは女の常、詞「必ず油斷なさんなと、悋氣の腰をお仕着せの、下女の仇口身のうさも、暫しは紛るゝ其折から、評議の席より追かへされ、心ならずも大星力彌、常に變りし其顔色、内入わるきに驚く母、詞「ヤレ力彌、早下城仕やつたか、由良之助殿も一所にか、何やら濟ぬお顔持、譯を聞ぬば何ぼうでも、落付ませぬと右左、取卷中にむんずと座し、詞「ヱヽ、口惜や母樣、此力彌計は評定の席に叶はぬと、九太夫めがさゝへこさへ、終には席をはぶかれ、すご〳〵と立歸りましたはいのう、ヤア〳〵〳〵、夫はどふして何として、どふした譯と母小浪、尋ねに力彌は無念の吐息、詞「鎌倉より知せの早打、來る

日よりも今日迄、日毎にかはる諸士の評定、きのふは殉死けふは又、籠城せんと己々、心々の評定も、始の程は四五百人、義を鐵石と思ひの外、一日々々減る人數、只今纔に四五十人、扨不甲斐なき旁と、咄しを聞たび腕こそばく、部屋住ながら此力彌、押て登城し一列に加はり度由願ひしかど、斧九太夫是をさへぎり、部屋住の大星力彌、殿へお目見へ濟ざる者、大切な評議の場所、叶はぬならぬと無得心、ヱヽ、そんならアノ九太夫が、ヱヽ、胴欲な憎らしい、叶はぬ願ひも理を付て、赦すが人の上に立、情といふ字も辨へぬ、心は鬼か蛇かいのふ、詞「ヲヽ、嫁女、其恨は道理〳〵、あれ程迄に思ひ詰、願ふた物を可愛そふに、恩愛の道も辨へぬ、アノ九太夫づらの憎さ〳〵。イヤ〳〵母樣、私を思召ての其お怒り、有難ふはござりますれど、あつちは道理、此方は部屋住の身の悲しさは、是非もないやら親人迄、歸れよと有る御仰、すで〳〵列座を追立られ、歸りましたる口惜さ、御推量下されいと、拳を握り物語れば、尤じや〳〵〳〵、道理〳〵と母小浪、倶に涙の村時雨、晴間も更になき所へ、股立りゝしく近習の辨吾、城中の評議の一決、御注進と馳歸れば、力彌つゝと進み寄り、詞「シテ〳〵評議の一決は、何と〳〵と詰かくれば、ハッ、さん候今日午の上刻迄に、漸極まる評定は、鎌倉の上使藥師寺殿、皆甲冑にて弓矢を對し、あたかも軍の備へにて向はれしを憤ふり、詞「矢種玉藥のつゞかんたけ、目ざましく籠城し、討死せんと一決を、聞より未練の斧九太夫、城内拔出荷物をまとめ、

いづく共なく逃行しを、親旦那にはとくより御存じ、詞「九太夫逃去其跡にて、御本心明されしは、上使に敵對弓引は、奥方始御家門方、お祟り有んを忌憚り、只順道に亡君の、御供申し殉腹と、事極つたる御評定、承はるより御注進と、言捨表へ引返す、跡に三人顔見合せ、言ず語らず、定まりし殉死の一決親人に、最前お別れ申せしが、最早一世の別れかと、小涙が思ひも一同に、せきくる涙を押包み、隱すは二人が母への氣兼、お石も同じ胸の中、見せじ聞せじ知せじと、心々に一人づゝ、泣にチクリ「立こそ哀なり、跡に力彌は忙然と、手を拱ひて獨言、詞「今城中の樣子を聞ば、彌殉死と極る評定、某迚も列に加はり、亡君の御供なすべきに、九太夫の情ならず、我をはぶきし悔しさ悲しさ、親人下城有ならば、仕樣模樣も有べきに、既に殉死と定まれば、最早叶はぬ此身の願ひ、十六年の春秋を、鍛ひ込だる武士道も、詮なきけふの身の不運、口惜や殘念やと、悲歎の涙に暮けるが、思案極めて、詞「ヲヽ、夫よ、今此列をはぶかれて、父を先立のめ〳〵と、此世に生て何面目、さは言へ我死したりと聞給はゞ、母人の御歎き、冥途の迷ひ是一ッ、又二ッには妻小涙、さこそ歎かん不便さよ、詞「去ながら、言號の名計にて、祝言せぬが彼が仕合せ、我事を思ひ切、他家へ緣付してくれよと書殘さふか、アイヤ〳〵〳〵、大星力彌は最期の今、女に心引されしと、亡跡迄の物笑ひ、いかゞはせんととつ置つ、武道と孝と妹と脊の、三ッの巷に踏迷ひ、心たゆたふ後の方、わつと計に泣出す小涙、はつと驚き口

に手を當て、詞「コレ〳〵〳〵聲が高い〳〵、いつの間に此所へ、ムウ扨は樣子を聞たるよな。聞いで是があられふか、夫の切腹する事を、女房が知いで濟かいな、言號の名計りで、まだ祝言はせぬけれど、とうから女夫と思ふて居るに、詞「盃せぬが仕合せとは、そりや餘まり胴欲な、まさかの時に臨んでは、命を捨るが侍の、いかに習ひと言ながら、殿御一人を月花と、思ふて憂を凌ぐのは、私計か及びない、竹の園生の御身でも、たとへ月もる宿に住む、賤しい賤の女でも、末の末迄添負せ、無事で達者で兒產で、ひけらかそうと思ふのを、皆樂しみに暮す物、祝言さへもせぬ内に、忌はしい切腹とは、いやじやゝ〳〵わしや否じや、いや〳〵〳〵〳〵と一節に、戀を立ぬく娘氣は、眞實見へて可愛らし、さしもの力彌も今更に、無理の道理に詮方なく、もてあましてぞゐる折から、詞「親旦那のお歸りと、言次聲に眉をひそめ、詞「ムウ一旦殉死と定まる上、御下城とは心得ず、又もや評議かはりしやらん、何にもせよ樣子を聞たる上の事と、はやる心を押ちづめ、母にも斯と知せやり、かた唾を呑で待居たる、花は櫻木武士の、散際惜み大星が、歸る心に一物有る、親の心を子は知ず、席に着より進み寄、詞「先刻の御評定、殉死と一決定まる由、今又御下城なされしは、いかなる子細と母諸共、案じ危ぶみ問かくる、詞「イヤ〳〵殉死などとは思ひも寄ず。とは又なぜな。サレバサ、此度の騷動によつて、城受取の上使は藥師寺、目ざましく引受て、城を枕に討死せんと、血氣にはやる若殿原、我が分別は左に有

ず、銘々知行の高に應じ、御用金を配分し、命全ふ時節を待んと、殉死をとゞめ罷歸つた。ムウ殉死をおとゞめなされしとは我夫、そりや御比興でござりませう。イヤモ義を見てせざるは勇なしと言たは、五百年も昔の事、妻子を安樂に德を取のが當世と、日比に似合ぬ父が臆病、正しく諸士の物笑ひと、思へば無念さ奇怪さ、親子は顔を見合して、涙と共に傍に詰寄、詞「由良之助殿、ヱ、お前はなア、此度殿の御生害、御無念にはござりませぬか、過分の知行を給はりし、お家の御恩は廣大無邊、かゝる時節に命を惜み、金配分とはさもしい比興な、一家中の思はく我子の手前、コレ耻しうは思さぬかいのう。ヲ、母人よくおつしやつた、死すべき時に死せざれば、死にも增る耻多し、臆病者よ腰抜よと、世の人口も返り見ず、妻子をお厭ひ遊ばさるゝか、妻子珍寶及王位、菩提の障りと御佛も、正しく示し置給ふ、我々不便と思し召さば、妻子を捨て忠義をば、一圖にお立下さるが、誠のお慈悲お情ぞや、聞分てたべ親人と、心をつくし身を盡し、誠をつくし諫めける、返答なければ思案を極め、物をも言ず驅出す力彌、母は押留め、詞「伝相かへてコリヤどこへ。イヤサ親人は臆病でも、此力彌は武士の性根、顯はしお目にかけまするとゞめる母を振拂ひ、又かけ出すを呼留め、詞「コリヤ待て力彌、ハア親人おとゞめなされしはと、尋ねに大星ずんど立、有合矢筒引提出、詞「躬此一筋の矢折て見よ、ムウと其儘手に取て、何の苦もなくぽつきと折れば、又引摑んでさし付るを、力に任せて撓れ共、

詞「折るか、イヤサ折まいがな、ハツトけしとむ力彌が首筋、ぐつと引付引寄るを、是はと縋る兩人を、拂ひ退け〳〵、扇を持て丁々々、父の機嫌を計り兼、猶豫力彌はつたと睨み、詞「浪藉者、其方生れ付て人に勝れし力を賴み、鎌倉へ馳行師直を覘ふとも、只今折し其一筋の矢の如く、終には命を失はん、が又此通り一致になさば、たとへ大力の其方たり共、容易く折得ぬ千筋の此矢、心はいか程はやる共、切て放すはあぶない〳〵。スリヤ親人の御本心は、金配分して身を貯ふ、親に付は孝の道、アレあの如く松が枝に、巣くひし蜂がよき手本、我子を朝暮育るに、似我々々と鳴は則ち我に似よとの言敎へ、蜂の巣は佛の蓮、千草萬木花散て、後に實るが天の氣候、花は因なり實は果なり、因果を一時に見するが蓮、此心をとつくりと思案を致せ、解樣次第親子の緣切、未來永々勘當するが、親子の心が一致せば、本心を明して吳ふ、ハツ兩人來やれと大星は、お石小涙を引連て、まづ〳〵奥へ入日陰、うつろひ渡る蜂の巣を、力彌きつと打ながめ、詞「唐土の周茂叔は、泥中に育ながら、清らかに咲く蓮を愛す、又日の本の僧正遍照、此心を讀だる歌は、蓮葉のにごりに染ぬ心もて、何かは露を玉とあざむく、夫は蓮、是は蜂の巣、ハテ、どうがなと取つ置つ、千々に思案の其折から、何國よりかは飛來る山蜂、あなたこなたと庭の面、花に戯れ露を吸い、飛かふ内に巣の中より、數多の小蜂顯れ出、山蜂目がけ飛付風情、こなたは怒りの劒を逆立、いどむはいかにと見やる中、終に山蜂くい立られ、

即座に落て死でけり、詞「花を愛する山蜂を、數の小蜂が害せしは、時に取て高の師直、主人を害せし非道に似たりと、梢に目を付け打見やる、時しもさつと山風に、連て飛來るあまたの山蜂、巣を八方より取圍めば、數の小蜂は寄付じと、互に爭ふ羽の響き、雷のひゞくが如くにて、ひるまず チクリ「去ずくい合しが、小蜂殘らず地に落れば、山蜂勇みの羽たゝきし、行方しらず飛失たり、始終に詠め入たる力彌、詞「ハア奇代の珍事を見る事かな、都て蜂は己が友を集る故、蜂起るを蜂起といふ、甚だ虫にて禮儀有て、尾なきを則ち王と尊み、若是を殺す者有れば、必ず仇を報ふと聞、ム、親人の蜂の巣を以て示されしは、眞ッ此如く群をなし、敵師直討んが爲、去に依て千筋の矢に、心を込し御教訓、ハ、、、、、有がたや忝なやと、天を拜し地を拜し、悅び勇む奥の間より、詞「躬出かした、今こそ心符合の上は、父が心底を明しくれんと、ちづく立て奥庭の、障子殘らず明渡せば、後の山手に有々と、夕日に輝く金城に、足利の簇指物、翻飜として見へ渡れば、力彌はつと驚き、詞「鹽冶家の城中にアノ簇印は、ホ、ウ不審は尤、今日殉死の評議をとゞめ、明渡したる御本城、役柄なれ共啌氣の藥師寺、受取渡しの法式ちらず、皆甲冑にて入城し、アレあの如く搆ゆるは、我々敵對なさんかと、臆病風に恐るゝ要害、手もなく城を明渡し、一先お國を立退は、由良之助が深き所存、さは去ながら御先祖代々我々も、晝夜詰たる御本城、詞「明渡すのみ計に有らず、奥方始一家中、お下の町人百姓迄、皆ちりぢ

りと成行も、是皆師直が吾頭故、泉下の主人の御怒り、思へば無念さ奇怪さ、五臟六腑にしみ渡り、四十四の骨々も、碎くる思ひを堪忍び、追付本望師直が首、引さげて亡君の、御墓に手向奉らば、夕邊の恨も朝の霜と、消るは兼て覺悟の此身、詞「躬、親人、はかなき者は武士の、身の成行と計にて、親子手に手を取かはし、身を震はして無念泣、立聞身にもたまり兼、お石小涙も諸共に、其儘がばと泣倒れ、詞「そう言ふあなたのお心とは、ちらで女のはしたない、悲しいはかない此成行、可愛そうに嫁小涙、玉椿の八千代迄と、思ふ中をば引分て、まだ祝言さへせぬ先から、後家にするとはいぢらしい、詞「アノ嗅さんの勿躰ない、見ぬ唐土にも例ない、忠臣義士をば親に持、力彌樣を夫と呼ぶ、此身の果報は中々に、女御更衣に備はるより、百倍增る身の手柄、連添妹脊を樂しみに、願ふは女の常なれど、松の千とせも朝顔の、花一時も限り有、浮世と思ひ諦めりや、ゑにしを染ぬ白糸の、昔がましでござんす、と口は立派に心には、せめて一夜の添ぶしを、願ふ色目を押包み、胸に涙をせきとめる、心を汲で大星夫婦、力彌も不便さいぢらしさ、こらへし涙一同に、わつと計に取亂す、涙々は播磨灘、汐の滿くる如くなり、折から庭へ原千崎、矢間竹森大鷲なんど、廣庭狹しと込入々々、詞「我々殉死の所存なれ共、大星殿のおとゞめ故、すで〳〵開城仕り、只今お國を立退我々、につくきは上使のやつ原、城門より口々に、扶持放されの鹽冶浪人、脚腰立ぬ侍と、悪口雜言聞捨がたく、堪忍袋の破れ

かぶれ、是より城へ押かけて、藥師寺が鎌ひげ首、引提るがせめての腹いせ、サ、、、、大星殿も、用意々々とせり立たり、大星制して、詞「ヤレ旁、上使の無禮は師直が兼ての工み、我々に涙藉をさせ、越度とし、鹽冶の諸士の根を斷計畧、深々と乘込ば麁忽々々、大功は細瑾を返り見ず、退參せん、お國の境を放るゝ名殘、我も同伴仕らん、小涙は則石諸共、某が鼻丹後の國へ直樣立越、親子が生死の便を聞、躬は今宵止りて、母小涙に一生の名殘。イヤ〳〵我も御供申し、生るも死るも父諸共、ハテコリヤ跡の片付諸事萬事、女計で覺束ない、何もかも心殘のない樣に、汝は跡より發足し、落付所は都山科、心得たるかと立上り、詞「今宵一夜は娘御寮へ、鼻が情の置土産、感ずる諸士も一同に、出行跡を伏拜む、嬉しさ悲しさ取まぜて、御本望をと言たさも、憚るお石がうき思ひ、見送る名殘、行く名殘、あはれを跡に三重「とゞめけり

郊外

實に千金の春宵も、心の闇路大星に、續て出來る原千崎、竹森なんど一同に、郊外さして立出る、空に有々散亂たる、星影佐と由良之助、分野に當る樞星の、正しく光を失ふは、國亡ぶべき天の告、へ、、、、是非もなき世の有樣と、見やるあなたに大手の御門、朧々に亡君の在が如き本城も、今を限りと思ふにぞ、名殘惜げに打見やれば、城内よりは手を叩き、どつと一同に

打笑ふ、あれ聞れよと若侍、はやるを制して由良之助、詞「先君の御憤り、晴さんと思ふ所存はないか、ハッと一度に立出しが、思へば無念とお城の方、振返り〳〵はつたと白眼て

川狩

此處より三十年以前の時候

君はつれなや胡麻から焚て、眷戸のかけがねはづして待と、忍ぶあふ瀬をだまされた、ヲ、だまされた、諷ふ聲々面白く、田のあぜ廻る早苗歌、川原に遊ぶいたいけの、盛り爭ふ角額、唐子がつそうきよぼ〳〵髪、顏はまだらの惡あがき、銘々高股腕まくり、紗手網手拭ひ引張て、額口よりたら〳〵と、流るゝ汗も眞黑な、顏にいろはのゑやうだんは、言ねど志れし寺子屋の、八ッあがりとぞ知れたり、詞「申民之丞樣、ちと魚が取ましたかへ。イエ〳〵今日は一向獵が利ませぬ、申アノ平吉殿は此位取れましたと、手桶見すれば差覗き、詞「ホンニ餘程取ました、ニちらも精出して取ませうと、挨拶がらも武家育、田畑仕まふて在所嗅、一ッ所に寄集り、詞「何と皆樣見やしやんせ、今年は苗が大ぶさで、一ふさがいつもの十ふさ程の格好、是が實つたらすさまじい事でござんしよのう。ヲ、それ〳〵、又今年も豐年のまるしが見へる、マア何と此樣な目出たい事はないじやないかの、近い頃迄は新田足利とやらの戰ひで、此伯州も田畠を馬にかけ散され、大きな迷惑で有たが、軍がやんで打つゝく豐年、侍衆は弓を袋、鬪がしいは職

人商人、大工百姓、ヲヽソレイノ、太平の印には、御家中の子供衆が、手習ひの戻りには、魚をすくふての樂しみ、ヲヽ夫〳〵、御家老の宮内樣の息子殿迄が、殺生をさつしやるはアレ〳〵皆樣、同じ樣に足輕の子の平吉迄が來てゐるはいの、コレ平吉、かゝ樣が見やんしたら、又呵られうぞや、イヤ餘所事じやない私等が身の上、餘まり ゑやうだんして居たら、親父が又呵ろぞや、ヲヽ夫いの、サア〳〵ごんせと鳴子嗅、ぐわら〳〵チクリ「打つれ歸りける、跡は子供が打群て、小川の魚を一同に、追廻し〳〵、罪も報ひも後の世も、忘れ果たる面白さ、屏風襖に畫たる、其氣色とや言ふやらん、中にかさ取民之丞、詞「コリヤとんと魚がとれぬ、どうしたら取ふぞと、退屈顔を氣の毒と、平吉傍へ差寄て、詞「申民之丞樣、私が魚のとれる傳授を致しませうかな。ナニ魚がとれる仕樣が有るとは。取ます〳〵。そんなら此方も寺入せう、敎へて下され平吉殿と、皆一同に賴入、詞「左樣ならば敎へませうと、あたり見廻し堤より、打捨有し簑と笠、兩手に持て傍に寄、詞「ヤア爰に居る六人が兩方へ引別れ、其内三人は、コレ此簑を持て川下へ廻り、水をせき留なされませと、其身は中へと一人立、詞「民之丞樣を始お前がた二人は、川上へ廻つて、コレ此菅笠で、水を川下へおしなされと、殘る二人に菅笠持せ、詞「ソレ其如くかまへを付、水を殘らず川上より、押切時は一時に、水は流れて魚は皆、簑へ姿をかくれ家と、逃込所を手取早く、詞「引上ますると辨舌も、流れよどまぬ川狩の、智惠は計らぬ唐國の、彼温

公が才智にも、おさ〳〵劣らぬ有生なり、皆々はつと平吉が、才智の程を感ずれば、民之丞はむつと顔、詞「其樣な淺はかな事で、魚が取ふか馬鹿〳〵しいと、詞の尾に付定九郎、詞「左樣でござる、我々はやはり此儘此沙手で、俱々手傳ひ取ませうと、子供心の意地惡ふ、當こすられて平吉は、耳にもかけず聞流し、殘りを相手にモウよい〳〵、詞「簑を上てふるふたと、指圖に合點と立寄て、ふるふ簑よりばら〳〵〳〵、小魚亂れて散亂す、ヤアコリヤ魚がたんと取た、〳〵と悅ぶ子供、平吉手桶に拾ひ入、水に放せば小魚共、頭をふつて悅ぶ風情、民之丞はむやくしさ、つゝと寄て平吉が、持たる桶に手をかければ、振ほどいてコリヤ何となされます、詞「ヲヽ、何共せぬ、此魚は民之丞が貰ふたと、又引取をはらひ退、詞「そりやお前御無理といふ物。ヲヽ、無理いふたら大事か、おりや無理言ても大事ない、大星宮内が悴じやと、稚心に役柄を、鼻にかけるぞ憎躰なり、傍からそやす源四郎、詞「そふじや〳〵、御家老の御子息樣と、足輕の子の平吉とは、お月樣とすつぽん程違ふはやい。イヤ〳〵何ぼう御家老の御子息樣でも、めつたに無理は言さぬ〳〵。ヤア推參な、手向ひするか、モウ了簡がと民之丞、有合卦算追取て、平吉が額際、打ば流るゝ血汐に惝り、詞「コリヤ又餘まり。餘まりとは何があんまり、横着者めと又ふり上るを寺子共、とむるを留らぬ民之丞、詞「イヤ惣次郎殿、喜三郎殿、お退なされと二人を突退、コリヤ平吉、詞「一腰に手を掛たが、見事此民之丞を切かよ、コリヤ面白い、サ

ァ切れふかい、サァ切れ〳〵と意地わるく、弱みへ付込雜言過言、何と答へも雉子と鷹、及ばぬ祿ぞ是非もなき、民之丞圖に乘て、詞「サァ相手にならぬか、おれが恐いか、是を拔て切いやい、よふ切ぬか、腰拔めと、脇指引取見て惚り、詞「ヤァコリヤ竹光じや、〳〵〳〵、源四郎殿、定九郎殿、見さつしやれ、平吉が腰の物は竹光でござる、ムヽヽヽハヽヽヽヽ、此樣な竹べらでは、此民之丞は切にくいと、刀へし折打付られ、口惜涙たもち兼、モウ是迄と立かゝる、是は短氣と留る子供、喧嘩々々ととり〳〵わめく其所へ、主を迎ひの奴共、追々かけ付抱き留、コリヤマァ何を言上り、どうした事の此喧嘩と、なだめすかせば民之丞、詞「喧嘩の相手は其平吉、此竹光でおれを切ると言おつたと、聞て奴が太いやつの、詞「コリヤやい、御家老樣の御子息樣、足輕風情の子忰が及ぶ物か、ヱヽけちぶといわつぱめと、はつしと蹴られ髮亂れ、形も崩をれ口惜と、思へど詮方泣計、ちり打はらひ奴共、詞「サヽヽヽヽお怪我がない内早ふお歸り。左樣ならば民之丞樣。ヲヽ、定九郎殿、源四郎殿、皆の衆、明日御意得ませうと、別れてこそは立歸る、早告渡る入相の、虫の聲々數そへり、無慙やな平吉は、跡打詠め〳〵、無念と見やる額より、血汐流れてほと走る、傍に有合ふいろはの手本、額に押當折たる刀、胸に納る稚氣も、無念の涙血ばしりて、勢ひ込でかけ行向ふへ、田畑仕まふて母親が、互に行合親子の緣、詞「平吉じやないか、ヤァかゝ樣かと、いふより其儘まがみ付、わつと計に泣居たる、合點行ねば母

親が、詞「平吉、そなたは何でなきやる、何が悲しいどうしてと、額の疵口見て惚り、詞「ヤヽヤヤヽそなたの此額の疵は、ヱヽコリヤ何で此樣に疵が付た、どふした事と尋られ、詞「サァ此疵は、誰が付たぞ。サァ此疵は、誰が付た。サァ此疵はこけました。何と。今爰でこけましたはいのふ。夫見やの、わしが常々川原へ遊におじやんなと言聞すに、此マァ疵の付やうはいの、モ大躰の疵じやない、大方石で打ちやつたか、シタがまだ轉やつたので其樣に思はぬが、ひよつとマァ是が人にやなど擲かれて付た疵なら、モウ〳〵〳〵夫こそ大躰腹の立事じやない、町人の子と違い、一合取ても武士のはし、其儘では置れぬと、思はぬ詞もひつしりと、言當られて子心に、思へば無念さ奇怪さ、身をふるはせて泣居たる、心ぞ思ひやられたり、譯を知ねば母親は、詞「ヤァ〳〵そなたはきつふなるやるぞや、ヱヽ聞へた、疵痛を仕やる故、コリヤふるひが來たのじや、ヱヽコレ何ぞ藥が飲したい、コリヤマァどうせう〳〵と、子には目のない母親が、なでつさすりつ介抱に、親の惠みを子心に、思ひ知たる其所へ、所用有て大星宮内、當國の一家老と、言ねどおるき其勿躰、家來召連行過る、夫と見るより袂をひかへ、詞「憚かりながら、大星宮内樣とお見かけ申し、足輕與一兵衞が女房、ちと御無心がございます、只今悴平吉が、此所で大きな怪我を致しました、何とぞ御無心ながら御藥がございませうならば、御所望がいたしたふございますと、餘義なき賴みに立留まり、詞「ナニ寺岡が悴、怪我したとな、夫は

氣の毒、シテ疵は痛むか、どうじや〳〵、疵口より風など引ば、一大事、隨分氣を付け介抱仕やれと、腰より印籠取出し、詞「コリヤ氣付なれど疵に付ても苦しうないと、渡せば取て押いただき、詞「是はマア〳〵冥加ない、サア〳〵平吉、御家老大星宮内様が、御藥をやらふとおつしやる程に、ソレ有難ふ戴きやと、印籠渡せばきつと詠め、詞「フウ何と言しやる、此藥は御家老の大星宮内様から、ヱ、此藥は否じやはいと、印籠はつたと打付て、母様ぢざれと理無やりに、親の手を引かけ出せば、心ならずも母親は、倶に引れて走り行、跡打見やり眉に皺、印籠取上ふしぎ顔、詞「御家老の大星様、藥は入らぬとつゝといたは、ハレきつい肝癪持では有ると、邊見廻し落ちる手本、詞「ムゝドレコリヤ是、家中の子供の手本、ヱゝ扨は八ッあがりのじやうだんに、此所で悪あがき致した上での口論と相見へ、血の付し此手本。イヤ申、是に若旦那様の御定紋の付ました、卦算がござりますと、差出すを手に取上、詞「ムウ怜が卦算、ソレまだ取散し有る草紙共、殘らず集めて持歸れ、御家老の大星様、此藥は否じやはやい、ムウ、血汐の付し悴が卦算、此手本、ハテナア、と胸に納めし假名手本、家來に持たせ大星は、屋鋪をさして三重「歸りける

宮内屋鋪

物がたき、武家の家風も高塀造り、伯州鹽冶の國家老、大星宮内が一構へ、掃除の役はお仕着せの、奴が切水竹箒、一ッに集る塵芥、肩も背骨もすた〳〵息、走り近付平吉が、夫と見るより、詞「イヤコレ角助殿、民之丞様はまだお目が覺ぬかの。ホウコリヤ平吉か、何の用で早く出て來た、若旦那はまだお休み。ムゝそんならお居間は。ヲゝサ若旦那のござる所は、此門をば這入、右手をずつと行と廻り椽が有るは、ヱイカ、其椽の向ふに、大きな手水鉢が有所が則お居間、ヱゝ左様ならばと門内へ、這入を押留、詞「アゝコリヤ〳〵、若旦那には今やなどお目の覺る事じやない、後に緩りと出て來いと、いへば平吉詞を工み、詞「夫でも昨日お約束申て、譬寐て居ても大事ない、起してくれとのお頼み故。ナンダ早う起せとお頼みなされたか。サア明日は早々朝習ひに行とおつしやつた故。ムゝ夫で早々出掛て來たか、ソレハそうよ、シテ親仁は内に居るかノ〳〵。アイ〳〵。イヤ〳〵内には居るまい、與一兵衛は御城の御番、まだ戻りはせまいがな。アイ〳〵。ヱゝ此奴何を言てもアイ〳〵と、帽子まばゆき風情なり、詞「何とあんどうじ町ぐらいには聞へるかいやい、ハゝゝゝ、コリヤ平吉、我も咄せ〳〵、マア下に居よと留られて、心はせけど這入もならず、夫とむかふを指さして、詞「アレあれ〳〵、アレ何方やら知ぬが、向ふからお歴々の御出じやと、聞て角助立上り、詞「何お歴々のお出とは、どれ〳〵何處にとうろ〳〵眼、仕濟したりと平吉は、そつとはづして門内へ、忍び込其知ざる故、詞「コ

リヤ〳〵〳〵平吉よ〳〵、ヱヽどなたも是へお出はないはい、つがもない咥をつき、恟りをさせおつた、コリヤ平吉〳〵、ヤ此奴どこへか行おつた、髭くいそらした角助を、深い所へやりおつたと、呟き〳〵門内さして三重入にける、居眠れる、物かは夢を驚かす、庭木のかげを平吉が、拔足さし足椽側へ、そつと這寄はい上り、覗けば内にすや〳〵鼾、仕すましたりと腰刀、鯉口ちめし一討と、行んとせしが立どまり、園「イヤ〳〵一ト間へ切入、若仕損じては猶口惜い、民之丞が目がさめたら、手水遣ふは知た事、そこを窺ひ只一討、そうじや〳〵と獨言、念力通す手水鉢、蔭に忍んで窺ひゐる、奥より出るいたいけ盛り、民之丞が弟小三郎、障子細目にさし覗き、園「兄様はまだお休なされてござる、こちや手習ひを志ませうと、机にかゝる其所へ、乳母諸共に妙共、園「コレハ〳〵小三郎様、お早う御稽古なされますな、そうしてアノ清書をなされてかへ。ヲヽ夕部清書は志て置ました、今朝兄様が寺屋へお出なさるゝ時、お師匠様へ持て行て貰はふと思ふて居ます。ヲヽ夫はお早う出來ました、兄御様のおひなる間に、マア清書を奥へいておかゝ様に。イヤ〳〵そこへ行て見ませうと一間より、聲打かけのつま戸由良、襖押明志づ〳〵と、我子の傍に押直る、小三郎はおとなしく、園「母様此清書御覽じて下さりませと、指出す清書手に取上、園「ヲヽ見事によう出來ました、是から隨分と精を出して、民之丞に追拔やう、仕て見やいのと勵まする、詞にほつと笑顔して、園「アイ〳〵夫は嬉しうござる、追

付兄様に勝様に、隨分稽古しませうと、詞に遠慮へつらはぬ、稚心を引取乳母、園「是はマア和子様とした事が、そりやマア何をおつしやります、兄御様は奥様の御子、あなたは御妾腹の事なれば、兄御様とは義理ある中、其義理の有る兄御様に、追拔との御一言、いかに稚い御身じや迚、物事に氣を付て、おつしやりませと乳た、譬妾腹にもせよ、胤はかはらぬ夫のみばへ、兄弟の子供ちを、何の麁略に思ひませう、生れ付て小三郎は、手習ひ學文武藝を好み、どうぞ教へて下さりませと、不斷爺御をせがんで居やる、又兄民之丞は、兎角武術は好まずに、小鳥狩の川狩のと、只殺生を好みやつて、夫故父御のお呵を、聞度毎に此母が、教へが悪いと言るゝつらさ、折々母が言聞す教訓も、遊びかふじてうはの空、夫故今年十五になれど、まだ殿様にお目見へもまをさせぬは、あの様な氣儘者、園「若ひよつと御前で仕落でも有ては、此大星の家の疵と、父御もおつれなされず、正眞の指がきたない迚、切ても捨られぬ血筋の因果、民之丞も小三郎も、兩の手と同じ事、わしが心に隔てる心はない程に、小三郎は元より乳母もそなた衆も、必隔てたもんなやと、物ごし詞柔かに、遉に武家の奥ゆかし、折から小庭へどいやつ〳〵、銘々草紙たづさへて、家中の子供が一連に、園「民之丞様、寺屋へお出なされぬかへ、と音なう聲にヲヽ是は仕たり、友達衆が誘ひに見へたのに、民之丞はまだ起やらぬ、コレ〳〵乳母、そなた衆もいて起しておじやと、詞に皆々打

連立、一間へこそは入にけり、跡に戸由良は笑顔して、詞「お前方待遠に有うが、民之丞が朝飯支度の間、欲の間に待合して下されと、言に皆々左様なら、暫く次にて待ませうと、打連てこそ入にけり、よき侍は風流も、好む燕居の一間なる、爐前にかゝり獨服に、閑を樂しむ主の宮内、茶事より外は餘念なし、折から奥庭さはがしく、はつし〳〵と打合ふ音、何事やらんと打見やる、庭先植込用捨なく、切込平吉民之丞、請太刀ながらヤレ待て平吉、何故の此狼藉、ヤア何故とは比興であらふ、昨日川原の悪口雑言、忘れはせまいと烈しくも、付入る平吉詮方なく、火花をちらす二人の有様、見るより宮内は扨こそと、打合ふ物音知せじと、有合ふ皷追取て、譟「其船軍今は早〳〵、闇浮にかへる生死の、海山一同に震動して、船よりは鬨の聲、思はず來かゝる戸由良が恟り、庭には互に打合ふ刃音、見るにひあいさ危なさに、かけ寄る女房を支ゆる宮内、我子を尋ねて與一兵衛、來かゝる切戸の外面より、猶豫ふ内には切結ぶ、武士の育の直燒刄、付入刀請はづし、弓手の肩先民之丞、切込られてだち〳〵、母は見るより悲しさの、心あせれど詮方涙、ソレ〳〵〳〵油斷仕やんな民之丞、負てくれなも身は叶はず、詞の助太刀あせる母、父は搆はず謠のせめ、船軍のかけ引浮沈とせし程に、春の夜の涙より明て、敵と見へしはむれ居る鷗、鬨の聲と聞えしは、浦風成けり高松の〳〵、朝嵐とぞ成にける、難なく氣がさの平吉は、民之丞をまくり立、馬手の腕を打落す、わつと一聲魂ぎる内、平吉透さず乘かゝり、民之丞覺えたかと、ゑぐりゑぐられ七轉八倒、見る母親は堪りかね、わつと計に伏沈む、勝負を見屆け與一兵衛、つゝと寄て我子を引すへ、繩打かくれば平吉は、につこり笑ふて悪びれぬ、心の程こそ逞しき、跡を慕ふて女房が、我子の姿見るよりも、狂氣の如くかけ込で、詞「ヤイ〳〵〳〵平吉には何科有て、何者が繩かけた、ヤイ〳〵〳〵、申し〳〵〳〵宮内様、平吉は何の科で、アノこちの人も其處にか、平吉を縛らして、何でだまつて居やしやんすぞ、どうした科で此繩目、譯を聞して下さんせ。ヤア女の差出る事はない、すつ込で居おらふと、呵まくられ恨めしげに、詞「コレ與一兵衛殿、こな様はナア、氣が違ひはせぬかいのふ、夕べ詰番でお城へ上らしやんしたによつて、今朝は大方早からふと、夜が明ると其儘逃たら、平吉が寐所に居ぬはいな、ハア情ない、もう悪あがきに行たか、又お前が戻らしやんしたら、もう〳〵〳〵呵らしやんすで有ふ、ちやつと呼で來て置ませうと、そこら近所をうろ〳〵尋る内、誰言共なふ民之丞様と平吉が、此お屋敷で喧嘩〳〵と人の沙汰、聞付るより心ならず、足も地に付事かいな、來て見れば此ざだら、思ひがけない此繩目、様子を問へば呵付、すつ込でけつかろと、いかに男のこうけじや迚、餘まりむごい胴欲じや、詞「そんな事言ず共、斯々いふ科で平吉は、命を取らるゝとたつた一言、私にも得心さしてくれたがよい、譬何ぼの科じや迚、わしも得心せぬ内は、殺さぬ〳〵〳〵と、我子にひしと抱き付、恨みかこつぞ道理なる、詞「ヲヽ、

其恨は尤じや、おれじやといふて肉身の悴、何の縄が掛たからふ、明六ツが鳴と御門を開き、番がはりして戻る道で悴に行逢ふたれば、おれを小影へ呼で、ちと意恨有て民之丞殿を、打果しに參ります、今迄はよう可愛がつて下さつた、是が親子の此世の名殘、かゝ様にも暇乞がしたいけれ共、泣しやるで有ふ、けつく未練が起つては悪い、跡で呵らしやれぬ様、斷言て下されと、言捨にかけ出す、待て〳〵と呼留ても、雲霞と姿は見せず、直に跡を追て御門前迄來て見れど、何の事なくまだ御門はあめて有、こいつはまだ來おらぬそうなと、それから方々捜しても行衛は知ず、又立戻れば此あだら、留ふとは思ふたれど、コレ宮内様は奥様を引留ながら、二人の勝負を御覽の躰、差控へて見屆る内、とふ〳〵民之丞様を仕留おつた、ヲヽ出かしおつたといふに言れぬお家の御家老、大星様の御子息、民之丞様を手にかけた悴、此親が縄かけたはお上へ潔白、無得心な胴慾なといふ其方よりは、縄をかけて渡すおれが心、ハテどの様に有ふと思ひをるぞいやい。道理でござんす〳〵、與市兵衛どの、のう堪忍して下さんせ、詞「コレのう是平吉、今とゝ様の言しやんす通り、其喧嘩の様子を早う言や、其様子に寄てそなたの命、助かる筋の有まい物でもない、又そなたもよく〳〵の事でなければ、アノ民之丞様を打果しも仕やるまい、大方々々あつちが悪かろふ、イヤサわがみが悪かろふ程に、ヤア其様子をとゝ様にも、かゝ様にもいふて聞しや、ヤヽヤヽコレ言て聞してたもいのと、歸らぬ事をくどき泣、平

吉涙の顔を上げ、詞「未練にござるかゝ様、人を殺して助かる筋はござりませぬ、意恨の様子は宮内様へ直々に、申上たふござります、どうぞお願ひ申て下されと、始終を得と我胸に、じつとたもちし健氣の振舞、戸由良は猶も腹立涙、詞「ヱヽ、意恨の様子を直々に、言上せふとは推參な、譬道理が有るにもせよ、大星宮内が總領民之丞が敵、自が手にかくる、覺悟せいとずんと立、長押にかけたる長刀追取、向ふ石突宮内はきつかと、詞「ヤレ待て戸ゆら、何事も皆某が胸に有る控へて居い。是が控へて居られませうぞ、あなたがお留なされまする故、じつとこらへて居ました、お放しなされて下さりませ。ヤサお身も武士の妻でないか、立騒で見苦しい、一家中の上に立、諸事を取さばく大星宮内、いかに我子の敵なれば迚、子細を糺さず取計らひが成ふか。それでもお前。ハテサテ馬鹿な事を、去によつて最前兩人が勝負、コリヤ意趣討と見た故、悴ながらも餘所に見て、物音を皷に紛らし、思ふ儘に勝負をとげさせしは、是全く武道の表、サア平吉、口論に及びし事の子細、此宮内聞屆くれふず、包まず申せ。ハイ、昨日八ツ上りに野川で、昔魚を汕ふておりましたに、民之丞様は魚が取ぬとおつしやつて腹を立て、私が邪魔を致しましたによつて魚が取ぬ、今から此川へ來たら聞ぬと、様々悪口おつしやつて、私が此額を卦算で打割、まだ其上に私が差ておりました一腰を抜て見て、竹光じやといふて手をたゝき、笑はれた時の面目なさ、其跡で竹光もへし折て、私を踏打擲、モウ重々堪忍が成

せぬ故、お屋敷へ忍び込、切かけたのでござりまする。ム、昨日の時宜、先刻奥にて子供等より聞た通に違ひはない、潔白によく言たなァ。民之丞様を殺し、所詮助からぬ私、此上のお情には、どうぞ親與一兵衛に、お咎のござりませぬ様に、私を御存分になされて下さりませと、我子の立派に寺岡夫婦、喰しばつたる忍び泣、宮内つく〳〵平吉が、顔打ながめ、詞「ム、民之丞様を手にかけ、所詮助からぬ私が命、此上のお情には、「親與一兵衛にお咎のない様に、私を御存分になされて下されいとは、年端も行ぬ形をして、ハテよく言た、よい〳〵、身が存分にする、覺悟せよと、いへ共ちつ共憶せぬ平吉、命惜まぬ丈夫の魂、詞「ヤァ誰か有る、民之丞が死骸奥庭へ廻せ、ナニ戸ゆら、悴が敵目の前で一歩様、とくと見分、ナァ平吉、うせふと引立る、ノウ是暫し御待と、とゞむる母親突退刎退、平吉を引立て、奥の一間に入ければ、戸ゆらもつゞいて立て行、母は有にも有れぬ思ひ、奥を目がけて駈行を、首筋取て與一兵衛、コリヤ待て女房、詞「そちが未練を働くと、悴計か此與一兵衛迄が頬が立ぬわい。ざやといふて。ヤァ一合取ても武士の女房、未練なやつと呵られて、三千世界を尋ても、詞「眞一人とない可愛い子に、今が別れの時じや物、未練になうて何とせふ、產落してから九三年、夜の目も寐ずに育上、詞「智惠付程猶可愛さ増し、脊の延るを樂しみに、着せる着物の寸尺が、長う成程こつとらが、末が短ふなる命、壽命の事も思はずに、成人さしておのれやれ、こな様こそ足輕なれ、人にすぐ

れて、道の、立身さして見せうぞと、思ふた事も水の泡、悲しいはかない此成行、いかに武士の習ひじや迚、現在我子が手打に成を、不便な奴とも只一言、いふてもやらぬ無得心、三火か七火か灸さへ、泣てわめいて逃廻る、子供の常に引かへて、親に難義のかゝらぬ様、お願ひ申上ますと、立派にいふた倅が、目にちら〳〵と此胸が、裂るはいのと伏沈めば、ヲ、道理々々と言たさも、こゝが辛抱侍の性根々々と喰しばり、泣ぬ螢の身を焦す、思ひはかなや無慙なり、かゝる歎の奥の方、ユイとかけ聲、響く刀の鍔音に、狂氣の如くあれ〳〵〳〵、我子の最期悲しやと、騒ぐ女房を引すゆる、覺悟の夫も今更に、何と詮方なき折節、あへなき骸を戸板に乘せ、金子の包取添て、近習が舁て持て出、詞「ナニ與一兵衛、手打にしたる平吉が死骸、其儘に遣はす間、取置けと有る主人の御意、早々もつて歸られよと、言捨てこそ入跡に、泣倒れ伏す母親が、死骸にひしと抱付、與一兵衛目をまばたゝき、詞「ハァ、誠に後悔先に立ずとやら、七年跡の疱瘡は、山も上らぬ重い大役、いつそ其時死だらば、今の思ひは有まいと、歎けばお種も諸共に、詞「コレ平吉、こんな事なら昨日野川で逢た時、わがみの其額の疵は、マァどう仕やつたと問ふたらば、アノあの川の端で轉ましたと、隱してたもつた孝行が、今ではけつく恨めしいと、我子の死骸に取付て、見れば見る程平吉ならず、詞「コレこちの人、此死骸見やしやんせ、ナニ死骸がどうした、何としたと立寄て、よく〳〵見れば、詞「ヤァこりや平吉ならぬ民之

丞殿、ヱヽと驚く一間より、詞「ホヽ、其子細、宮内が申聞さんと、障子押明立出る、始にかはる平吉が、上下立派にきづ〳〵と、戸由良が手を引立出れば、顔見て惝り夫婦が仰天、詞「宮内様、そちは平吉、ヤア〳〵まだ生て居てたもつたかいのう。コリヤ〳〵兩人飛相言な、そち達が悴平吉は、身が手にかけて其死骸。ヱヽ。是成は某が悴民之丞、今日只今より養育して、家に繼木を大星が、家名を咲す忠臣の孽。そんなら悴平吉を。コレ〳〵大星宮内が世繼をとらへ、我子とは、必飛相言まいぞ。ヱヽそんならあなたも。ヲヽ得心でなうてなろふか、親に難義のかゝらぬ樣にと、心をすへた平吉が其立派さ、民之丞が不行跡、あまふ育てた私が誤り、武藝馬藝は見向もせぬ、不所存者と思ふても、畸人な子が可愛いと、女は輪廻に迷へ共、平吉と民之丞は、瓦に黃金を替る道理、あの樣な智惠の有る、子を設けたと思へばの、こんな嬉しい事はないと、いそ〳〵勇む奥方に、お種が嬉しさ手を合せ、詞「ヱヽ、奥樣の忝ない、お禮は詞に盡されませぬ。ヲヽ、誰有ふ宮内樣、こつとら風情の悴をば、厭ひもなされずお家の跡目、何たる是は勿躰ない。サイナア申し、お志の有がたやと、手の舞足の踏途なし、奥方は差寄て、詞「イヤ申し、あの子を民之丞と呼まするも、どうやら不所存者の名も否でござりまする、私が心に隔てぬ證據、どうぞ私が名の、戸由良と申まするを形取、名を付ておやりなされて下まりませ。ムウ成程尤の願ひ、其方が戸ゆらの文字を取り、戸ゆら戸ゆ、ゆら由良之丞でも有るまい。イヤ

申し、私を助けてくれまするといふ心で、由良之助とはどうでござりませう。待やれ大星由良之助。ソレ申し、よい名でござりますぞへ。いかにもコリヤよかろう、然らば今日より、大星由良之助義金と改め、鹽冶家二代の忠臣、後年に及び名を萬天に輝かせよと、英士を仕立る宮内が器量、實に栫檀は双葉藏、末頼もしき若者なり、寺岡ハツと頭を下、詞「ハア親に增つた果報者、コリヤ女房、名も改めてお付なされた。サイナ大星由良之助樣とは、ほんに結構なお名でござりまするなと、悦ぶ母親安堵の胸、宮内一間に打向ひ、詞「ヤア〳〵小三郎參れ、ハツと答へて弟小三郎、一間より立出れば、宮内夫婦に打向ひ、ナニ寺岡、汝が一子平吉が替り是成小三郎、妾腹ながらも身が悴、今日より汝に遣はす間、平吉が替りと思ひ、コレ奥、頼もしき寺岡へ、養子に成は彼が仕合、コリヤ最前奥にて申付た通り、とくと心得たか。ハイ、申しとゝ樣かゝ樣、今から可愛がつて下さりませと、心詞もしほらしき、生立見るよりぞく〳〵小踊り、詞「左樣ならば此お子樣を、ホヽ、今日より其方が跡目、則平吉が一字を取て、寺岡平右衛門と改め、成人の後由良之助と心を合せ、武名を上よ。ハツアハヽヽヽ、殘る方なき御情、コレこちの人、平吉はあなたの御世繼、其上に此小三郎樣を、私等夫婦の子にせよとは、ヱヽ有がたうございます。ホヽヲ悴が落着事濟上は、家中の子息皆々是へ、ハツと答へて十松彌吉、惣次郎喜三郎立出れば、詞「ホヽウ其方達も此後は、由良之助と因を結び、若殿のお博役、某が烏

嶺子親、詞「先十松は矢間十太郎と改め、喜三郎は竹森喜多八、惣次郎は原鄕右衛門、彌吉は則千崎彌五郎、いづれも武藝を勵まれよと、以前拾ひし假名手本、さつと廣げていかに方々、詞「此いろはの手本は昨日野川にて、我手に入たる、平吉が無念の血汐そゝぎし手本、コレ、此いろはの四十七、上にならべし頭字に、心を留てよつく見よ、詞「いの字の形は兜の鍬形、一は則萬物の始、と定めて是仁なり、智は萬代の寶にて、勇氣を兼て三德兼備、要害堅固に城を守り、世を治むるを基とすれば縱へ、亂世近きに有共、矢種兵粮貯へ積み、安堵をまうけて、英氣を養ひ、此七文字の文字によつて、四十七騎に英士をすぐり、お家の大事にならんず時、適大功成すべしと、宮内が志めしに寺子共、皆一統に勇立、詞「由良之助殿を頭と定め、我々心を一致にして、若殿を守育、義を金鐵に戰場の、御馬先にて高名し、名を萬天に輝かさん、皆々何と、進立れば、宮内勇の聲高く、詞「ホ、、、、、末頼もしき若者共、御家の柱石忠臣無二、鹽冶の家は萬々歲と、勇みに勇む悅びに、憂事交る有爲轉變、あへなき骸を舁上る、寺岡夫婦が手向の露、義理よ情よ母きゞの、有とは見へて隔なき、四十七字のいろは假名、双葉の末の末の世に、忠臣藏の礎と、其名を代々に響かせり

祇園の曙

風が寐耳へふれて行、芝居の太皷、朝稽古、彈三味線の祇園町、由良大盡の行先を、尋廻りて寺岡が、勞れて暫し一力の、用水桶を邯鄲の、夢驚かす朝嵐、ふつと目覺しあたりを詠め、詞「扨は今のは夢で有たか、　ハテナア、爰は所も祇、夕から大星樣を探し勞れて思はずも、此所に睡間に、まざ〳〵見しは本國伯州、三十年の昔、由良之助樣と此平右衛門が身の成立、梅の木に櫻をつげば、やつぱり櫻の盛りを見せる、心からこそ身は賤しけれ、ハテ耻しい物だナア

此所壹葉脫漏あり

繩手

唄「さまと夕べは誰と寐た、誰と知ぬ火筑紫の人よ、けふは越路のひな人も、こゝによるべの川東、流れの里ぞ賑はしき、繩手通りは櫛の齒を、引ずりの音ぐはら〳〵と、仇口々のそゝり歌、アノ燭臺の蠟燭の、流れの末が案じられ、詞「ヤア粟餅おんこでございますぞ、風味の宜しいのでございますぞ、サコレ〳〵〳〵いと樣ぼん樣お乳母樣、長吉樣もとふくりと、御覽じませ、コレお江戸は八百八丁町、大傳馬町に小傳馬町、ソレこなたの山手は麴町、湯島淺草東叡山、イヤコレ〳〵こちらを見なさい、永代橋に僧三人、兩國橋に鑓三本、三芝居の歌舞妓矢櫓、

座本は勘三きり長桐、ホンニヤレ〳〵そういふ心で有ふとは、知ず知れぬ中なれば、うかれまい物去迚は、詞「ナント太兵衛、此川東は近年花やかな事じやないか、サイヤイ、由良大盡といふ奴が、そらふ祇園の一力でさやしおるげな、此間も里げしきとやらいふ新歌を開いたといふ事じや、ヲヽそうじやげな、何でも法師が三十人、藝子はまかも玉計、お百におげんにばん長に三吾に八重野にお霜に小雪にお信にお幸に、アヽコレ〳〵、三十三間堂の佛の數程いふて居る間に、何ぼ長い夜でもつい更る、更ぬ内にとぞめき共、我家々々へ立歸る、樣子とくより來かゝつて、立聞兩人歩み出、詞「九太夫樣、出平、由良之助が今の噂、アリヤいつそ狂氣の沙汰、其方より是迄の内通、よもやあの樣に有ふとは思はなんだ、扨々我もへんしも折果た、ハイ左樣〳〵、お前樣のお頼み故、由良之助に取入辨慶に成り、そやし立ればたはけの有條、何でも京に一萬年も居る心と見へて、此間も室町の家賃の引合、傍で聞ておりましたが、いやもふ十方もない高利、あんな利で誰が相手に成物で、ハラ扨そういふ馬鹿者故、お國でも儉約すればよい事かと、師直殿へ見もんもせず、たう〳〵大事を仕出した狠狽者、併そう致すが、やはり方便やら相知ねば今一應、サアそう思ふて此間の短刀、平右衛門めに、シイ、コリヤ爰は途中、萬事の手筈は一力にて、そんなら九太夫樣、出平、身に付てから來やれと、欲と悪とをない交し、縄手通りを横切に、祇園町へと三重「急ぎ行く

一力表

色里は、夜の錦や四條通、妹背を結ぶ縄手筋、おかるが母は稚子を、脊中においの足輕く、手を引娘は寺岡が、子よりも孫に目の見へぬ、目病の地藏そんじよ其處と、芝居目當に イで、詞「ノウ小岩、在所と違ふて花の都、賑やかな事じやないか、アレ〳〵あれが祇園樣と、拜むこなたに引ずりの、音もかろ〳〵まはしが包、おかるも今は薄雲と、かゝる憂身の掛行燈、火かげにちらと、詞「かゝ樣じやないかへ、ヲヽ、おかる、替る事もないか、アイ、ヤコレ喜助殿、お前は八百くらの仲居衆に、今の事頼んで、一力へいて下さんせ、わしもそこへと人を除、詞「マア〳〵かゝ樣、お前も御無事で、お嬉しうござんす、ヲヽ、無事は無事ながノウおかる、勘平殿との中の此子、生れ落るより二親の手を放れ、此ばゝがあつちこつちと貰ひ乳で、育上は上たれど、又志てはそなたを尋るいぢらしさ、言聞した迚頑是なし、詞「兄の平右衛門は、由良之助樣の影身に添て内へは戻らず、與一兵衛殿に引繼いてお北も死にやる、やせ百性の悲しさ、そなたに迄勤奉公さすと思や、詞「アヽかゝ樣、もう〳〵そんな事は案じずとよいはいな、ヲヽ、小岩、ようおじやつたの、ちつとの間見ぬ内、テモ大きうなつて、アイおば樣、おなつかしうござります、マヽ、ヽ、かゝ樣も辛度かろ、ドレ三治郎こつちへおじやと、抱取ふりは子持月、子

持とさらに更科や、おば捨山衆の名月に、ふるは涙や薄雲の、晴ぬ思ひぞわりなけれ、詞「マァ〳〵久し振で逢て嬉しい、わしはそんなら六條の旅宿へ行んで、あすの朝山崎へ往ぬる程に、小岩は跡からとゝと一所に戻してたもや、さらば〳〵と母親は、三治抱取いそ〳〵と、六條さして別れ行、女郎も買ず、酒呑ず、忠義に通ふ祇園町、いきせき來かゝる平右衛門、夫と見るよりおかるでないか、詞「ヲヽ、兄様、誰様じやと思ふて恟りした程にの、コレとゝ様、ヲヽ、娘か、ヤナニちとおかるに咄したい事も有れば、暫くそつちへ控へていろ、そんなら小岩、そなたは一力に待て居や、早う、〳〵と追遣れば、平右衛門傍を見廻し、詞「シテ由良之助様は、今夜もやつぱり此一力に居續。一向たわいがないはいな。ホイ是非もない御身持だなァ、頼みに思ふ由良之助様は、放埒惰弱、夫故敵を討所存はないと、四十餘人の人々は、一統に見限果れど、此平右衛門計は、あなた様に限り、よもや〳〵、定て深い御所存が有べいと、毎日毎夜此様に、お跡を慕ひ、此年迄東西わかたぬ遊所をあちこちと、さまよふ内に聞く噂、一ツもろくな事はなく、若や天魔の見入では有るまいかと、食事さへ咽へ通らぬはいやい、詞「ヲヽ、いかい御苦勞なさるゝなァ、其御咄しを聞に付け、悲しいは私が身の上、勘平殿に思ひ思はれ、ヤヽ迄まうけた中なれど、詞「艶書をこしらへ私をば、かほよ様じやと師直を、だませし故にお主の御難義、さあらば其途の殿様へ、何卒お詫に一ツの功、立やうの御思案を、頭むと計雲が、屋敷

と里の二見潟、こぼす涙の玉手箱、かけごがなうて可愛らし、折から來かゝる名うての悪者、泣事知ぬ目玉の出兵衛、歩み來る躰目早き寺岡、目まぜ仕かたで隠るゝ薄雲、跡につゞいて平右衛門、入んとするを、詞「コリヤ待て、儕マァ太い奴じやと呼留られ、大の男も疵持足、土邊におづ〳〵しよるげるに付入、詞「ヤイコリヤ泥坊め、儕が取込おつた刀は、鹽冶判官が切腹した刀、どうぞ五十兩ぐらいに賣てくれと、ナソレ刀をわれに預けたぞよ、夫からマァ毎日々々催促すれど、酢の蒟蒻のと引張を付上る、大かた刀は賣て仕廻、金は宙でくすねたな、アヽコレ必麁相いふまい、左様な非道を搆へ、今日の天理が濟ふか、成程、ケ様に延引成りまするも、有やうは此刀、おらに所望させて貰ひたさ、ヤア〳〵大きな事をまき出した、がわれマァ頽げたは裂やせぬかよ、サァ定ならば今金しよ、イヤ只今と申ては、ないか〳〵、へヽヽヽ、何の有ろぞい、金がなくば、刀をせうか、サァ夫は、サァ、サァ、サァ〳〵〳〵どうじやい、物ぬかせと蹶飛され、詞「成程金子調達致いて差上べい、迚もの事にナ、爰四五日、ならぬ、どうぞ爰四五日の事だ、ならぬ、サそこをどうぞ御了簡、エヽどびつこい置きやがれ、儕が金を拵へる間待根が有ればナ、弘法と張合て、彌勒の出世を待はいやい、エヽあたけたいなと髢髪、取て引寄捻付る、奇怪なりと思はずも、刀の柄に手をかける、詞「ヤア〳〵コリヤ何じや〳〵、わりや是で切か、イヤ全く、イヤ〳〵切心じやあろ、ヲヽこは〳〵そうらしいをひねくるは、切

ても見よふと思ふか、コリヤ面白い〳〵、サア切れ、〳〵〳〵、サアお切、切なはれ、切らぬかやい、ヱ、張合のないアノ鼻たれめと、尻引まくる鼻の先、すり付押付傍若無人、此躰見るより娘の小岩、中に分入コレ申し、餘所の伯父様、マ、、、、待て下さんせいな、コレとゝさん、わしや何にも知ぬけれど、色里といふ物は、身を賣ば金が出來るといふ事、おば様の今の身の上で、よふ知て居まする、わしが様な者でも、一生を賣てなと、金調へて此難義、助かつて下さんせと、眞實眞身の親思ひ、詞「ヲ、よく言た、出かした〳〵と、抱きめ〳〵聲を上、咽び入たる男泣、詞「ヱ、やかましいはい、僧が何ぼとこぼへても、大佛の水鐵炮、ヤモ迚も屆かぬ事じや、金といふては出來まい、よいは此めろめ賣てやつてこまそ、がそんなら彌親判合點か、サア夫は、が又夫がいやなりや其刀、こつちへよこせと懷へ、つゝ込引出す手先をじつと、詞「スリヤどの様にいふても、ならぬはい、ホイ是非に及ばぬ、コリヤ娘、そんなら此お人と連立て行てくれよ、アイそんならばゞ様によいやうに、ヲ、合點だ〳〵、三治郎も明日から、守してやる者はなし、嘸淋しかろ、泣やらぬ様に、ヲ、サよいはいやい、おば様へも心得てや、ヲ、最う〳〵何にも言な、堪らぬ〳〵、此胸が、裂る〳〵とはら〳〵涙、哀を餘所に引立る、呵責の鬼に引るゝ娘の三途川、流れに沈むうたかたの、哀れなく〳〵引れ行、跡にうつとり平右衛門、影見ゆる迄延上り、詞「ア、可愛やなア、何辨へなき子心にも、親を大事と思へばこそ、

差掛つたる今の難義、救ふてくれる志、過分なぞよ、隨分達者に暮してくれいよ、武士の米喰た平右衛門が、妹と云ひ娘迄、傾城遊女と成果るは、いか成過去の悪縁と、くどき立たる獨言、理りせめて哀なり、詞「ア、モウ〳〵言まい〳〵、何の其、忠義の爲だ、遲かれ遠かれ捨る命、是を功に連判の、ヤレ音高しと止むる虚無僧、笠を覗いて、詞「ヤアあなた様は、コリヤ姓名はいふに及ばぬ、テモ、御無用

一力内

問ましよ〳〵。問しやれ〳〵。お客に取ては。珍客失客新客飛脚。伸居は〳〵。どうと番に弱るぞ。新造は〳〵。外科の得意か。藝子は〳〵。度々產ます。悪口いふまい。赤子は〳〵、ソレ詰つた赤子は〳〵。ポペン〳〵 詞「ヲ、おかし、そりや何じやいな。ハテ唐の赤子の泣聲じやはい、ハ、、、、。詰つた〳〵酒じや〳〵。手のなる方へ〳〵。とらまよ〳〵。九太鬼やまだい〳〵。とらまへて酒呑そ〳〵、コリヤとらまへた、ソレ銚子持て〳〵〳〵〳〵。アヽコレ麁相な、あなたは此方のお客じやはいな。イヤ〳〵苦しうない〳〵、めつたに知ぬ顔でもないて。アヽどうやら聞た様な聲じやが。聞た様なとはどうじやぞいやい。アヽ知れた〳〵、由良殿じやの、さらば面ない千鳥を取て、御挨拶を。アヽ御挨拶とは堅い奴〳〵、そう四角四面

では持ぬぞ〳〵。所を持る樣に打くつろいで呑ふか〳〵。呑もせい。由良め。斧め。コリヤ咄せるはい。ヤナニ由良殿、連中が有るか。ヤ、連中とは。ハテ徒黨の人數は揃ひましたか、イヤサ三代相恩のお主の仇を。成程仇には存ぜぬ、鹽冶殿が短氣を出して、剣の舞をやられたらこそ、我々迄此樣に歡樂を仕るじや、國に安穩でおつたらば、一生此樣に緋縮緬の脚布の味をしらずに、死るでがなでざらうと思へば、主人の大恩忘れぬ〳〵。口に諸〻の不淨を言へ共、心に諸〻の不淨を言ず、大丈夫の魂ホ、適〻。イヤ〳〵大丈夫と言れて痛い腹切ふより、粹名を賣て和こい〇〇を自由にするが當世〳〵。ホンニ最前から薄雲が見へぬ、何處へ行た〳〵。薄雲樣は積が痛いといふて。ヱ、積所か爰へ呼べ〳〵。薄雲樣〳〵。由良樣が呼でじやぞへ、呼れて里のうき勤、薄雲といふ名に連て契りは薄き勘平を、慕ふてつらき胸の闇、詞「ヲ、由良樣こゝにかいな。ヲツトサ、〻、〻、爰へ〳〵、何と我等がお敵、美な物で有ふがな。イヤモウ美な段か〳〵、水晶もはだし〳〵。時に薄雲が持ぬ顏で、我等もどうやら陰氣に成た、サ、〻、〻、酒にせい〳〵。ア、申し〳〵由良樣、其樣にあがつては。悪いと知つても是がやめらるゝ物か、サア親仁さそふか。ヲツト頂戴と會所めかふか。ハテ古いやつの、ドリヤお着〳〵。ヤコリヤ蛸でござるの。ハテ蛸は櫻煮入は武士、ハ、〻、〻、〻、ハ、〻、〻、〻。ヤコリヤ面白い、ア、併今日は十三日、鹽冶殿の逮夜。精進するか、ヱ、愚痴なやつ。デモ古主の事。ハテ鹽冶殿

ゞ蛸になりもしられまい。ム、成程、ヤ斯致さふと懷中より、一通取出し押披き、詞「是見さつしやれ、伯州領分の内、濱地二千石相違なく、宛行ふ者也、斧九太夫え、鹽冶判官高貞判、コリヤコレ身共が大事の身代なれ共、家國沒收の上は反古同前、是で此蛸コレ斯と、勿躰なくも押包むを驚く薄雲、大星は、ハテくつさめと鼻へこよりの手轉業、詞「是で彼取も直さず鹽冶殿が蛸になられた、ア是を思へば勿躰なふて捨られも致さぬ、そこで是を又、ヱ、斯致すと、傍に有合大火鉢、其儘打込大悪無道、詞「コレ由良殿、〳〵〳〵、コレ由良殿、是を見さつしやれ〳〵〳〵、鹽冶殿が火あぶりになられたはい、ハ、〻、〻、〻、見さつしやれ、由良殿〳〵、コレサ目を覺さつしやれ。ア、申し、三日このかたの呑續、暫しは此儘御休息を。夫もようござりませふ、左樣なら九太大盡樣。座敷をかへて一献くもふ。サアお出なされませ　唄「深山木の花のあたりに照されて、一人くよ〳〵幾瀬の思ひ、詞「兄樣。妹御目はさめたか。イヱ〳〵まだすやく〳〵と。ムウコレ申し由良之助樣、申し由良之助樣。ア、ざは〳〵とまだお歸りなさらぬか。イヤ〳〵寺岡平右衛門めでござりまする、此御刀は殿樣の血汐をあやし給ひたる腹切刀、匹夫の手に落入ござりましたるを、漸〻買取ましたれ共、私風情の手に觸るは勿躰なし、サ、〻、〻、イザお請取下さりませう。ア、コレ〳〵不吉〳〵、コレ此刀故にこそ、其樣も我等も此難義、まだ仕足いで祈るのか、ヤレ〳〵いまはしや穢れると、あいそ投出し又ころり、たはいやくた

いなかりける。勿躰なしと寺岡は、白洲へひらり一間より、窺ひ立聞斧九太夫、切戸の外には出兵衛がさし足、平右衛門は大星が、伏たる前にぐつと詰かけ、詞「チエ、こなたはのう、コレ此短刀を由良之助に與へ、我鬱憤を晴させよとの御遺言、よもや忘れはなされまい、毎夜々々の御遊興、何たる事だと恨んでも見たり、イヤ〳〵深い御所存ならん、大事の御身と思ふ故、そも山科へ御引越なされてより、今日迄餘所ながらの御供し、爰の門には立、あそこの軒にはつゝくりと、御歸りを見屆けねば、休んだ事はコレでざりませぬはいのう、ゑ様にはがゆふ存じまするも、平右衛門め計は一方ならぬ内縁、卅年以前、川原におゐての意恨、兄民之丞殿をこなた様が切害有て、解死人に成べき所、助けて家の繼木となし、由良之助殿と名を改め、拙者めを平右衛門と改名有て、與一兵衛方へ養子に成たは一昔、此平右衛門以前の身で有ふなれば、大星の氏は穢さぬ物、徒黨の人數を采配して、儕師直が白髮首、引提いで置ふかと、心計いはやれ共、何をいふても足輕風情、輕いやつ故口走らふかと、密事をおかくし下さるゝは、コレ餘まり曲がないと申物、コレ〳〵申し〳〵、ヱ、去迚はお心強い、餘まりむごい胴欲と、臓腑をもみ上泣わめけど、ぐう〳〵といらへなし、ヱ、是非もなしと寺岡は、覺悟極めて腰刀、拔手にすがるを、ヤア放せ、詞「コレ兄様、由良様は呑續、たわいの有ふ筈はない、とつくり思案を、いか様なア、段々とのお心遣ひ、酒でも無理に參らずは、お命も續くまい、醒ての上の一

分別、妹來い、呶「身は萍のよるべなき、里の勤の憂やつらや、詞「コレサ由良殿、由良先生、親玉〳〵、ア、醉ふたぞ〳〵、ア、此頃の酒びたしに、客の出て行もまらぬ仲居めら、いかいたはけと呟きながら門の口、出るより取出す件の狀、掛行燈の跡や先、ゐ〳〵は女の文、詞「ハア何じや、一筆申上ゐ〳〵、かたきム扨は敵、ヱ、敵役のかづら藤八様には合申さず、立役に仕かへ〳〵、ヱ、らつちもない芝居事だ、由良之助殿、こいつは男の文躰、ヱ、彌來る十五日申堅め候件の一義、ム、先達て彼御添削の歌、ふまめたぞ〳〵、ヱ、何々御添削の歌開き摺物二三十枚御越、法師様方藝子様がた、ヱ、何の事だ、ヱ、是は又小口は讀ぬ、ア、病氣養生の願叶ひ、近々何々、近々有馬へ湯治仕候間、何卒金子一歩御借下さるべく候、料理人幸助、ヱ、いま〳〵しいと打捨〳〵又取出し、詞「由良之助殿、原郷右衛門、ヤこいつは物じやと懷中し、出行斧が後影、寐ながら見送る由良之助、かけ出る寺岡尻引からげ出行を。ヤレ待て。ハア。ナ、ナ、イケ。ハア、跡を慕ふて三重「追て行、俄雨にも濡の里、往來は絶ぬ橋の上、川原傳ひに九太夫が、跡に付添ふ菰かぶり、詞「ハイ、一錢やつて下さりませ。付な〳〵と取あへぬ、向ふへ廻つて、詞「九太夫待て。何そふ言ふ聲は足輕めと、いふ間に打込平右衛門、さすがの九太夫身をかはし、扨合せたる刄の光り、始終を窺ふ由良之助、夫共白刄のはつし〳〵、非道の報ひ、忠義の一心、難なく切ふせとゞめの刀。詞「ヤレ平右衛門、此場で殺さば遊所の取沙汰、喰